
昏い道連れ

洸海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昏い道連れ

【Zコード】

Z4558Y

【作者名】

洮海

【あらすじ】

妖退治を生業とする流れ者の雷火は、雨宿りに選んだ木陰で一人の少年と出会う。神官戦士になるために必要な「しるし」探しの途中だという彼と、ひとまず共に行くことにする雷火。だが少年の背後には、ひつそりとついて来る不吉な昏い影があつた。和風異世界ファンタジー。サイトにはダウンロード版のみ有。残酷描写はたまに少しあるだけで、タグを付けるか付けまいか悩むレベルです。

— 雨宿り (1) (前書き)

上代と室町だか江戸だかをじりぢりにしたよつな、なんぢやつてジヤパーズファンタジー設定です。神道用語や祝詞も多く出てきますが、現実の定義や用法とは別物としてじい覽下とい。

あんた、雷は好きかい？

俺は大好きだね。自分の名前に雷の文字が入ってるからってのもあるが、真っ黒な雲の中にひらめく稻妻の光は、他のどんなものよりも格好いいじゃねえか。犬や狐や、小胆な奴らが、こぞつて穴蔵に頭をつつこんで震えている遙か上で、雲を引き裂き、空を駆け抜けろ。俺もあんな風に生きたいもんだ。

もつとも、そんな事が言えるのも、そいつが雨を連れて来ない場合だけだ。なぜかつて、俺は宿なしだから。

たまたま屋根の下にいる時はいいぜ、自分は濡れずに見物してられるからな。だが、こんな風に野原の真ん中でいきなりザーッと来られた日には、まつたく！

「くそったれ！」

文句のひとつも言いたくなるつもんだ。空きつ腹に雨がしみるぜ、ちくしょうめ。

右にも左にも、人家はまつたく見当たらなかつた。うち捨てられて荒れ放題の畠、ガマだの葦だのがぼうぼうに茂つた湿地。その間を走るこの小道の先には、前の宿でおかみが言つたのが正しければ、そろそろ豊平とよひらの村が見えて来るはずだ。そしてそこには、妖あやかし退治で日銭を稼ぐ俺みたいな流れ者に、仕事や情報を恵んでくれる周旋屋がある。

……はず、なんだがな。くそ、雨で行く手が見えやしねえ。ああ、腹へつた。

手の甲で何度も目を拭つたが、後から後から滝のよつて雨水がしだたり落ちて、何もかもがぼんやりとにじんでいた。

だから、道端に木立が見えた時も、俺はそこに誰か あるいは

『何か』 がいるとは思わず、やれ助かつたと木陰に駆け込んだだけだった。

「ああくそ、ひでえ田にあつたぜ」

ふつ、と息をつくと、水しづきが散った。いやもう、頭のてっぺんから爪先まで、ずぶ濡れもいいとこだ。どつからどこまで自分の体で、着物で、草鞋なんか、わかりやしねえ。田ん玉まで流れちまつてやしねえだろうな。

あれこれ悪態をつきながら、なおも降り続く雨を恨めしく見上げた時だった。

フツ、と後ろで何かが息を吐いた。その熱が体に届く前に、俺はぱつと振り返り、腰に差した刀を抜いた。

待つてましたとばかり、雪のような白い輝きがこぼれる。俺の商売道具にして唯一の相棒、妖退治のために神殿で清められた銘刀、月華。どんな妖だろうと、こいつの前には……

「つて、なんだオイ」

構えた刃を下ろし、俺は拍子抜けした声をもらした。薄暗がりの中にいたのは、紛らわしくも真っ黒の犬つころだつたのだ。子犬と言つにはでかいが、まだ成犬じゃない。クウンと甘えるように鼻を鳴らし、無邪気な黒い目でじつとこっちを見上げてやがる。

「びつくりさせんじやねえよ、わんころが。腹がへつてんのか？」

悪いな、俺もだ。おまえにやる物がありや、自分で食つてるよ

やれやれ。俺はため息をついて月華を鞘に収めた。わんころはそれをじつと見つめ、それからおもむろに近寄ると、ふんふんと俺の手を嗅いだ。

「だから、何も持つてねえつひとつてんだ。シッシッ」

別に犬は嫌いじゃねえが、こつもまとわりつかれちや、落ち着かねえ。追い払おうとしたのに、わんころはしつこく俺の臭いを嗅ぎ、前足でちよいと袂を引っ掻きやがつた。

「ええい、食つちまうぞコリワ！」

業を煮やして俺がわめくのと、

「クロガネ、戻つてこい」

子供の声が言つのが、同時だつた。俺は犬を驚かそうとして両手を振り上げたまま、ぽかんとなつて声のした方を振り向いた。

木立の奥の暗がりに、ぼうつと白いものが浮かぶ。さては今度こそ妖か、と俺は警戒したが、じきに正体がわかつた。白犬を連れた、白い着物の子供だ。見たところ十一歳かそこらだが、こんな所で何してやがるんだ？

黒犬は尻尾をくるりと巻き上げて、嬉しそうにそつちへ駆け戻つて行つた。小僧は黒犬の頭をちょっととなでてから、顔を上げてまつすぐに俺を見た。

「脅かしてごめんよ、おじさん。こいつ人懐っこくて、構つてくれそうな人を見付けたらすぐに飛んでっちゃうんだ」

「誰がおじさんだ、お兄さんと言え」

餓鬼から見りやあつさんでも、俺はまだ三十路のかなり手前だ。見知らぬ餓鬼から小父さんおじなんぞと呼ばれるほど、老けちゃいねえ。俺が唸ると、小僧は驚いたように目を丸くした。それからすぐ、面白そうに笑い出す。

「ごめん、お兄さん。俺あんまり、大人のひとの歳つて分かんなくてさ。第一この天氣でこの暗がりでその格好じや、おじさんでもおじいさんでも、区別なんてつかないよ」

笑われて俺は自分のなりを見下ろし、苦笑してしまつた。確かに、薄暗い木陰にずぶ濡れの男がぬーっと立つてたんじや、人か化け物かも分からねえな。

「まあな。で、おまえさんはどこの誰だい。その装束つてことは、神殿の小僧か」

俺が何げなく問うと、小僧はふつと表情を消した。どうやら身の上についちゃ、あんまり詮索されたかねえらしい。短い沈黙の後、小僧は作つたような明るい口調で答えた。

「元は深谷の神殿にいたんだ。でも、一人前になるには、外へも出なきやいけないって言われてさ。探し物の途中なんだ。そうそう、

おじさんを驚かせたこいつは黒鉄、こいつの白いのは雪白。俺は真理だよ」

「ご大層な名前だな」

俺は呆れて一匹の犬を眺めた。わんころなんぞ、シロクロでいいじゃねえか。気取りやがつて、さすが神殿育ちはお犬様も違うつてことかねえ。小僧に至つては真理サマと来る。ペッペつ。それはともかく、名乗られちゃこっちも黙つてるわけにやいかねえ。

「俺はライカ、雷の火だ。流れ者でね」

「うん、賞金稼ぎだね。さっきの刀でわかつた」

けろりと言われ、俺は顔をこわばらせた。無理に笑みを作ると、

口が半分がひきつる。

「おい小僧、長生きしたきや、その呼び方はするんじやねえ」

「どうして？ 流れ者とか根無し草とか言つより、正しい呼び方だと思つけど」

きょとんとした小僧の面を張り飛ばさなかつたのは、ひとえに腹が減りすぎて怒りも長続きしなかつたからだ。

「正しくても、俺たちはそう呼ばれるのが嫌いなんだよ。向かつ腹が立つ。特に神殿の奴に言われるとな。神官どもは、自分たちが妖退治をするのは金のためじゃなく、里の人間を守るためだ、なんぞとぬかしやがる」

「だつて本当のことだよ」

「大人が話してる間は黙つてろ。で、奴らがいちいちかまけてられねえ雑魚には、雀の涙ほどの賞金をかけて、俺たちみたいな腕つ筋だけの荒くれ者が、日銭を稼げるようにしてやつてる、つてわけだ。飯の種をくれてやつてんだ、ありがたく思え、つてな」

大体があの連中は、神官以外の奴が妖と関ると、途端にクソでも見るような目つきをしやがる。月華みたいな刀は妖を斬つて穢れが溜まるから、時々神殿へ持つて行つて清める必要があるんだが、そんな時でも、絶対に正面からは入らせちゃくれねえのだ。

「ふうん。俺が聞いた話とはずいぶん違うね」

小僧は単純に不思議そつな顔をしてつぶやいた。俺はなんだか疲れてしまつて、近くの木にもたれると、ずるずる座り込んだ。

一 雨宿り（2）

「何を聞いたんだか知らねえが、世の中は良い子ちゃんの耳に入る気持ちのいい言葉ほどには、きれいでも楽しくもねえって事を」「ため息をつくと、腹の中に残っていた最後の空氣までなくなつたような気がした。俺は小僧を見上げ、「おい、なんか食うもん持つてねえか」と投げやりに訊いた。

「ごめん。俺も昨日から何も食べてないんだ」

がつくり。俺は頭を膝の間に落とした。隣に小僧が来て、すとんと腰を下ろす。ちえつ、本当にこの一匹の犬を食つてやれたらいいんだがなあ。

と、小僧は何やらじりじりとやつて、胴乱から小さな物を取り出した。

「これぐらいならあるけど」

この際、口に入るならなんでもいい。俺はぱつと小僧の手に飛びついた。そしてふたたびがつくりする。木の皮じゃねえか。

「おなかは膨れないけど、少しは気が紛れるよ」

ほら、と小僧が言うので、何もないよりはマシかとその木つ端を受け取つてくわえた。しがんでいると、甘いような苦いような、妙な味が染み出でくる。確かに腹の足しにはならねえが、なんとなく飢えがおさまつたような気がした。不思議なもんだ。

俺が骨をしゃぶる犬みたいにいじましく木の皮をかじつてみると、横で小僧が勝手にしゃべりだした。

「俺がいた深谷の神殿ではね、賞金稼ぎには……あ、ごめん。流れ者には感謝しろって教えられたんだ」

「へーえ、そりやまた奇特なこつた」

「神官の中でも法部に属する戦士たちは、いつも何人かで組んで妖退治をしているから、一人で勝手にあちこちに行くことは出来ないんだつて。一匹一匹の小さな妖が悪さをしたからつて、ちょっと行

つて退治する、つてことが出来ないんだよ。そこで、おじ……お兄さんたちの出番だつてわけ」

小僧はそこまで言つて、俺が聞いてるかどうか確かめるように、こっちの顔を覗き込んだ。ちえつ、まったく、なんて目をしてやがるんだか。純真無垢つてのはこいつのを言つのかね。

「知つてる？ 賞金稼ぎの中には、元神官戦士つて人も結構いるんだよ」

「そいつあ初耳だな」

俺は思わず本氣で驚いてしまつた。小僧は得たりとばかり、にっこりする。

「きつとおじ……お兄さんみたいに神官を嫌う人が多いから、言わないんじゃないかな」

厭味な小僧だな、いちいち言い直すんじゃねえよ、ちくしょう。俺は苦い顔で睨んでやつたが、薄暗がりだから見えなかつたらしい。

小僧は気にせず話を続けた。

「でも俺たちはそういう人の話をよく聞くよ。人を守りたくて神官になつたのに、まるで自由がきかないから、しまいに誰かを助けるために飛び出して行つちゃうんだつてさ」

「それが本当なら、神官も捨てたもんじゃねえがな。しかし俺が見てきた限りじゃ、神官なんぞ、どいつもこいつもくそつたれだ」

俺は言い捨てて、雨足の弱まつてきた空を見上げた。さつきよう明るくなつてきたようだ。これなら、もうじき出発できるだひう。今日中には豊平に着きたいからな。

小僧は、俺があんまり感動しなかつたせいか、ちょいとがつかりした様子で黙り込んだ。これだから餓鬼は嫌いなんだ、なんで俺がこんな気分にならなきゃなんねえんだよ？ 俺は弱い者いじめした悪党か？ 本当のことを言つただけだつてのに！ ああもう。

しそうがねえ。俺はため息をついて、小僧の話に調子を合わせてやつた。

「まあな、おまえがいたような田舎の神殿じゃ、話は違うのかも知

れねえな。俺はだいたい、豊かな村や大きな町を回って、せこい妖怪ばかり退治してるからよ。そういう所の神殿はどかーんとでかくて立派だから、神官の連中もお高くとまつてやがるんだ

「そうかもね」

小僧は言つて、神妙な顔つきでうなずいた。やれやれ。

「おつ……雨がやんだみたいだな。んじやな」

俺は立ち上がると、口にくわえていた木の皮をちょいとつまんで、

「これ、ありがとよ

礼を言つてからその辺にポイと捨てた。俺が歩きだすより早く、小僧が慌てて立ち上がり、一匹の犬とそろって俺を見上げた。おいで、まさか。

「もう行くの？」

……待て。ちょっと待て、待てつたら！ そんな目で俺を見るな！ しかも三人がかりとは卑怯だぞ！

「勘弁してくれ」

俺はうめいて顔を覆つた。冗談じゃねえ、てめえの飯もままならねえつてのに、いきなり一人と一匹の食いぶちまで面倒見られるかつてんだ。

苦惱する俺を見て、小僧はおかしそうな笑い声を立てた。

「待つてよ、俺まだ何も言つてないよ」

「言つたも同然だろうが、くそ、わんこ今まで一緒になつて見つめやがつて！」

「あはは、おじさん、犬好きなんだ」

「おじさんじやねえつつってんだろ！」

凄んで見せたが、効果はなかつた。ごめんごめん、なんて言いながら、小僧はけたけた笑つてやがる。

「はあ……まつたく。あのな、俺はこれから豊平に行って、周旋屋で仕事もらつて、それを片付けなきゃ飯一杯にもありつけねえんだぞ。ついて来たつて、いい事なんざなんつにもねえんだぞ」

「心配しなくても、俺だつて妖退治に手を貸せるよ。こう見えても

一応、神官としての修行は積んでるからね。簡単な法術は使えるし、剣も持つてる。雪白と黒鉄も戦えるよ」

「どうだかな」

俺は胡散臭い気分で一匹の犬を見やつた。黒助の方は相変わらず機嫌良さそうに、尻尾を小さく揺らしながら無邪気に俺を見つめている。白い方は逆に、俺を踏みするような目付きをしやがつた。何様のつもりだ、このわんころが。

「どっちにしろおまえらの行き先も豊平だつてんなら、しょうがねえ、『一緒にするさ。けど、いいのか？』何か探し物をしてるんだろ」念のため小僧に確かめると、なぜだか小僧は急に曖昧な顔になつてうなずいた。

「うん、いいんだ。どこにあるのか、はっきり分かつてるわけじゃないから」

「……へえ？」

「いつたい何を探してるってんだ？ ちよいと気になるが、どうせそう長く一緒にいるわけでもねえだろ？ 俺の知ったこっちゃやねえな。」

「じゃ、日が暮れちまわねえ内に行くか！」

景気づけに威勢よく上げた声に調子を合わせ、疲れた足を励まして歩きだす。

少し進んでから、俺はふと何かが気にかかり、ちらつと後ろを振り返った。小僧とわんころはしつかりついて来ている。どうやら、空腹のあまり木陰でまぼろしを見た、という都合のいい話にはなつてくれねえらしい。

（しかも……なんか余計なもんまでいやがるぞ）

俺は何も見なかつたふりで、また前を向いた。だが間違えようもなく、俺たちのずっと後ろに、そこだけまだ雨が止んでいないかのような暗がりが、うつそりと佇んでいた。

振り向かなくても分かる。そいつは、俺たちを黙つて見送り……

それからゆつくり、後を追つて動き出すのだ。

妖とは少し気配が違つ。今のところ悪をする様子もない。下手につついて招き寄せるより、放つておきや自然に離れてくれるだろう。たぶん。

(でなけりや、こここの出番つてだけだ)

俺は左手で月華の鞘を握り、そうならないことを祈つた。この刀であいつが斬れるかどうか、ちょいと自信がなかつたからだ。

豊平村はその名の通り、豊かな平地だ。田圃には稲が青々と茂り、構えのでかい家が続いている。村の中心部に近づくにつれて、街道沿いにちまたました家が増えてきた。里の者や旅人を相手にした、色々な店の並びだ。

俺の後ろを歩きながら、小僧は物珍しげに、やたらきょろきょろしている。まあ、あちこちに走つてつたり店先で騒いだりしねえだけ良しとするか……。里に入る前にあの影も薄くなつて消えちまつたようだし、贅沢言つてちやきりがねえ。

道に面した店はどれも、構えはそれなりだが、商いは田舎の里らしく地味なもんばかりだ。鋳掛屋だの荒物屋だの、茶店だの。もちろん旅籠もあるが、今の俺たちや文無しだ。ちえつ、早いとこ周旋屋を見付けねえとな。

「にぎやかな町だね」

ふいに小僧が言った。俺は振り返り、呆れ顔をする。

「深谷ってのはどんなんド田舎だ？ 確かにここはそれなりの村じやあるが、町なんて言えるもんじやねえぞ。町つてのはな、もつと色んな店がうわーっと並んでて、人通りもこんなもんじやねえ。飯屋に煮売屋、小間物屋。職人だつて建具師に大工に庭師に細工師とわんさか住んでるもんだ」

「ふうん。想像つかないや。深谷はね、百姓と炭焼きと獵師ぐらいしかいなくて、神殿にも明師様と書士さんがいるだけだつたんだ」「ミコウシ？ ああ、祭礼を司る神官だな。それと記録係のオマケつきか」

神殿てのは、神様を祀つてるだけじゃなく、里の住民の記録をつけてもいる。生れた、死んだ、結婚した。そのいちいちに神殿が

絡むんだから、当然だつて言やあ当然だ。で、もちろんそういう事がある度に金がかかる。神官サマが帳簿までつけてたんじや、肝心の祭礼がおろそかになるつてんで、その仕事専門の下つ端がいるわけで。

「そんなんド田舎じや、神官一人でも事足りるだらうに。金が余つてるんなら、俺によこせつてんだ」

けつ、と俺が毒づくと、小僧はこっちを見上げて、大人じみた苦笑を浮かべやがつた。

「明師様はもうだいぶ、お年だつたからね。書き物をするには田が不自由だつたんだよ」

「おまえにやらせりや 手習いにもなつて、一石一鳥じやねえか。おつ、周旋屋の看板だ。やつと見付けたぞ。ちょっとでも前払いしてくれりやいいんだがな」

「ごめんよ、と声をかけながら暖簾をくぐる。中には人つ子一人いなかつた。ここが平和な里だつて証拠だな。こりや、仕事があるかどうか怪しいぞ。

「誰かいねえのかい」

声を張り上げると、奥から「はいはい、ただ今」と男が一人、慌ててやつて來た。血色のいいぼつちやりした丸顔の中年だ。何がなし氣に食わねえが、周旋屋の親父がどうでも仕事は仕事、錢は錢。「よう。どうやらここは平和な里らしげが、流れ者もおこぼれにあずからせちゃくれねえか。できれば手つ取り早く済ませられるのがいいんだがね」

「それでしたら……」

親父は言いかけ、ぎょっと目を剥いた。なんなんだ？

俺は背後を振り返つて、ああ、と納得した。餓鬼に犬ころまで連れた賞金稼ぎなんざ、そつそつお目にかかるもんじやねえよな。

「後ろの奴らは気にすんなよ。そちらで行き会つてたまたま一緒になつただけだ」

「はあ……でも、神官様で？」

「まさか。こいつは白装束を着ちゃいるが、まだ神官じゃねえ。——人前になるために修行してるところなんだよ」

「それはまた、こんなに幼いのに感心なことで」

親父は愛想笑いを浮かべ、揉み手でもしそうな様子で小僧の顔色をうががう。やつぱり気に食わねえ。

「そいつのこたあどうでもいい。こちとら空きつ腹抱えて待つてんだよ、さつむと仕事をよこしやがれ」

苛々して物言いが剣呑になる。くそ、腹が減りすぎて親父の機嫌を取る余裕もありやしねえ。もちもちしたその頬つべた、むしりとつて食つてやろうか。

俺の心中が分かつたのか、親父は慌ててこちらに向き直ると、いそいそと帳面をめぐりだした。

「はいはい、失礼致しました。何分この豊平は御靈も妖もとんと出ない所ですからね、神殿の方にもここ数年はまつたくお願ひすることもないほどでして……でもまあ、お困りのようだから、これなんていかがです」

親父は帳面を広げ、俺の方に向けて差し出した。俺はざつと目を通し、妙な顔になる。

「ふーん？」

ふじ

要するに、この巫師を追い出してくれつてことかい

「ええ、そうです。村外れに住み着いておりましてね、何やら怪しい影やら奇妙な生き物が、その家の近くをうろついているのが薄気味悪くて。とは言つても今のところは格別悪さをするでもないんで、神殿にお願いするほどのことでもありませんし。第一、神官様において頂くとなつたら、謝礼もかなりのものですから、とてもとても」「なんで自分たちで追い出さねえんだい。里の衆が皆して鍬持つて脅しをかけりや、一発で出て行きそうな気がするがね」

「無茶おっしゃらんで下さこよ。あたしらは妖のことも御靈のことも、何も知らんのですよ。下手をして怒らせたらどうなるか！ だから皆で金を出し合つて、賞金稼ぎに頼むことにしたんですよ」

親父は大袈裟なほどおびえた顔をして、身震いした。やれやれ、

白けちまつ。

「まあな、流れ者だつたら祟られようが呪い殺されようが、あんた
らは痛くも痒くもねえからな」

「何をおっしゃこますか、そちらさんは妖退治の玄人でしょ？」
年寄りの巫師ひとりぐらい、簡単なものでしょ。ああそりだ、
引き受けて頂けるのなら、いくらか前払いしますよ。腹が減つては
戦は出来ぬ。そうでしょ？」

痛いところを突いてきやがる。俺は苦笑いするしかなかつた。村
外れにおとなしく住まつてゐる年寄りを追い出すなんざ、あんまり氣
持ちのいい仕事じゃねえが、仕方ねえ。こちとら腹と背中がくつ
きそうなんだ。

「ああ、確かに。ほかには何もねえんだろ？ 引き受けるわ」

てなわけで、俺と小僧は無事、かなり遅い昼飯にありついた。

一膳飯屋はもう店仕舞いをしかけていたが、こういう時は子供と
犬ころつて取り合はせは激烈によく効く。給仕の女が、俺のことを
人買ひでも見るよつに睨みやがつたのは、ちと引っ掛かるが、とも
かくまあ飯が食えりや何だつていいさ。

「お、来た来た。二日ぶりのまともな飯だ、ありがてえ
湯気を立ててゐる飯に両手を合わせてから、まずは一口。

「…………？」

おかしいな、こんだけ腹が減つてりや大概のものは美味いはずな
んだが。まずはねえんだが、何かこう、足りねえって言つたか、妙
な味だな。茄子の煮物の方は……うん、美味い。はて、どういうこ
つた？

複雑な顔でもぐもぐ口を動かしつつ、思わずちぢつと店の奥を見
る。たまたま目が合つた給仕の女が、俺の顔を見て眉を逆立てやが
つた。うへえ、くわばらくわばらく。

慌てて飯に向き直つて一心に食ひ、あらかた片付いた頃になつて
小僧が口をきいた。

「雷火さん」

名前で呼びかけられ、およ、と俺は目をしばたいた。何度もおじさんと言つてはお兄さんと言い直すのが、いよいよ面倒になつたつてわけか。

「なんだ？」

「俺たちが追い出すつていう、フシつて……何？」

「おずおずと訊かれ、俺は目を丸くした。

「知らねえのか？ おいおい、冗談だろ。深谷つてのがいかにド田舎でも、一人ぐらいなかつたのか？」

「いなかつたよ。神殿でも教わらなかつたし」

「はあ……こりやたまげた。まあ、そんな所じや巫師がどうのと教えてもしょうがねえよな。そうだな、どう言やあいいか……」

俺は、足元で残り物をがつついでいる一匹の犬にちょっと目をやつてから、もつたいぶつて説明してやつた。

「巫師つてのはな、神官とは違うやり方で、妖や御靈を呼び寄せたり操つたりする連中さ。それで人に呪いをかけたり、人の秘密を暴いたり、縁結びや縁切りをしたりするんだ」

「悪い人たちなんだね？」

小僧が眉をひそめたので、俺はますます先輩面をしてそつくり返つた。

「まあ大半はそうだな。話の通じねえ恐ろしいジジババばかりだが、皆が皆そつてわけじやねえ。病や怪我や災難をふつかけることも出来るが、逆のこと、つまり治す方も出来るんだ。ただ神官と違つて連中は自分勝手にやつてるから、そこんとこが厄介なのさ。病を治して貰いに行つたのに、怒らせたら逆にもつと悪くされるかも知れねえ。道ですれ違つたのに挨拶しなかつたら、次の朝には大事な牛が死んでるかも知れねえ」

そこまで言つて、茶をする。小僧は難しそうな顔で考え込んでいた。

「やっぱり悪い人みたいに聞こえるけど」

「悪いことをするが、貧乏人にとっちゃ重宝もあるのさ。さつきの親父も言つてたろ、神官は金がかかる、つて。巫師の方がたいていは安上がりなんだ。それに、隣のいけすかねえじじいをぎつくり腰してくれとか、村一番の別嬪さんを嫁にしたいとか、そういう頼み事は神官には出来ねえしな」

俺はちよつと意地の悪い気分になつて、にやにやしながら言つた。はてさて、神殿育ちの純真な小僧がどんな反応をするものや。ところが小僧が言つたことときたら、俺の予想とはてんて違つていた。

「でもこの村では、氣味が悪いから追い出そうって言つんだね。しかも自分たちでするんじやなしに、よそ者にやらせようとしてる。なんだか嫌な感じだなあ」

およよ。こりや驚いたね。俺はとつたに何と言つたら良いものか分からず、馬鹿みたいにぽかんと口を開けて絶句した。真理の名前は伊達じやねえつてことらしい。

俺がまじまじと見ているのに気付き、小僧は顔を上げて「なに」と不審げに眉を寄せた。ちょいとばかし照れもまじっていたかも知れない。

「いやあ、おまえさん、世間知らずかと思ひきや、なかなか言つじやねえか」

「えつ……俺、何か変なこと言つた?」

途端に小僧は赤くなる。俺はにやつとして身を屈め、小僧に耳打ちした。

「いや、この仕事が気に食わねえのは俺も同じさ。でもそれは、村中じや黙つてな」

それから俺はまた体を起して、やれやれとこれ見よがしに伸びをしてから、楊枝で歯をせせつた。小僧は複雑な顔で俺を眺めていたが、やがてその目を楊枝入れに移し、おもむろに一本抜いて俺の真似を始めやがつた。

「おいおい、やめとけよ。神官にならうつてえ奴が下衆な癖をつけ

ちや困るぜ」

「そつなの？」

きよとんとして問い合わせ返し、小僧は楊枝を前歯で挟んでぶらぶらさせ。何やつてんだ、こいつは。俺は苦笑してその楊枝を取り上げ、空になつた茶碗に放りこんだ。

「それより、おまえのことを聞かせろよ。何か探してゐつたよな。何なんだ？」

俺の質問に、すぐには返事がなかつた。小僧は頭を伏せて、未練がましく楊枝を見ているふりをしたが、じばらくしてようやくぽつりと答えた。

「しるし」

「あ？」

「しるしを探してゐんだ。一人前になる前に、誰もが自分だけの『しるし』を見付けなきやいけないんだつて。それが何なのかは人によつて様々だけど、見れば必ず、それが自分の『しるし』だと分かる。だから、どこにあるどんな物かは、誰にも教えることは出来ないんだつてさ」

「……何だそりや。んじや何か、『これだ!』つて閃くまで、いつまでもどこまでも探し続けなきやならねえつてことか? だったらそちらで適当なもの見繕つて帰つたつて、バレねえんじやねえのかい」

神官のやるこたあよく分からん。呆れた俺に、小僧は真剣な顔で首を振つた。

「そういう問題じやないんだ。法術や剣術を修めても、『しるし』を見付けなきや、自分を守つてくれる一番大事な力が得られないんだつて」

「へーえ。普通はどうこつものなんだ?」

「よく知らないんだ。深谷には戦士がいなかつたから」「明師さんは、妖退治はしねえのか」

「儀式で祓えるものなら退治するよ。でも武器や法術で戦うのは、

法部の人。法師とか戦士とかね。俺はまだ侍士だけど。『しるし』はね、時々来て下さつてた羽山の法師様の話だと、鴉や犬みたいな動物だつたり、草木や川だつたりするんだつて。太陽や月をしるしに持つ人は、ものすごく強いらしいよ

話が戦士のことになつた途端、嬉しそうによくまあしゃべること。それだけ憧れてるつてことなんだろうなあ。その笑顔があんまり無邪気なもんで、俺は、胸に浮かんだ疑問はどうぞへ蹴つ飛ばして、別の事を口にした。

「おまえのも、何か格好いい『しるし』だといいな。何たつて名前が真理なんだ、それに見合うのになきやな」

「俺は別に、蟻とか石でもいいんだけどね」

照れたように言いながらも、真理は期待に目を輝かせている。だから俺は言い出せなかつた。

おまえみたいな小せえ子供が、もう一人前になるための『しるし』探しに出されるもんなのか、とか。

誰も深谷の名前を聞いたことがねえような遠い土地まで来なきや、『しるし』つてのは見付からねえもんのか、とか。

そういうことは、訊いちゃいけねえ気がした。

三

腹ごしらえを済ませて一休みした後、俺と小僧は連れ立つて村外へ向かった。もちろん、白黒のわんこらども一緒にだ。

巫師の住み着いたあばら家つてのは、田園の間を走る小川に沿つて、ずっと川上へ行つたところにあるひて話だつたが、途中やたらと一匹の犬があちこち嗅ぎ回るんで、はからねえつたらありやしないえ。日が暮れる前にやつつけちまいてえのに、人間様の都合なんざお構いなしだ。

田園にはちょうど水が張つてある時期で、稻の青々とした葉が風にそいでいる。世話が行き届いていると見えて、何だか偽物臭えぐらいにきれいだ。川っぺりにはぼつぼつと若木が植えられていたりして、趣もある。しかし、あいにくこちとら風流とは縁遠い流れ者だ。わんころに付き合つて、田園を見ながら歌を詠むつてわけにもいかねえ。

「おい真理、この白黒兄弟、もちつときちんとしつけとけよ。道草ばっか食いやがつて

「何がが気になるんだよ」

答えた小僧も落ち着かない様子で、辺りを窺つている。

「何かつて、何が」

「分からぬ。でも、この村は変だつて気がする」

「おまえ、ほかの村を見たことがあるのか？」

思わずそう言つた俺に、小僧はいっちょまえにムツとした顔を向けた。

「そういう意味じゃなくて」

「ああ、分かつた、分かつてゐる。悪かつた」

俺は慌てて手を挙げ、小僧を遮つた。やれやれ、冗談が通じねえ

なあ。俺は足を止めてため息をつき、草むらでふんふんやってるわんこらんどを見やつた。

「確かに、この村はどことなく妙な空気が流れてる。それは俺も同感だよ。このぐらいの村になりや、人里に群がる小物の妖がちらほらしてゐるもんだ。神殿がすぐ近くにある場合は別だが、こここの神殿はどうやらちょっと遠いようだし、そこらに何か飛んでたつておかしかねえ。だがさつぱり見当たらねえとなると、村全体によつぽど強力なまじないでもかけてあるのか、その村外れの巫師がこの辺の妖を一匹残らず呼び集めてるのか……」

曖昧に言葉を濁した俺に代わつて、小僧が偉そくに締めくくつた。

「何にしろ油断は禁物、だね」

生意氣な。そりや俺の台詞だつつの。とは思えど、それを口に出しちゃ大人氣ねえ。

「そーゆーこつた

それだけ言つて、ぺしんと軽く小僧の頭をはたいてやつた。

「おり行くぞわんこらんども。さつさと片付けて財布にも餌をやらねえと、また野宿になつちまうぞ。おまえらは地べたで良くてもな、人間様はたまにや布団で寝たいんだ」

白黒一匹を急き立てながら、さらに小川沿いの道を進む。田圃が途切れで人影もなくなつた辺りで、ようやく目指す小屋が見付かつた。どうやら水車小屋だつたらしいが、ぶつ壊れちまつてるのは遠目にも分かつた。茅葺き屋根にベンベン草が生えてらあ。

「ふーむ……見たとこ、特に変なもんはいねえな」

ちよいと手前で立ち止まり、とつくり小屋を眺めてみる。妖の姿はちらとも見えねえし、御靈の影もねえ。周旋屋の親父が言つてた様子とは、ちと違うんじやないか？

「しかし何だね、嫌な感じがしやがるよ

無意識に手がうなじをさすつてゐた。妖にしろ御靈にしろ、性質の悪いのがいやがる時は、ここら辺がムズムズする。今もそうだ。横を見ると、小僧は打つて変わって真剣な顔つきになつていた。

「足の犬はそれぞれ小屋を睨み、喉の奥で小さく唸つてゐる。ビリやう、こいつらにも分かるらしい。

「とりあえず、俺が様子を見るからな。おまえらは下がつていろよ」
餓鬼とわんこに先陣を切らせるわけにやいかねえ。俺は用心し
いしい小屋に近付き、まだ明るいのこきつつけられた戸を開いた。

「おい、誰かいるか

バンバン。てのひらで一回。返事はない。

「いるんだる。巫師のじこさんよ」

ドンドンドンドン。拳で三回、呑き終えるや否や、ゴトコト戸が開いた。隙間から覗いた。面相に、俺はぎょつとなつて後ずさる。シミと皺だらけの、病葉みてえな皮が骸骨にへばりついた、なんとも化け物じみた顔だ。田ん玉は白く濁つていたが、それでも俺が見えるのか、ぎょろりとこいつを睨んでやがる。戸を開けた手はまるつきり枯れ枝みてえだ。

「よつ。村の周旋屋でちょっと頬まreteな

なんとか俺がそう言つた途端、犬どもがワンワン吠えだした。くそ、うるせえぞ！ 気が散るじゃねえか。

じじいは瞬きもせずに俺を見つめたまま、ゆつくり首を傾げた。そのままぽろつと首がもげちまうそうだ。うへえ。俺はゆがめた顔をごまかそつと咳払いして、言つても無駄だと予感しながら言葉を続けた。

「あんたが何をしたか知らねえが、村の連中はあんたがいるだけで不気味なんだよ。ここからあんたを追い出してくれつて頬まれたんだ」

「わしゃあ……出て、行かん……ぞお」

嗄れた声が、じじいの喉から隙間風よろしく漏れてくる。今にも死にそうな声のくせに、田だけはぎょりじつて、おつかねえつたらいいぜ。

「そつは言つてもな、こんなとこに住んでたつて、あんた何にもい

い事はねえだろ？ 村人に嫌われるんじゃ、客も来ねえんだし…

…つて、ああむつ、ワンワンうるせえな！」

俺が後ろをちらりと見て舌打ちしたと同時に、じじいがにたあつ

と笑つた。

「村の衆はあ、親切じゃで、な」

「何？ まさか」

やべえ！ 背筋に冷たいものが走り、俺は反射的に大きく飛び出すつた。

入れ替わりに白と黒の影がさつと前へ飛び出し、じじいに躍りかかる。その瞬間、じじいの体が音を立てて破裂した。

「うわッ！」

固いものに突き飛ばされ、俺はぶざまにひっくり返つた。ギャンツ、とわんころの悲鳴が聞こえる。ちくしょ、何がどうなつてんだ！？

頭を振つて起き上がるつとしたが、俺の体はでけえ木の根っこにがつちり押さえ込まれていた。なんなんだ、くそ！ 月華を抜こうにも手が動かせねえ。じたばたしていると、根っこに見えたものが、ナメクジみたにぐにやりと動いた。

「いつてえ！ くそおッ、離しやがれ化け物め、この……うげ！」

暴れると、根っこもどきがますます強く締め付けてきやがつた。無数の細い管が伸びて俺の体にはりつき、次々にブスリと突き刺さる。俺を針山にする気かよ！

その瞬間、俺の目の前にぬつと何かが現れた。

と思つたら黒鉄だ。化け物の根っこに食らいつき、牙を突き立てる。途端に化け物は、釣り上げられた魚よろしくビチビチ跳ねて、俺を離した。しめた！

隙を逃さず素早く立ち上がり、月華を抜く。巨大な根っこは犬を振り落とすと暴れまくつっていたが、黒鉄の奴はがつちり食らいついたままだ。いいぞ、やるじゃねえか。

「今度はこっちの番だ、よくもやりやあがつたな！」

俺は月華を振りかぶり、のたうつ木の根に斬りつけた。感触は確かに生木だったが、傷口からは赤黒い血が噴き出し、根っこは大慌てでズルズル下がつて行く。黒鉄がようやく奴を離し、俺のところに駆けてきた。

「助かつたぜ、ありがとよ」

まずはわんころに礼を言つてから、俺はようやく何がどうなつているのかを見た。

じじいがいた場所には……わけわからんねえ化け物がいやがつた。根っこだけの木、とでも言えばいいのか？ 普通なら幹になつてのはずのところには、じじいの頭がくつついていた。しかも馬鹿でえ。目ん玉ひとつで牛の頭ぐらいあるだろう。そのまわりから、人が一人がかりでも抱えられそうにない太い根が十本ばかり張り出して、のたりのたり氣味の悪い動きをしてやがる。びつしり生えたヒゲ根がザワザワうごめくさまたきたら、まるでムカデの足みてえだ。その、数百本はありそうな根の間から、時々ちらつと嫌なもんが顔を出す。しなびた鳥の死骸だとか、しゃれこうべだとか。てことは何か、つまり俺は奴の肥やしにされかかつたってわけか？ うえつ。

俺が愕然と立ちつくしていると、小僧と雪白が駆けつけてきた。

「おう、無事だつたか」

俺が言つと、小僧はうなずいて、嫌そうな顔でじじいの成れの果てと向き合つた。

「古い木の妖だね」

「ああ、そろそろタコに化けて海に行きたいらしいぜ」

ようやく奴の見た目が何に似ているか気付き、俺はそんな冗談を飛ばした。が、山奥育ちの小僧には通じなかつた。

「タコつて？」

「……ああいう、ぐねぐねうにうにした生き物だと思つとけ。それより、どうやつて始末する？ 俺一人じゃ、あの『足』全部はさばききれねえぞ。元が木だから、放つといて逃げちまえ、そつ遠くまで追つかけては来ねえだろうがなあ」

「そういうわけにはいかないよ」

即座に小僧が言い返す。まあな、と俺もうなずいた。そして二人

同時に口を開く。

「金が入らねえからな」

「人を襲う妖なんだから」

見事に全然違うことを言つちまつて、俺と小僧はしらけた顔になつた。そんなこつたるうとは思つたがね。やれやれ。俺はちょっと肩を竦めてから、氣を取り直して続けた。

「ま、何にしる始末はつけねえとな。俺もやられつ放しは癪だ。さてどうするかね」

「木だから火には弱いと思うんだけど、半端な炎じゃ効きそうにないしなあ。おじさん、まな真名の法術は使えない？」

「あ？ 俺は神官じやねえぞ。法術なんぞ使えるかよ」

「そうじやなくて……いいや、説明は後で。雪白、黒鉄！」

小僧が呼ぶと、二匹の犬はさつと小僧の前に座つた。小僧が左右の手をそれぞれの頭に置き、何やらぶつぶつ唱える。諸々の神たち聞し召したまえ、とかなんとか言つてゐようだが、そんな小声で神様に聞こえるもんかねえ。

俺はなんとなく胡散臭い気分で見ていたが、その目の前で、二匹の犬がぼんやり輝きだしたもんで、さすがにあんぐり口を開けちまつた。しかもそれだけじやねえ、わんこりどもの姿がこつ、伸びたり膨れたりしたように見えたと思つたら！

聞いて驚け、瞬きひとつの中に、そこには白と黒の戦装束に身を包んだ若武者ふたりが立つていたのだ。いやまつたく、顎が外れるかと思つたね。ぽかんとしている俺に向かつて、白い方は犬の時と同じく冷たい目をくれ、黒い方はにっこり笑いかけやがつた。俺は何度も瞬きして目をこすつたが、どうやらまぼろしじやあないらしい。

「この世は一体どうしちまつたんだ？ じじいは弾けるわ、犬は化けるわ。俺は夢でも見てるのか」

「これは仮の姿だよ。おじさん、準備はいいかい？ できるだけ中心に近付いてから、本体に手のひらをしつかりと押し付けて。それから、俺の言うことを繰り返すんだ」

てきぱきと小僧が指図する。『こんな餓鬼に命令されるのは嬉しかねえが、化け犬の飼い主じや逆らえねえよなあ。どつちにじろ俺はこんな大物相手に戦つたことはねえ。』『このつの言ひ通りにするしかなさそうだ。ちえつ。』

あれこれ考えて俺がむつり黙つていると、雪白の方がじりじりと睨んできやがつた。ああ可愛くねえ！

『分かったよ』渋々答えて、俺は月華を構えた。『わいつわいつまおう。俺の血がすつかり流れ出ちまわねえうちにな』

そう、さつきやられた、細い針で突かれたような傷から、いつまでもしつこくじわじわと血がにじみ出てやがるのだ。このままじやあ田が回つてしまつ。小僧もやつとそれに気が付いたらしく、わいつと青ざめた。

『おいおい、そんな悲惨な顔するな。まだ倒れやしねえよ。んじや、行くか』

にやつとして見せた俺に、小僧は黙つてうなずく。その田が前を向き、妖を見据えた。

枯れ木じじいの方も、俺たちがまた近付くつもりだと察したらしい。根っこが激しく動きだし、俺たちの方へ伸びてきた。その細い先端が足に届きかけた寸前、

『行くよ！』

小僧が地を蹴つた。即座に田と黒の影が従う。俺も並んで走りだしていた。

一人の若武者が太刀をふるい、襲いかかる木の根をなぎ払う。もちろん俺の月華も負けちゃいねえ。しかし太い根はちょっとやそつとじや切れねえし、細い根はいくら払つても次々新しいのが生えてくる。

妖の血が辺り一面に飛び散つて、何とも言えない臭氣を放ちだした。その中を、俺と小僧は肩を並べてとにかく突き進む。

じじいの吐き出すかび臭い息が、まともに顔に吹き付けた。うえつぶ！ それを避けて横に回ると、小僧がいきなり俺の左手をつか

み、化け物に押し付けた。樹皮を張った生肉のような感触に、俺としたことが思わず怯みそうになる。

「おい！ くそ、無茶すんじゃねえ！」

慌てて俺は右手を振り上げ、危ういところで数本の根をなぎ払つたが、小僧は見ちゃいなかつた。

「背中は一人に任せて、復唱して。いい？」

ああ、そういうやうだった。視界の端でじじいの田玉がぎょろりと動くのが気になつたが、すぐに黒鉄が俺の背を守つて立ち、ついでにその鬱陶しい光景も隠してくれた。

「我が名は雷火」

小僧が唱える言葉をそのまま繰り返す。

「火は赤きほむらなり」

氣のせいか、てのひらが熱くなつてきたよくな……

「この名において命ずる」

手だけじゃねえ、胸の奥、肺腑の中に火がついたような、

「火炎招来！」

刹那、それが爆発した。

いや、俺の中の火だけじゃねえ。現実に、目の前が真つ赤に燃え上がつたのだ。

耳をつんざく悲鳴と熱風にふつ飛ばされ、俺は後ろへぐるぐる転がつていつた。あち、あちち、あちちち！

地面に転がつたままじたばたしていると、小僧が駆けつけて、俺の体に手をかざし、何かを払いのけるような仕草をした。途端にすうつと熱が引いていき、俺はほーと大きな息をつく。ああくそ、死ぬかと思つたぜ……。

大の字になつて伸びちまつた俺の上から、小僧がひょっこり顔をのぞかせやがつた。

「大丈夫？」

「んなわけねえだろ！ 馬鹿野郎、俺を焼き殺す氣か！？」

俺は飛び起きて、噛みつくように怒鳴つた。が、わめいた口を閉

じるか閉じないか、犬に戻った黒鉄の奴が飛んできて、べろべろ顔を舐めまくるもんだからたまらねえ。ああもつ、格好悪くて怒るに怒れねえだろが、ちくしょうめ。

「舐めるな！ 分かった、分かったよ、大丈夫だからやめろって！ やつとのことで黒鉄をひつペがすと、俺は袖で顔を拭つた。やれやれまたく……」

小僧がにやにやしてやがるのを睨みつけてから、俺は自分の表情を「こまかそつ」として、盛大な火柱を仰ぎ見た。生木だつてのによくまあ燃えるこつた。じじいはもはや悲鳴も上げず、根っここの端まですっかり炎に包まれている。水車小屋がべしゃんと音を立てて、炎の海に沈んだ。

思わずじつと自分の手を見つめていると、横から小僧が言った。いや、小僧つてのはやめたがいいな。化け犬の飼い主で、しかもこんな派手な火柱を立てちまう餓鬼だ。おつかねえ真理様の「高説拝聴」と言わなきゃならんか。

「ものの名前には力があるんだ。もちろん、人の名前もね。だからやり方さえ知つていれば、自分の名前からその力を引き出すことができるんだ。神官でなくともいいんだよ」

「はー、なるほどねえ……まあしかし、てめえがこんがり焼けちまうんじや、使いてえとは思わねえな」

「練習すれば、もつとうまく使いこなせるようになるよ

「まあ、気が向いたらな」

それだけ言つと、俺は考えるのも疲れて、またひっくり返つてしまつた。今日は働き過ぎだ。慣れねえことするもんじやねえや……。

四 村人と影（1）

四

火がおさまると、俺は川の上流で体を洗つて、真理の持つっていた血止め薬を塗つてもらつた。妖はすっかり消し炭になつちまって、もうすっかりただの古い木にしか見えねえ。

最前まで燃えていた炎がちぎれて飛んでつたみたいに、空はまぶしい茜色に輝いている。明日はいい天気になりそうだなあ。もつとも、俺たちが無事に明日を迎えられなきや、天気がどうでも関係なくなつちまうがね。

「さーて、と。ここからが面倒だぞ」

道端に座り込んだまま、俺は天を仰いだ。真理がきょとんとしてこつちを見る。お氣楽な奴だぜ。

「いいか、あのじじいは何て言つてた？ 村の衆は親切だ、つてな。ひとつ所からたいして動き回れねえ妖があそこまでかくなつたつてことは、誰かが餌の世話をしてやつてたつて事だ。だが村人を食つてたんなら、俺たちが出向くまでもなく、とつくに焼き打ちされちゃうな」

「ちよつと待つてよ、それじゃまさか、村の人たちが俺たちを騙してたつて言つのかい？」

「ほかにどう説明がつく？ 流れ者なら、いなくなつても誰も気にしねえだろ」

「でも、妖が負けたらどうなるのさ？ 今まで誰も倒せなかつたみたいだけど、それにしたつて、逃げた人もいるはずだよ。そしたら、神殿に知らせが行くはずで」

「そいつが神殿に行き着けたら、な」

俺は真理の反論を遮り、できるだけ淡々とした口調で言った。

「言いたかねえが、連中は獲物を選んでる。俺みたいにうだつの上

がらねえ流れ者は、せいぜい小物しか相手にした事がねえからな。まず確實に食われちまうだらうさ

「でも運よく逃げられるかも……」

「そう、俺みたいにな。で、そういう流れ者が次にどうするか。俺たちや、この後どうする？ 金が要るから仕事を請けた、そ娘娘？」

そこまで言つと、やつと真理も察したようだつた。愕然として口をぽかんと開け、絶句する。良い子にやちと刺激が強すぎたかね……。俺は頭を搔いた。

「分かったか？ だから、ここからが厄介だつて言つたのさ。依頼通り、怪しいじじいは追い出してやつたんだ。金を貰わずに行く法はねえ。だが連中がおとなしく代金を払つてくれるかどうかが問題だな」

「神殿に知らせに行けば？」

「信じてくれるとは思えねえな。当の妖はこれこの通りだし、この村の連中は全員で口裏を合わせてるだらうよ。おまえが神殿の者だつたらどうか信じる？ 胡散臭くて素性の知れねえ流れ者が、妖を退治してやつたんだから金をよこせつて言つとのと、その流れ者に因縁つけられた上に水車小屋を焼かれたつてえ可哀想な村人と」

「…………」

さすがにもう、真理もそれ以上は言い返さなかつた。俺たちは一人して、でつけたため息をついた。

「どうして村の人は、妖なんか養つてたんだろう」「…………」

「さあな。そんなこたあどうでもいいさ。どんな理由があるにせよ、あの枯れ木じじいは焼けちまつたんだ。後のことば村の連中に考えさせるさ。俺たちはとにかく、金が貰えりやいいんだ……よつ、と」

言葉尻で勢いをつけて立ち上がる。いつまでも座り込んで仕方がねえ。

「さて、行くか。黒鉄、雪白、おつかねえ村人からご主人様を守つてやるんだぞ」

俺が言うと、一匂のわんころはそれぞれなりの反応を見せた。つまり、雪白は「おまえに言われる筋合いはない」とばかりの面をし、黒鉄はピンと耳を立ててワンと一声。頬もしいこつた。

そんなわけで、俺たちは煤けてぼろぼろちくなつたまま、来た道を引き返した。

すれ違いざまに何人かが、ぎょっとしたり、慌ててどこかへ走つてつたりした。周旋屋へ知らせに行くんだろう。けつ。

道々、真理の奴はずつと黙りこくつていた。何を考えているのやら、難しい顔をして。ま、なんとなく想像はつくがね。だから俺は、周旋屋の前で真理のちつせえ鼻先に指を突き付けてやつた。

「おい。話せば分かる、なんて甘いこと考えるなよ」

どうやら図星だつたらしい。真理は途端に嫌な顔をしやがつた。拗ねたつて可愛かねえぞ、馬鹿。

「世の中、おまえが考えるほど簡単じゃねえんだ。どんなご立派なことを言つたつてな、生きのびなきや何の意味もねえ。大体、これ以上深入りしたつて、後々ここの連中の面倒見られるわけでもねえだろ。な？ おまえは黙つて、俺に任せときな

「……わかつたよ」

「よつし、いい子だ。じゃ、おまえとわんころどもは、ここに立て退路を確保しどけ。村の衆を近寄らせるんじやねえぞ」

言い置いて、俺は暖簾をくぐつた。

中にはまあ、怖そうな顔の若い衆がひい、ふつ、みい……六人ばかり。狭苦しい店で待ち伏せとは、ご苦労なこつた。だが、俺が月華の鯉口を切ると、どいつも怯んだ様子を見せた。

「ひと仕事片付けてきた流れ者を労つてくれる、つてえ雰囲気じやねえな。言つとくが、いまさら俺をぶちのめしても意味がねえぜ。あの妖は盛大に燃えちまつたからな」

「何の事ですかね」

周旋屋の親父が陰気な声で言つた。もちろん、とぼけているわけじやねえ。目と目が合うと、相手は一切了承済み、つてのが分かつ

た。俺は肩を竦め、番台に近付いた。

「あんたが追い出してくれつづった巫師のじじいはな、妖が化けたのさ。だから退治した。結果としちゃ、依頼の通りだ。あとは金さえ貰えりや、こつもの仕事と同じ、吹聴するほどのことねえ」要するに、出すもん出しゃあ黙つといてやる、って事だ。お互い、そこまで口にしたりはしねえが、親父もその事は分かつて。黙つて番台の下から、銭の入った巾着を取り出した。じゅらりと音ばかりは大層だが、銅銭ばかりで銀は一枚もねえ。

「ちと足りねえんじやねえかい。前払いの分を合わせても、二人分の報酬には少ないぜ」

「お客さん、欲深は運を逃すことになりますよ
「そんなら神殿に行つて、悪運を祓つてもらつや」

ちくちくと嫌な応酬が続く。これまで何人の流れ者が同じようこの親父に文句をつけて、ここに控えている若い衆にのされちまたのやら。連中が手を出さねえのは、ひとえに俺が見た目よりも腕の立つことを恐れているからだ。こつちがちょっとでも脅えたら、瞬く間に食いつかれるだろ。」

しばらく睨み合つた末に、親父は渋々と銀貨を出してきた。正直なところまだ足りねえと思ったが、親父の言つ通り、欲は身を滅ぼす。ここらで手を打つか……。

俺は用心しながら素早く金を取り、袂に落とした。

「じゃ、あばよ。一度と来ねえから安心しな」

捨て台詞を残してわざとおさらばしようとしたのだが、ちつとばかり動作が早すぎたらし。背を向けた途端、俺の焦りを見抜いた親父が声を上げた。

「やれッ！」

同時に俺は、前へ飛ぶように転がつた。空振りした棒や竹竿が絡まり、派手に騒ぎ立てる。俺は振り返らず、そのまま表へ飛び出した。

だが、それより先へは行けなかつた。手に手に鍬だの鎌だの持つ

た連中が、ぐるりと店を取り囲んでいたのだ。一匹のわんころが牙をむいて唸っているが、じわじわと村人の半円が縮まつてくる。中には申し訳なさそうな顔をした女までいやがつた。くそ、悪いと思うなら一緒になつてんじゃねえよ！

「おじさん……」

真理が青ざめた顔で振り向く。さもありなん、妖と違つてこいつらは人間だ。簡単に吹っ飛ばしたり斬り殺したりできるもんでもない。一人一人ならちよいと怪我をさせてやりや逃げるだろうが、これだけ大勢となると、かえつて逆上して手がつけられなくなつちまう。なぶり殺しにされるなんざ、考えたくもねえや。

俺は真理と背中合わせに立ち、店から飛び出してきた血の氣の多い奴を、顔面への一撃で殴り倒してやつた。

四 村人と影（2）

「そいつらを村の外に出すな！」

店の奥から周旋屋の怒声が飛んだ。

「ちつ、疑り深え親父だぜ。一度と来ねえつつてんだろが！ それとも何か、これっぱかしの手切れ金も惜しいのかよ！」「金は問題じやあないんですよ」

親父が戸口に姿を現す。最初のいけ好かねえ丸ぼちや親父の印象は、いまや他人の血で肥え太った極悪人に変わっていた。まったく、まさかここまでとはね。俺は月華の柄にそっと手をかけた。

「だつたら何だつてんだ。言つたら、俺は金さえ貰えれば、おまえらがやつていた事についてちや気にしねえ。それに、あの妖が焼けちまつた今じや、何を吹聴してもただの法螺にしかならねえんだ。何も問題はねえだろうが」

返事がない。俺は背筋がぞくつとした。おいおい、まさか……

「あれで終わりじやねえつてのか？」

声がかされた。背中越しに、真理が身をこわばらせるのが分かる。ちくしょく、こりやまずいぞ。

「あれのことを知られたら、この村は終わりだ」

人垣の中から、誰かが言つた。

「可哀想だけじや、よそ者は信用できないんだよ」

「ごめんね、なんぞと言ひながら、女が鎌を握り直す。勘弁してくれ。と、いきなり真理が声を上げた。

「いつたい……どうして、どうしてそこまでして妖をかばうんですか。あの妖がそんなに大切なんですか！？」

泣き出しそうな声に、村人たちが一瞬、たじろいだ。さすがに後ろめたいらしい。だがそれでも、囮みは緩まなかつた。慣れてやがるんだ、こいつらは。助けてくれつて声も、しゃべらないから見逃

してくれつて頼みも、こいつらは聞き飽きて何も感じなくなつてやがるに違ひねえ。なんて連中だ、くそつ！

「坊や、あの榛の木はあたしらにとつて、なくぢやならないものなんだよ。ここで暮らせばきっと分かるよ」

別の女が言つた。途端に、馬鹿を言つた、とまわりから咎められる。なるほど、大人は殺しても胸が痛まねえが、子供だから助けてやろうつてわけかい。一生この村に留まらせれば、秘密も漏れねえつてか？ 図々しい。

緊張のせいか、頭の回転がいつもの倍ぐらいに速くなつた気がした。

あの妖はこいつら全員にとつて「なくぢやならないもの」だが、いなくなつたら途端に何かが変わるつてもんでもないらしい。燃えた時に何も起こらなかつたしな。

で、奴はもともと榛の木で、つまり湿地に生えるが田圃の畦にもよく植えられてたりする木だ。奴がいたのも小川の上流。そういう川つべりに若木が植えられてたよなあ。しかもこの豊平はその名の通り豊かな米蔵。とくれば……。

「ははあ、なるほどね。おまえら、あの妖に何か細工させてたんだな？ 稲がよく実るよつて、水や土にませものでもさせてたんだろう

「！」

背後で真理が息を飲む。村人たちの顔色がさつと変わつた。大当たり。

道理で白黒一匹がやたらと水辺を嗅ぎ回つていたわけだ。世話の行き届いた田圃だと思ったが、雑草も虫も、あまりにも余計なものがなすぎた。飯が変な味だつたのも、穢れた水で育つたせいだな。納得している俺に、周旋屋の親父が苦々しく唸つた。

「ご明察。流れ者にしては頭が切れなさるね」

「そりやどうも。褒めたついでに見逃しちゃくれねえか。それとも、こいつの切れ味も試してみたいかい」

月華を鞘の上から軽く叩く。真相を見抜かれたところへ脅しをかけられ、さすがに親父も怯んだ。が、やつぱりそれでも、覚悟は変わらねえらしい。後ずさつたのもわずかに半歩、すぐに威儀を正して、腰の引けた村人たちをぐっとねめまわしやがった。

こうなつたら仕方がねえ。俺はため息をつくと、諦めて月華の柄を握つた。気は進まねえが、何人かぶつた斬つてでも逃げなきやな。何せ今は小僧と犬を養つてんだからよ。

「おい真理……」

背中越しにひそつとささやく。囮みの薄そうな所を指して、同時に突つ込むぞ、と合図した。が、真理の奴、聞いちゃいなかつた。真つ黒な目を見開いて、自分たちの影が長く伸びている通りの向こうを凝視したまま、かたまつちまつてやがる。

しつかりしる、と言いかけてその瞬間、俺も立ち竦んだ。地面につけた両足から、ぞわぞわつ、とものすごい悪寒が体をはいあがり、頭のてっぺんまで突き抜けたのだ。髪が全部逆立つ気がした。何だよこれは！

視線を落とすと、一匹の犬が耳をぴつたり寝かせ、鼻面に皺を寄せて牙をむき出していた。が、尻尾は足の間に巻き込まれ、今にもキヤンキヤン鳴いて逃げ出しそうだ。

村の連中は俺たちほどには敏感じゃねえらしいが、それでも何か寒気はしたらしい。顔を見合わせ、ざわつきながらてんてこ背後を振り返る。

「やばい

口が勝手につぶやいた。まずい、いけねえ、何か良くなもんが来やがる。俺の頭にはもづ、村の連中のことなんざ微塵も残つちゃいなかつた。

お天道様が沈んでいくのを、繩をかけてでも引き戻したくなつた。東の方から薄闇が迫つてくる。その中に出来たひときわ暗い影が、通りの向こうからやって来る。

あいつだ。

村に入る前に、道で俺たちの後をつけてきた、あの影だ。ちくし
ょう！

逃げなきやならねえのは分かつてゐるに、足は動かねえし、声も
出せねえ。

視界の隅で、村人たちが同じように石になつちまつてゐる。やが
て、一番影に近い所にいた奴が、ふらつとよろけてそのままばつた
り仰向けにひっくり返つちまつた。

そしてまたひとり、膝をついて前のめりに倒れ臥す。続いて二、
三人が同時に。

人が倒れるにつれて、影が濃く暗くなつていくように見える。夕
焼け空までがその闇に毒されて、不気味な色に変わつてゐた。

「ひ……」

誰かがかすれ声をもらした。それが引き金になつて、すさまじい
悲鳴がいつせいに上がる。金切り声、泣き声、うろたえ怯えて助け
を求める声。蜘蛛の子を散らすように、もう俺たちの事なんざ無視
して、てんてこ舞いに影から遠ざかるつと逃げて行く。

俺も弾かれたように走り出していた。格好悪いが、この際そんな
こた言つてられねえ。

だが十歩も行かずに慌てて止まり、振り返つた。小僧も犬もつい
て来ねえ！

「何やつてんだ馬鹿野郎！ 早く来い、逃げるんだ！」

ちくしょう、枯れ木じじいには怯まなかつたくせに、何で立ち往
生しやがるんだよ。

「こつちを見ろつて！ 置いてくぞ、この愚図！」

地団駄踏んで喚く俺に一警もくれず、真理はやおら手をもたげ、
パンと大きくひとつ柏手^{かしわで}を打つた。澄んでよく通るその音が、影
のもたらす嫌な空氣を、わずかに払いのけてくれた気がした。続け
てもう一度。音に押されたように、影が歩みを止める。

「かけまくも畏き祓^{はらい}廻^じの大神等^{おおかみたち}、よろずの枉事罪穢^{まがこと}れを……」

真理が祝詞^{のりと}を唱えだす。悠長なこと言つてて、本当に効き目があ

るんだれつな、おい。んな事してねえで逃げた方が賢いんじゃねえのか？

「はりいたまい清めたまえと……」

声が震えた。影がまた動きだしやがったのだ。そら見たことが！ もうあとほんの数歩しか離れてねえ。

「真理！ そいつは放つといて逃げる、祓おつなんざ考えるな！」 こっちが喉を嗄らして叫んでるつてのに、真理の奴は振り向きもしねえ。これだから聞き分けの悪い餓鬼は！ 白黒の一匹はもうびつたり真理の足にへばりついていて、役に立ちそうにねえ。

「えいくぞ、世話の焼ける！」

なんで俺がここまでしなきやならねえんだ、我ながら自分に腹が立つ！

俺は思い切つて駆け戻り、真理の腕をひつかんだ。同時に影がぬうつと津波のように大きく立ち上がる。

「逃げるわんこりども！」

無我夢中で俺は犬どもを蹴った。ギャンとも言わず、一匹は転がるよつに駆けて行く。影が落ちて俺たちを飲み込む寸前、何とか真理を思い切り突き飛ばしてやつた。

頭の上から影が覆いかぶさる。闇に包まれたと同時に、なぜか昔の記憶がでたらめに脳裏をよぎつた。弟と竹馬遊びをしたこと。おふくろの打ち掛け。親父の死にざま……

ああやれやれ、親子揃つて化け物にやられて頓死かよ。みつともねえなあ。

と、観念しかけたその時、

「やめろ！」

真理の絶叫が響くや、玻璃の碎けるよつな音がして、俺のまわりに数多の星が弾けた。

「うわっ！？ 何だ、こりやいつたい」

驚いて目をぱちくりさせたその瞬間に、星の光はもう消えてなくなつていた。ついでに、どうこうわけだか、影までも。

「……何だあ？」

往来に立ち済くしたまま、俺はぽかーんと口を開けてしまった。

四 村人と影（3）

空はすっかり元通り、きれいな夕焼けの朱色と藤色がまじり合い、明るい星がひとつふたつ、瞬き始めていた。倒れたままの村人がいなけりや、まるで何も起こらなかつたみてえだ。何なんだ、何がどうなつてんだ？

「おじさん、大丈夫？」

真理が駆けつけ、一匹の犬もいささか面白なさそうに寄つて来る。

「どうやら無事だよ。おまえ、あの影に何かしたのか？ いきなり消えちまつたぜ」

「俺は何もしてないよ。祓詞はちつとも効かなかつたし、まさか、やめろつて言つたから消えた、なんてわけもないだろうし。おじさん、お守りか何か持つてるんじやないの？」

「あいにく、そんなものが買えるほど懐に余裕はねえよ。心当たりとしたら月華ぐらいだが、今までこんな事はなかつたしなあ」

俺はしげしげと月華を眺めた。たつたひとつ譲り受けた、親父の形見。一応は由緒ある銘刀らしいが、そういう逸話が残されているでもねえし、神殿の連中も、何も言わなかつたしなあ。俺は結局、よく分からねえ、と肩を竦めた。

「とにかく、今の内にとつとと逃げようぜ。村の連中が戻ってきたら、ますますややこしいことになつちまつ」

「でも、倒れてる人たちは？」

「さあね。死んだか、氣を失つてんのか知らねえが、自業自得さ。そうか、分かつたぞ。あの影はきっと天罰だ。性根の腐つたこの村の連中に、天罰が下つたのさ。俺は善人だから助かつたんだ、きつとそうだ」

「うんうん。日頃の行いがものを言つてわけだ。

俺が納得してうなずいていると、真理が嫌な突っ込みを入れやがつた。

「善い人だつて言つなら、このまま見捨てて行くのはひどいんじやない？」

「うぬ。可愛くねえな、この餓鬼や。」

「あのなあ……俺たちを殺そうとした奴らだぞ。生きようが死のうが、知つたことかよ」

「駄目だよ」

真理は妙にきつぱり言つて、倒れた村人のかたわらに膝をついた。はは……なるほど。

「おまえのせいだから、か？」

わざやくよつに問いかける。村の連中がどこかで聞いてたら面倒だ。案の定、真理は振り向きもせず、小さな声で「多分」と答えた。

「多分？」

「後で話すよ」

真理が言つと同時に、その足元に転がっていた村人が、うーんと唸つて目を開けた。若い男だ。怒りか恐怖で叫び出すかと思いきや、ぼうっとした様子で宙を見たまま口を半開きにしてやがる。俺はちよつとそいつを觀察してから、別の奴を起こしに行つた。もちろん、親切にしてやる義理なんざねえから、蹴飛ばしてやつたわけだがね。倒れた連中は全員ちゃんと生きてはいたが、どいつもこいつも魂が抜けたみてえにぽかんとして、何の反応も見せなかつた。薄気味悪い。

「こいつら、どうなるんだ？」

「分からぬ。今までに影が人を襲うことなんて、なかつたから」答えた真理の声は沈痛だつた。よく罪悪感なんざ抱けるもんだ。あの影が何にしろ、俺たちはお陰で助かつたようなもんだろ。慈悲深いんだか、馬鹿なんだか。

「とにかく生きてるんならいいさ。あとはこいつらの身内がどうにかするだろ。心配だつてんなら、どこかで神殿に寄つて事の次第を報告すりやいいわ」

行くぞ、と真理の腕を取つて立たせる。地べたに座り込んだまま

の村人が、うつろな目でこっちを見上げて、しまりのない薄笑いを浮かべた。口元に力が入らなくて、勝手に顎が下がつただけかも知れねえが。

さすがに俺も気持ち悪くて見ていられず、無理やり真理を引きずるようにして、村から逃げ出した。袂でチャラチャラ音を立てる銭が、どうにも重かった。

「で、結局また野宿なわけか……。はあ」

街道脇のでつけ檻の根元で、俺は焚き火を起こした。布団が恋しいぜ……。

「「めん、おじさん」

「謝るこたあねえよ。運が悪かったのさ。それに、おまえがいなきや俺はあの妖の肥やしにされておしまいだつた。だから、無理にお前のせいにしようとは思わねえよ。理由を話したくなきや話さなくていい。俺も聞きたいわけじゃねえんだから」

乾いた枝を火に食わせ、じろんと横になる。腹はへつてるし疲れてるし、もうふて寝するしかしようがねえ。

「……あの影はね」

ぱつ、と真理が話しだした。俺が顔だけ振り向くと、小僧は雪白の首を搔きながら、じっと地面を見つめていた。

「深谷を出た時からついて来てるんだ。あれは……きっと、『災い』なんだと思う」

パチパチッ、と炎がはぜた。揺らぐ明かりに照らされた横顔が、急にただの無力な子供に見えて、俺はいたたまれず目をそらした。なるほどな。こんなちつせえ餓鬼が一人で修行の旅なんざ、おかしいと思つたんだ。

「おまえ、押し付けられたんだな」

何があつたのか知らねえが、深谷を襲つた災いを、里の連中は子供一人にくつつけて追い払つたんだろう。ひでえ連中だ。

「違うよ

答えた真理の声は、泣き出しそうだった。本気で違うと言つているのか、違うと思いたくて否定しているだけなのか、よく分からなかつた。俺がじつと真理を見ていると、やがてこいつを見つけて、悲しそうに笑つた。

「知つてたんだ」

「……そうか」

「うん」

それきり、言葉が続かない。俺は何とも言えず、ちらちらと踊る炎を見つめた。

谷の連中が何をどう言つたのか、それとも何も言わなかつたのか、それは分からねえ。ビッちにしろ、可愛げなくも察しの良いこいつが、進んであの影を引き受けたつてことは想像がつく。

しばらく待つて、真理には事情を話す気がないとほつきつすると、俺は勢いをつけて起き上がつた。

「ま、済んじまつた事はしようがねえ。今さら、ああすりや良かつたのどうのと言つたところで、何かが変わるわけでもねえしな。でも、あいつはまだついて来ると思うか？ 今んところは消えちまつてるようだが」

「分からぬ。でも、あれは……弾かれたつて感じで、消されたようには思えなかつた。ちょっと遠くへ弾き飛ばされてるけど、また戻つてくるつて気がする」

「んじゃ、祓う方法は？」

俺が訊くと、真理はまた、分からぬ、と首を振つた。

「祝詞や弦打つるうちがまったく効かないわけじゃないみたいだけど、祓い清めるには……何かもつと別の方策が必要なんだと思う。明師様が俺に『しるし』を探しに行けつて言つたのは、そういう意味なのかもしれない」

「しかしその『しるし』つてのは何なのか、手掛かりひとつねえんだろ？ そりや、随分と先が長そうだな」

俺はわざと素つ氣なく言つて、相手の反応を見た。案の定、真理

はちょいとばかり不安げな顔をしてこちらを振り返った。俺はとまけて手を振つてやる。

「まあ頑張れよ」

真理は何か言おうとして口を開きかけたが、遠慮がはたらいたのか、そのままうつむいて黙り込んだ。まったく、こいつときたら。子供らしくねえ事してつから、災いなんぞ押し付けられるんだ、馬鹿。

キュウン、と声がして目をやると、黒鉄が主人よりもよっぽど素直な目で、俺を見つめていた。俺は思わず苦笑し、真っ黒な頭を搔いて毛を逆立ててやつた。それから俺は腕組みし、おもむろに切り出した。

「さて、お別れする前にひとつふたつ、片付けとかにやならねえ問題があるな」

「問題？」

真理がきょとんとして聞き返す。俺は袂から錢の巾着を取り出した。

「ひとつはこいつだ。仕事を請けたのは俺だし、とどめを刺したのも俺。周旋屋に交渉してこれだけの金をもぎ取ったのも、俺」

俺、俺、と数え上げていくと、さすがに真理も面白くなさそうな顔をした。おお、正直でよろしい。その横で雪白が剣呑な目付きをしやがつたので、俺は慌てて「とは言え」と言葉を続けた。

「おまえと白黒一匹がいなきや、そもそも俺は生きちゃいねえだろ。だからこいつは公平に折半とこいつ。それはいい。だがおまえがこの先も旅を続けるんなら、これっぽっちじや足りねえだろうよ。行く先々の神殿を頼るにしても、今回みたいに、次の神殿まで何日もかかる、ってなこともあるだろうし、かと言つておまえみたいな子供じや、周旋屋に行くわけにもいかねえしな。心優しい俺様としちゃ、胸が痛むわけだ」

大袈裟に胸を押さえた俺に、真理が胡散臭げなまなざしをくれた。

「何が言いたいのか、はつきりさせてくれない？」

「まあ待てよ。問題のふたつめはだな、俺の稼ぎと将来についてだ

「……は？」

「俺も今まで結構長いこと妖退治をしてきたが、腕前と稼ぎにこいつにい
ちや まあ、おまえも見ての通りさ。今まではそれでも何とかな
つたがよ、いつまでもこれじゃあ困る。いずれどつかに落ち着くた
めには、ちつとは金を貯めとかねえとな。だから、もちょっと実入
りの良い仕事をするためにも、腕を上げにゃなんねえだろ？ たと
えば、ナント力つておまえが言つてた法術を身につけるとかだな」
そこまで話すと、やつと真理も結論が見えて来たらしく、だんだ
んと顔を明るくした。俺もつられてにやりとする。

「いつぺんに解決する方法がありますかね、真理様？」

「あるよ、もちろん！」真理が笑い出した。「俺がおじさんに法術
を教えるよ。仕事も手伝つ。それで稼ぎは折半。どう？」
「折半、ねえ。まあ、おまえにやお供もいるこいつたし、それが妥当
かね。だがおまえと一緒に行くんなら、もひとつ条件がある」
言葉尻で真顔になり、俺はずいと身を乗り出して真理を睨みつけ
た。

「何、だい？」

ちよいと怯んだ様子の真理に、俺は思いつきり苦々しく言つてや
つた。

「俺を『おじさん』って呼ぶな！」

もちろん、返事はけたたましい笑い声だった。

（雷火之章・終）

体は湯上がりでほつかほか。獲れたての岩魚に塩をふってこんがり焼いて、ぬるために燗したお酒と一緒にいただく。これがたまないのよねえ。色づきはじめた紅葉を見ながら、表で食べる「はんのよいしいこと」。

山奥の温泉なんて湯治客ばかりじゃないの、なんて言つて辛気臭い顔をする人もいるけど、少なくともここ、瀬場の里は違つ。峠越えの道が通つていてるから、往来の商人やら旅人やら、いろんな人がここで泊まって湯につかり、疲れを癒して行く。湯治客もないわけじゃないけど、今こうして床几から見渡す限りでは、圧倒的にそうした『通り過ぎるだけの客』が多い。

そんな中で、あたしは珍しい長逗留の客。商売が占い師だもんで、毎日大勢が行つたり来たりするこの里はうつてつけ、つてわけ。

占い師にもいろんなのがいるけど、あたしは人相や手相を見るこ

とにしている。それだと道具がいらないからね。

え？ つまりインチキかつて？ 無粋なことお言いでないよ。こう見えてもあたしには、ちゃんと靈力つてものがあるんだ。でもね、靈力があるからって何でも見えるわけじゃない。そこんところが分からぬお客様が多いのさ。

まあ実際は、何を訊きに来たのかを最初に言い当てるやれば、それだけで大半は満足してくれるんだけどね。分かつて貰えるのが嬉しいと見えて、悩み事をしゃべるだけしゃべって、すつきりして帰つちまうのさ。ありがたいことだよ。おかげで今日も、夕餉に徳利を一本つけられるってわけさね。

あたしは上機嫌で盃を取り、眉をひそめた。空になつてゐるじゃないか。またあいつだね、やれやれ。心の中で毒づきながら、徳利から酒を注ぐ。肩の上で小さな影がサッと動き、背後に隠れた。すばしこい奴。

気が付くと、だいぶん辺りは暗くなつてゐた。秋の日は釣瓶落、とはよく言つたもんだ。風もちょっと冷たくなつてきたね。あたしは肩をすぼめ、お膳を持って店の中に入つた。それを待つてゐたようだ。女中が床几を片付けだす。せつかちだねえ、嫌だよまったく。店の中にはまだ大勢の客がいて、わいわい賑やかに夕餉を楽しんでいた。あたしは適当に空いた席に座り、骨だけになつた岩魚を未練がましくつつきまわす。

と、不意に男の声が耳に飛び込んできた。

「馬鹿、残すなもつたいたねえ。ここが美味いんじやねえか」
べつだん大声つてわけでもなかつたのに、なんでそれが気になつたんだか。あたしは不思議な気分でそちらを見やり、皿をぱちくりさせた。

「でも、苦いんだよ。雪白にやせたら駄目なの？」

「それがもつたいたねえつつてんだ。よこせ、俺が食つ

「ちょっと、おじさん！……あーあ」

皿を挟んでやいのやいのと言ひ合つてゐるのは、若い男と、それよりもつと若い坊やの二人連れだつた。何なんだろうねえ。おじと甥にしちやあ、血のつながりがあるとは見えないよ。坊やの方は十四、五歳。目元涼しく賢そうな顔立ちで、あと五年もすればなかなかの美男子になりそうだ。男の方は……まあ、だから、それには似てないつてことで。

でもまあ、仲が良さそだから人買ひでもないだろうじ。あの一人が何でも、あたしが知つたことじやないさね。ただなんとなく、坊やの方が暗い影を背負つてゐるように見えるのが、気がかりと言えば気がかりだけど。

耳元で小さな声がささやいた。

「あの男、賞金稼ぎだ」

おやおや。あたしは声に耳をすこし心の中で返事をしてやる。

(狩られるかも、って心配かい?)

「我に賞金はかかるおらぬ。やえに奴は我を狩らぬ

ふうん。妖退治が生き甲斐つて男でもないわけか。錢が貰えないような小物、相手にしてたらキリがないものねえ。存外、頭がはたらくのかもね。

そんな事を考えながらしげしげと男を眺めていると、肩からさつと奴が降りる気配がした。あたしはとつとつ盃を取り上げ、酒を喉に流し込む。

(ちょいと、もう飲むんじゃないよ。この酒はあたしのなんだからね)

まつたく、飲ん兵衛の妖は嫌になるよ。毎度、徳利の半分はとられちまうんだから。

小さな軽い気配が腕でためらつた後、しぶしぶ肩に戻つて来た。

「酒も過ごせば毒じや。我と分け合つてちょうど良い」

思わずあたしは失笑してしまつた。身の丈が一割もない相手と、酒を折半では割に合わないじやないか。

一人で笑つてしまつたのをごまかすように、あたしはうつむいて新しい酒を注いだ。けれど、ちょっとばかり間が悪かつたよつだ。すぐ隣の席から、男がひとり、ふりふりと立ち上がりつてこちらにやって来た。

「おう姐さん。今、俺を見て笑いやがつたな」

毛むくじやらのうつし手が机をバンと叩き、酒臭い息が降つて来る。やれやれ。

「何だいあんた」

あたしは顔を上げ、酔つ払いに向かつて首を傾げて見せた。

「あたしはどこも見ちゃいなかつたよ。思い出し笑いさね、気にこなさんな」

「「まかすんじやねえ! 俺の方をじつと見てやがつたくせ!」」

「馬鹿お言いでないよ、誰が好き」のんで酔いどれ狸の顔なんぞ見つめるもんかね」

呆れてうつかり口を滑らせ、おつと、と唇に手を当てる。客の間に笑いがこぼれ、酔っ払いはますます顔を赤くした。

「このアマ、誰が……！」

男が拳を振り上げる。あたしの耳元で、小さな声がわざわざいた。「避けんで良いぞ」

同時に、振り上げた手を別の誰かがつかんだ。おや、あの賞金稼ぎじゃないか。

「まあまあ。酒が入ると、わけもなく笑い出す奴もいるや。その辺にしどきなよ」

な、と笑顔で言いながら、賞金稼ぎは酔っ払いの手首を締め付けている。カチリと音がしたのは、刀の鯉口らしい。酔っ払いは怯んで後じさり、口の中でろれつ回らない文句をつぶやいた。その隙に、連れの男が酔っ払いの背中を抱きかかえる。

「すみません、こいつちょっと酒癖が悪くて。失礼、どうも」

他の客にもぺこぺこと頭を下げて、男は酔っ払いを引きずるようにして、店を出て行つた。何だかねえ、酒癖が悪いのなら飲ませなきやいいのにや。ああいう酔っ払いは無粋で嫌いだよ。

あたしは首を振り、くそくさする気分を払つた。それから賞金稼ぎを見上げ、につこりと愛想良く礼を言つた。

「ありがとさん、助かったよ」

「なに、大したことじゃねえよ」

おや、何だい。

「あんたが見てたのは俺だろ？」

「にやにやしながら賞金稼ぎがあたしの向かいにびっかり座つた。おや

しまつた。

「違うよ、馬鹿だね。あたしが見てたのは、あんたの連れの坊やさ。どういう関係だか知らないけど、放つたらかしてないで戻つておや

りよ

あたしが坊やの方を見ると、相手も「うちの様子をじつと見守つていたらしく、まともに田が合つた。途端に坊やはびっくりしたようにおよこんと背筋をのばし、恥ずかしそうに顔を赤らめる。うふだこと、可愛いねえ。

あたしがひらひら手を振つてあげると、坊やは困つた風情で、それでもぺこりと小さく頭を下げた。

「行儀が良いね、あんたのしつけじゃあなさそうだけど？」

くすくす笑つて賞金稼ぎを見る。相手は苦笑いを浮かべ それから、あたしの肩の辺りをひたと見据えてさせやいた。

「さすがにお見通しつてわけかい。面白いのを連れてるだけはあるな」

「あのねえ、いくらサトリでも、人が考えていない事まで読み取れるわけじゃあないよ」

あたしもうんと小声でさわやき返す。そり、あたしの肩にまとわりついて、せつきから飲み食いにおしゃべりをしてくれる妖は、サトリといつのだ。見た目はうんと小さな猿に似ているけれど、人の心を読む妖で、あたしの商売仲間。といつより、なくてはならない片腕つてところかね。

賞金稼ぎが意外そうな顔をしたので、あたしは言つてやつた。

「たとえば、あんたの名前とか」

「雷火じやと」サトリがささやいた。

サトリの声が聞こえるらしく、賞金稼ぎの雷火は眉を寄せた。何が言いたいのかはサトリでなくとも分かつたから、あたしは笑つて説明してやつた。

「今のはね、あたしが名前と言つた時に、あんたが心の中で自分の名を思い浮かべたから、分かつたんだよ。ああそうそう、あたしは綾女。アヤメ占い師だから、こいつの事は内証にしとくれよ」

もちろん、客の中にもたまには、サトリの姿を見たり声を聞いたりするのがいる。でも、そういう客は先にサトリの方が勘づいて隠

れてしまつから、滅多にばれることはない。

雷火は何とも言えない顔であたしを眺め、ちょっと頭を搔いた。
「ま、あんたが何を商売に使おうと勝手か。そいつは悪さもしねえ
ようだし。ただ、口止め料代わりに、ちつとあの小僧を見てやつち
やくれねえか。あなたの占いが丸つきりのイカサマじやなけりや、
の話だが」

「探し物をしとむりし。隠し事もな」

サトリがこじょこじょと叫んだ。雷火は苦笑して、「話が早くて助
かるね」と厭味つぽく唸る。あたしはわざと皮肉が通じないふりを
してやつた。

「そうだよ、あたしは察しのいい女だからね。だけど物分かりは悪
いんだ。坊やが何を隠してゐにしろ、連れのあんたに言わない事を
他人のあたしが勝手に聞き出すのは、筋が通らないつてもんじやな
いのかい」

坊やの背負つてゐる暗いものが見えるだけに、ずかずか土足で踏み
込んじやあいけない、つてのはよく分かるのさ。サトリは何だつて
読み取つてそのまんま口に出すけれど、あたしは妖じやない。

「何もあいつの口を割らせようつてんじやねえよ」

雷火が急いで言つと同時に、サトリもつぶやいた。

「『しるし』の手掛かりを占つて欲しいんじやと。坊主の名前は真
理。神官になるつもりらし。綾女、見るな見るな。我らの敵な
ど増えぬが良い、坊主など命果てるまでさすらうが良いわ」

シシシシ、と耳障りな笑い声が続く。あたしは肩を揉むふりで、
サトリを握り潰してやろうとした。もちろんサトリはその手を寸前
でかわして、背中側へ逃げてしまつたけれど。いまいましいつたら
ありやしない。向かいで雷火も、あたしの肩を睨みつけていた。

「ちよいとあんた、そんな怖い顔をするんじやないよ。こいつは口
は悪いけど、実際に何か悪さをするわけじゃないんだから。いちい
ち怒つてたら、気がおかしくなつちまつよ」

「慣れてるんだな」

「長い付き合いだからね」

あたしは軽い口調でそう言つて、いつの間にか空になつた徳利を逆さに振つた。

「とにかく、何か込み入つた事情もあるようだし、明日になつてから出直しといで。今日はもう店じまいだよ」

しまう店なんかないせに、とでも言いたそうな男に手を振り、あたしは席を立つた。心配そうにこつちを見ていた坊やの頭をちょいとなでて、勘定をすませて外に出る。

うう、寒！

夜気が襟元に入り込み、あたしは身震いした。ほとんどの店はもう戸を閉てて、通りに落ちる明かりはちらほらとまばらになつてい。早いとこ宿に戻つて、布団に入つてしまおう。首を竦めて往来を小走りに急ぎながら、ふと、背筋がぞくっとして振り返つた。

……なんか、いるみたいだね。

闇夜に消える通りの向こう、町の外に、田には見えないけれど何かが佇んでいるのが感じられるよ。うつそりとした影。

「入つて来るんじゃないよ」

あたしは小声で言い、念を込めて宙に印を切つた。効いたのかどうか、よくわからぬ。何せ今は、酔っ払うほどじゃないとは言え、酒が入つてゐるしねえ。

まあ、朝になつたらお天道様が追い払つてくれるだろ。

あたしは自分にそう言い聞かせて、道を急いだ。

翌日の暁頃になつて、あたしの店に坊やと雷火が連れ立つてやつて來た。白黒一匹のお供もいる。そちらの犬とはちょっと違つみたいだね。

お天道様の下で見ると、坊やの着物はすっかり鼠色になつちまつてるものの、元はどうやら神官の白装束らしいと分かつた。長らく丈も直していないと見えて、つんつるてんだ。予想以上に面倒な事情がありそうだねえ。

「これがあんたの店つてわけかい」

雷火がにやにやしながら言つた。失敬な男だね、まつたく。まあ、通りの端に腰掛けと卓を出しただけで、屋根も壁もないときりや、店とは言えないだらうけどや。

「あたしにとつちや、大事な店だよ。ひやかしに来たんなら帰りな」「おいおい、怒るなよ。悪かつたつて。ほれ真理、座つて見て貰え。そうそう、いくら別嬪さんが相手でも、妙なことは考えねえ方がいいぞ。サトリが憑いてるからな」

雷火にからかわれて、坊やはさつと赤くなつたけれど、即座に手厳しく言い返した。

「おじさんこそ、気を付けなよね」

「おやおや、一本取られたね、雷火」

思わずあたしが笑うと、雷火は苦笑いして「くそ餓鬼が」とかなんとかぼやきながら頭を振つた。あたしは肩の辺りで手を振つて、サトリを背中の方へ追いやつた。

「まあ安心おしよ。昨日ちよいと聞いた限りじや、どうやらサトリの出番つてわけでもなさそうだしね」

「相棒なしでも占えるのか?」と、これは雷火。

「重ね重ね失敬だね、あんたって奴は。あたしにはちゃんと靈力があるんだよ。でなきやどうやつてこいつを捕まえたと思うんだい」

あたしは小声ながらも剣呑な口調で言い返してやつた。間に挟まれた坊やが居心地悪そうだもんで、ちょっと穏やかな調子に戻して言葉を続ける。

「ただね、この力だけじゃ占い師としてやつて行くには不足なのさ。客は『分からぬ』なんて言葉を聞きたくて来るわけじゃないんだから」

「分からぬ、つて事もあるんですか」

おずおずと坊やが尋ねた。この行儀の良さを、お連れさんもちよつとは見習つて欲しいもんだねえ。

「未来も過去も、他人の気持ちも、何もかも見通せるような人間はいやしないよ。さてそれで、何を見て欲しいのか、改めて聞かせてもらおうかい。」じじじ話したくいんだつたら、ビこか場所を変えてもいいよ」

坊やはちょっとためらい、振り向きはせずに後ろの雷火の様子を窺つてから、小さくうなずいた。ははあ、なるほどね。

あたしは通りを見渡して客になりそつた顔がないのを確かめると、立ち上がつた。

「それじゃ、あんたたちの宿に行こつか。雷火、あんたはお供の一匹と散歩でもしておいでよ」

「おいおい」

慌てて雷火が抗議しかけたけれど、途端に黒犬の方が嬉しそうにワンと一声吠えて、足元をぐるぐる回りだした。おやまあ、元気だこと。早く行こうとばかり、雷火の足に頭突きしてせつついてるよ。

「待てよ、おい、俺はわんこどもの世話係じやねえぞ」

「心配しなさんな、坊やを取つて食いやしないよ。なるたけ正確に見るには、そばにほかの人間がいない方がいいのさ。そうさね、半刻もあれば足りるだろうよ」

あたしが言うと、雷火は不満げながらも、黒犬に押し出されるよ

うにして歩きだした。それまでお座りしていた白犬も、すつと立ち上がる。

「雪白、頼むよ」

坊やが呼びかけると、白犬は先刻承知と言いたげな目をくれて、しつかりした足取りで雷火と黒犬を追つて行った。

「いい名前だね」

あたしが言うと、坊やは嬉しそうにこりこりした。

「うん。雪白と、黒鉄っていうんだ」

「坊やがつけたのかい？」

店を片付けながら訊いたもん、その質問に坊やがどんな顔をしたのか、背を向けていて分からなかつた。返事のかわりに気詰まりな沈黙があつて、あたしが振り返ると同時に、坊やは「まかすよう」に答えた。

「俺には思いつけそうにないです」

「そうかい」

あたしも、ぽんと軽く応じておいた。

旅籠に案内する道すがら、坊やは妙に陽気だつた。雷火と出会つた時のことや、ここに来るまでに片付けた仕事のこと、やらかしたへманなんかを、楽しそうによくしゃべつた。きっと、この後で自分の過去、あるいは未来と向き合つのを、怖がつてゐるんだろう。

客の中にも時々いるんだよねえ。良くないことになりそุดとか、この商売はうまく行かないだろうとか、不安でいっぱいの客。大丈夫ですよ、って言つてもらつたくて來たくせに、やっぱり駄目だと言われるのが怖くて、肝心の占つて欲しいことを言わずに、余計なことばかりしゃべりまくる。

案の定、坊やも、旅籠に着いた途端にぴたりと無口になつた。

四畳半の狭い部屋で向かい合つて座ると、まるで座敷牢みたいな重苦しい空気が満ちてくる。あたしはやれやれと苦笑した。

「そんなに怖がらなくても大丈夫だよ」

「怖がつてない」

即座に激しい声が返る。自分の口調に驚いたように、坊やは身じろぎした。それから、恥ずかしそうにうつむいてつぶやく。

「すみません」

「謝らなくてもいいよ。多かれ少なかれ、先を知るのは怖いものですね」

「だから、怖がってなんか……」

「いない? だとしたら坊やはお馬鹿さんだよ。あなたは明日死ぬって言われるかもしないのに、怖くないのかい? 明日や明後日ではなくても、病に倒れるとか、追い剥ぎに殺されるとか、大事な人を失うとか…… そんな未来が見えるかもしない。どんなに今が幸せでも、人生つてのはいつどこで落とし穴を用意してるかわからないものさね。それを怖がらないお馬鹿さんが、思わぬ穴に足を取られて、ひどい目に遭うのさ」

あたしが諭すと、坊やは少し落ち着いた表情になつたものの、今度は別の不安に眉を寄せて言った。

「まるで、この世には災難しかないみたいに言つんですね」

思わずあたしは笑い声を立てた。

「極端だねえ。もちろん、いいことだつてあるに決まつてるじゃないか。禍福は糾える縄の『ことし』ってね。つらくて苦しいことが、後で良い結果につながるかもしないし、思わぬ幸運に小躍りしてたら、そのせいで不幸を招くかもしない。世の中そんなに単純じやあないよ。で、今は坊やの探し物のことを聞かなくちゃね」

あたしが促すと、坊やはこくんとうなずいて、真面目な口調で話しだした。

神官戦士になるための『しるし』のこと。自分はそれを見付けなければならぬのだけど、その手掛かりがまるきりないこと。『影』に憑かれているらしいこと、『しるし』ということはそれを祓う方法のことかもしれない、ということ。

「ふーん……ほかの神殿には行かなかつたのかい? その影とやらを祓うために、さ」

「影は神殿に近寄れないみたいなんです。だから、俺が神殿に入れば一度は離れるんですけど……神気の及ばない所まで出たら、またついて来る。いくら神殿にいる間に裸みやきをして清めても、駄目なんです」

「奇妙だねえ。単なる『穢れ』ってわけでもなさそうだね」

そもそも、どうしてこの坊やにくつついているんだがう。坊や自身が穢れたのなら、神殿で清めてもらえればそれでおしまいのはずだよねえ。はて。

つい考え込んだあたしに、坊やがおずおずと言った。

「あの、俺が影のこと話したの、おじさんには内緒にして下せー」

「うん？ あのトンチキ、話すなって言ったのかい」

あたしが問い合わせると、サトリが憤慨したようにシコツと鳴いた。

「占い師ごとに余計なことは話すな、じゃと。サトリに知られるのも厄介だ、しるしの手掛けりだけ訊いておけ、とな。知れば我らが彼奴をゆするじゃろつと」

「言いそうなことだよ」

やれやれ。あたしは苦笑して、雷火の顔を思い浮かべた。金にがめついて印象じゃあないけど、賞金稼ぎで暮らしているだけあって、何かと用心深そうだものね。いい気分はしないけど、腹を立てるほどのことでもない。サトリなんかと付き合つておおかげで、あたしも心が広くなつたもんだよ。

「そんならあいつが戻つて来ないしね、見てしまおうかね。わ、両手をお出し」

あたしはきちんと座り直し、ためらいがちに差し出された坊やの手を取つた。

「うまく見えるかどうかは、分からないよ。いいね」

それだけ言うと、あたしは目を閉じた。ゆっくりと息をしづめ、心の中に星の光を思い描く。自分がすっかり光に変わつたように感じたら、そのまま、光を重なり合つたてのひらにゆっくり集めていく。体のほかの所はなくなつたようだ。

それからそっと、少しずつ、水門を開く。星の光がてのひらを通り、向こう側へと流れて行く

二 過去と未来（2）（前書き）

注意：自然災害の描写があります。

二 過去と未来（2）

……山が見えた。

険しい山に挟まれた深い谷に、まばらに建つ家。小さな田畠。質素な身なりの人々。

古い小さな神殿。優しいまなざしの老神官。生まれたばかりの子犬たち。

（ここが坊やの故郷なんだね）

そう思った瞬間、不意に様子が変わった。

降りしきる雨。山がうめき、木々もろとも地滑りを起こして崩れ落ちる。大きな黒い岩が泥に飲みこまれる。濁つて荒れ狂う川。橋が流される。

神官が祭壇の前で祈っている。泣き叫ぶ人々、怒り、絶望。人柱を。鎮めるために。うちの子は駄目だ。うちの子だって。こちらを指さす手、手、手。

その子は身寄りがない。神に仕える身。うつてつけ。

叫ぶ口、すぐる目、訴える声、声、声。

皆のために。その命を。

ぐるり、暗闇が回る。

老神官のつらそうな顔。見上げる一匹の犬。

行きなさい。

神官が手をもたげ、どこかを指さす。

ぐるり。日が昇る。

手はまだ指さしている。

行きなさい。

北へ

ぱしん。光が弾け、闇が幕を引いた。

あたしは坊やの両手をしつかり握ったまま、額が畳につきそくな

ほど前に屈んでいた。やれやれ、毎度の『ことばはいえ、あんまり格好良くなはないねえ。

ふう、と息をついて顔を上げる。と、坊やはすっかり責めている。

「坊やにも何か見えたかい？」

「……深谷の里が。明師様も」

かすれ声でつぶやくように答え、坊やは手をふりほどいた。その手を両膝の上で握り拳にして、せゅうと唇を噛む。見識ことはいえ神官だものね、坊やにも見えて当然か。

あたしは背筋をしゃんと伸ばし、坊やを見つめた。この子ときたら本当に、何て重いものを背負っているんだろう。

「『影』の正体は分かつてるんだね」

「本当のところは知りません」坊やは首を振った。「たぶんあれが『災い』で、俺が深谷から離れている限り、皆は無事なんだと思つんんですけど。はつきり教えられたわけじゃ、ありませんから」

「あんたを送り出した神官様は、なんて言つてたんだい」

「……皆を許してやりなさい、つて」

答えた声が震え、ぽとりと涙の滴が畳に落ちた。

「ほかに方法がなくてすまない、でもおまえならきっと『しるし』を見付けられる、つて。だけど」

言いかけてしゃくりあげ、言葉を飲み込む。参ったねえ、泣かれちゃかなわないよ。

あたしは手を伸ばすと、坊やの肩をそつと叩いた。

「そんなら、きつとその通りなんだよ。故郷が懐かしいとか、恋しいとかで泣きたいのなら、好きなだけ泣くがいいさね。でも、騙されたとか嘘をつかれたとか、恨んで泣いてるのなら、そんなのはおよし。神官様はあんたを救おうとしてた。それはあたしにもはつきり分かつたんだから」

坊やは無言のまま何度もうなずいて、手の甲で『じじ』し田をこすった。嗚咽がおさまるまで少しかかったけれど、それでもなんとか

顔を上げた時には、きりつとした顔になっていた。潔いこと、本当に将来が楽しみだよ。

「綾さんが見たこと、おじさんには絶対に言わないで下さい」「言わないよ。でも、あいつはあんたの事情を知ってるんじゃないのかい？」

「なんとなく察してはいるみたいです。でも、ちゃんと話した事はない。もし聞かせたら、怒り狂って深谷の皆を吊るし上げに行きかねないから」

そう言つて坊やは苦笑した。あたしは目を丸くして、驚いたふりをする。

「そんなに義侠心あふれる性質だとは思えないけどねえ。面倒見は良さそうだけどさ」

「口ではないかげんなこと言つたりするけど、おじさんはすうぐいい人だよ」

「おやまあ。ですますも忘れて断言したね、この子は。

「本当にそなうならいいけどね。さてと、落ち着いたといひで、話を戻そうかい？」

おどけて軽い口調を作りながらも、用心深く話の舵を取る。坊やは一瞬怯んだものの、息をひとつ吸つてうなずいた。

「あんたが人柱にされそくなつたのは、地滑りや洪水を鎮めるためだね」

「はい。長雨で山が崩れて、里の境を守つていた石が倒れてしまつたから、そこから禍まがつ神が入つてきたんだ、つて皆が言いだしたんです」

自分に向かつて話すように、坊やは淡々と言葉をつないだ。

「雨がいつまでも止まなくて、川があふれて橋は流されるし、畠のものは腐つていくし。明師様がいくら祈つても駄目だつた。それで寄り合いが開かれた時に、守り石のかわりに人柱を立てよう、つてことに決まつて。……俺が選ばれたのは当然だと思う

身寄りがないから、か。自分たちは痛い思いをせずに、物事を良

くしようだなんて、勝手なものさね。あたしは話を邪魔しないように黙つたまま、憤りのため息をついた。

「でも、明師様は俺を埋めようとはしなかった。そのかわり、『しるし』を探しに行くように言われたんだ。雪白と黒鉄も一緒に。俺がいなくなつたら、代わりにあの『一匹』が埋められそうだつたからじゃないかな。神殿の犬だもんね」

そこで坊やはちょっと皮肉っぽい笑みをこぼし、顔を上げた。

「寄り合いの結果は聞いてたから、そんなこと出来るわけないって思つたんだけど、明師様が何回か里の皆を集めて話をされた後は、誰も何も言わなくなつた。それどころか、里を発つ朝には皆が見送つてくれたけど……皆の顔を見たら、追い出されるんだ、つてすぐ分かつたよ。一里も行かずに影が後ろに現れた時も、俺は驚かなかつた」

言い終えて、坊やは深く息を吸つた。目はまた涙で潤んでいたけれど、もう泣きはせず、そっぽを向いて堪えている。あたしはちょっと間を置いてから、問いかけた。

「嫌だ、って言わなかつたのかい」

坊やは黙つてうつむいた。そうだねえ、言えるわけないか。まわりの村人は敵だらけ、唯一味方の神官様に迷惑はかけられない。あたしは坊やの横顔をとつくり見つめて思つた。もし人柱にされていたら、この子は最後まで黙つて土を被せられただろう。震えながら泣きはしても、歯を食いしばつて、助けて、なんて叫びはしないだろう。困つた子だよ。

ふう、とため息をついて、あたしはなるたけ穂やかに言つた。

「言つておけば良かつたね。たとえ無駄だとしてもさ」

坊やは振り向かない。その肩に暗い影が見える気がした。

「しまいこんだ言葉は毒になるんだよ。心の中にいつまでも留まつて、内側からじわじわと蝕む毒さね。あたしも、いくつか抱えてる」

「……綾女さんも？」

「お、やつとこいつを見たね。

「そりゃ。早くに親を亡くしてね。親戚が養ってくれてたんだけど、
あの人たちも貧しかったもん。あたしだけ人買いに売られたんだ。
そのかわり、弟と妹は絶対にちゃんと育てるって約束させたけど、
引き離されるのは辛かつたねえ」

「……俺も」

小さな小さな声で、坊やがつぶやく。

「出て行きたくないか、なかつた」

「うん」

あたしもさややきで答えて、坊やの頭をそつとなでた。坊やはじ
つとしていたけれど、じきに恥ずかしくなつてきたらしい。見る間
に頬が桜色になつて、うつむいてしまつた。あはは、可愛い可愛い。
おつと、笑つちゃ悪いね。あたしは手をひつこめて、顔をじまか
すために咳払いした。

「それで？ 深谷を出たあと、北には何があつたんだい？」

一 過去と未来（3）

「北？」

いきなり話を変えられて、坊やはきょとんとなつた。

「そう、東西南北の北。神官様が、北に行きなさいつておっしゃつたろ？」

あたしの言葉に、坊やは戸惑つた様子で首を振つた。

「行き先は何も聞いてないよ。だつて深谷の北には険しい山があつて、越えられるような道もないし、里から出るには南の方へ向かう一本道しかなかつたから」

ははあ、なるほど。あたしは一人で納得してうなずいた。どうやらあたしの靈力も、少しはあてになるみたいだね。

「そうかい、坊やには見えなかつたんだね。あたしには、北を指さす手がはつきり見えたし、行けつていう声も聞こえた。どうやらそれが、あんたの『しるし』を示す手掛かりらしいね」

途端に坊やの顔が、ぱあっと希望に輝いた。うん、いい顔だ。

あたしもつられて笑顔になつたところで、サトリが不機嫌なぼやきをもらした。

「いらん奴が戻つて来おつたわ」

誰が、と問うより早く、騒々しい足音が耳に届いた。ああ、あの男かい。

何の前置きもなく襖が開く。

「おや、犬の散歩は……」

終わったのかい、とからかいかけたあたしは、最後まで言えずに絶句した。雷火ときたら、髪はぼさぼさ、体中に砂をつけて、着物は片袖が取れている始末。

「おじさん、どうしたの」

「いつたい何をやらかしたんだい」

坊やとあたしは同時に言つて、慌てて立ち上がつた。雷火は「何

でもねえよ」と不機嫌に唸つたけれど、サトリがシシリと笑つて秘密を暴露してしまつた。

「谷の方に近づき過ぎたんじや。犬と遊んでるつわに足を滑りせて、危うく崖つぶちから転げ落ちそつになつたとさ」

なんとまあ。あたしは坊やと顔を見合わせ、弾けるように笑い出してしまつた。

「なんだい、心配するんじやなかつたよ」

「うるせえ。あんな所でいきなり崖になつてるなんて、誰が考えるかよ。こら真理、おまえまでげらげら笑うんじやねえ！　だいたい、誰のために俺がわんこりどもを連れてつたと思つてんだ」

「ごめん、ごめん。でも、おじさんも結構楽しんできたみたいだね」笑いながら坊やが言つたもんで、雷火は真つ赤になつてしまつた。サトリが「犬好き」と小声で何度も繰り返す。あたしたちがあんまり笑つたもんで、雷火はぶりぶり怒つて背を向けた。

「あれ、どこへ行くんだい。そんなに照れなくてもいいじゃないか」「針と糸を借りて来るんだよ」

ふてくされた口調で言つて、雷火は取れた袖を振り回した。なるほどね。それでふと思ひ出し、あたしは坊やの着物をひりつと見てから言つた。

「そうだね、直してあげようか。ついでだから、裁縫箱」と一式借りりといでよ」

「余計なお世話だ、自分で出来らあ。占いは終わつたんだろ、さつと帰れよ」

しつしつ、と野良猫を追つように手を払つ。本つ当に、なんだつてこう失敬なのかね、この男ときたら！

「あのねえ、あんたの袖なんかどうでもいいけど、坊やの裾と袖丈を直してあげようつて言つてるのぞ。つんつるてんじやないか」

言われてやつと氣が付いたように、雷火が坊やを振り返つた。

「自分の面倒は見られても、坊やにまでは氣が回つてないようだね。ほら、さつと行つといで」

「いつから俺はおまえの使い走りになつたんだよ」

ぶつくさ文句をたれながらも、雷火は決まり悪げにそそぐと出て行く。今まで気にかけていなかつたことを、他人のあたしに指摘されたのが恥ずかしかつたんだろう。やれやれ、まつとうに恥じる気持ちがあるのなら、もうちょっと態度を改めりやいいのにねえ。ともあれ、そんなわけでしばらく後には、坊やは宿のかいまきにくるまり、あたしと雷火はせつせと手を動かしていた。自分で出来る、と言つただけあって、雷火の手つきは慣れたものだ。糸の端に玉結びを作つてないことに、いつ氣付くかは知らないけどね。

「北に行けつつても、それだけじゃあな」

雷火は考えながらちくちくと針を動かしている。そつちを見ると笑いだしそうだから、あたしは自分の手元に集中しているふりで答えた。

「どこに行つて何をすればいいのか、事細かに教えてくれるようじや、『しるし』探しの意味はないつてことじやないかい。何にしろ、ここから北に向かうなら、峠を越える一本道しかないね」

「俺が転がり落ちた道か」

雷火は面白くなさそうに言つて、シコツと布をしごいた。当然、糸はするりと全部抜けてしまつ。坊やがふきだし、あたしはうつむいたまま笑いを噛み殺した。雷火はうんざり顔で糸と袖を眺め、ため息をついた。

「おまえらな……氣付いてたんなら教える！ まつたく」

「おや失敬、『余計なお世話』かと思つたのさ」

あたしが意地悪く言つたので、雷火は唸りながら玉結びを作つた。「そうそう、あんたが転げ落ちた山道の先には、吊り橋があるんだけどね。そこを渡るには金がいるよ」

「ああ？ 通行料を払えつてのかよ。誰がそんな迷惑なことしてやがるんだ」

「こ」の瀬場の名主さね。橋を直したり手入れしたりするのに使う金だ、つて言つてるけど、実際どうなんだか。まあ人の行き来は多い

から、あまり高くはないけどさ」

あたしは言つて、糸の端を切つてから顔を上げた。雷火は苦々しげに、坊やは困った様子で、顔を見合わせている。サトリがシシリ笑い、文無し、と小声でささやいた。まったく、口の悪い妖だよ。あたしは一人に向かつて慰める口調で言つた。

「どうしても嫌だつてんなら、道がないでもないよ。瀬場の名前通り、この近くで谷を渡れる浅瀬があるのさ。ただし、険しい崖を降りて、川を渡つたらまた、向こう岸の山をえつちらおつちら登らなきやならないけどね」

「なんだ、道があるなら早く言えよ」

あからさまに雷火がホッとする。あたしは呆れてしまつた。

「そんなに懐が寒いのかい？」

「うるせえな」雷火がつづけんどんに応じると、

「うん、まあね」坊やがうなづくのが同時だつた。

雷火は坊やを睨みつけたけれど、坊やの方は首を竦めてその視線をやりすごした。

「隠したつてサトリがいるんだから、ばれるよ。そうでしょ、綾女士

「うちのサトリは性悪だからね。人が知られたくないことは喜んで教えてくれるよ。だけどあんたたち、そんなに困つてゐなら周旋屋に行けばいいじゃないか。まるつきり仕事がないわけじゃないだろう？」

「あいにく、それがねえんだよ」

雷火は言つて、口をへの字に曲げた。

「着いてすぐに小物の妖を退治して、ちょっとは金が入つたがよ。あとはさつぱりだ。こちとら大所帯なんで、仕事がねえところにや長居も出来ねえのさ」

「ああ、そうか。この里もあたしが居座つてゐる内に、妖の数が減つてきたからねえ。」

「それで、あたしの見料も払つてもらえないわけだね」

やれやれ。口止め料代わり、とは承知していたけれど、それでも
氣を変えて手間賃ぐらいはくれやしないかと思つたんだけど。子供
と犬一匹を連れてる奴から、むしり取るわけにはいかないし、それ
に……まあ、仕事がないのはあたしのせいでもあるわけだし。

「ごめんなさい」

坊やがしおらしく謝つたもんで、あたしは急いで氣前よく笑つて
見せた。

「氣にすることないよ。たまにはこんな事もあるさね。それじゃあ、
発つ時はあたしが渡し場まで案内してあげるよ。また転げ落ちられ
ちゃ、大変だからさ」

そう、そして、早いところに行つて貰わなくちゃね。余計な事
まで知られない内に。

三 渡河血路（一）

三

翌日、あたしは店を出でずに肆へ向かひつことになった。

「田印か何かさえ教えてくれりや、わざわざ案内してくれなくともいいんだぜ」

雷火が胡散臭そうな口調で言つた。遠慮している風に装つて、本心じやどうせ、たかられるんじやないかと警戒してゐんだらう。サトリじやなくとも見え見えだよ。

「うるさいね。あんたが崖から転げ落ちようと、道に迷おうと、知つたこつちやないよ。あたしは坊やが心配でついて行くのさ」

「おーおー、真理、おまえ随分と気に入られたな。気をつけろよお。よそ見してゐ隙に、取つて食われるかも知れねえぞ。ひょいぱくつ、てな」

「なんだい雷火、あんた自分が可愛くないからつて、ひがんでるのかい」

「馬鹿野郎、誰がひがむか！」

相変わらずの言い合いも、三日田となると坊やも慣れたよつで、笑いながら聞き流している。お天氣もいゝし、風は爽やか。こんな小春日和は散歩も悪くないね。

集落が途切れ、道が山へ上りはじめる。しばらく進んでから、本道を外れて木立の中を下つて行く細い枝道に入った。

「なんだ、俺が落ちかけたところじやねえか。くそ、脇道になつてたなんて、見えなかつたぞ。草刈りぐらいしどけつてんだ」

雷火が悪態をついた。なるほど確かに、知らなければ道があるとは見えないかもね。

「下まで落ちなくて良かつたねえ。気を付けなよ、ここからは道を踏み外したら谷底へ真つ逆さまだからね」

脅しておいて、あたしは先へ進んだ。

「茶店のおばあさんに聞いたんだけど、こっちの方が旧い道なんだ
つてさ。でも橋が出来てから、あっちの方が道もいいし便利なんんで、
誰も通らなくなつて、荒れてるんだよ」

急な斜面にはりつゝようにして続く細い道は、人ひとり通るのが
やつとだ。おまけにところどころ崩れているし、でこぼこしていて、
やたら危なつかしい。

どうにか下まで降りると、あたしはホッと息をついた。ふう、や
れやれ。

崖の下から大きな丸石だらけの河原が広がり、その間を、勢いよ
く飛沫をあげて小さな流れが幾すじも走つていて。幅の広い本流が
岩を洗い、ちょっと先で滝になつていて。そこので両岸の崖がま
た狭まって、小さな流れは全部ひとつにまとまつていて。

上流の方も似たような景色だつた。こつこつした大きな岩の間を、
ほとんど垂直に川が駆け降りてくる。崖と崖が内緒話でもするみた
いに身を寄せ合つていて、細い橋が架かっているのが見え
た。あの吊り橋がなければ、谷を渡れるのはここだけだ。

「さて、ここいらでいいかね。川を渡つたら、あそこから登るんだ
よ。ちよいと見えにくいかもしれないけど、なあに、じきにまた本
道と行き会つだらうや」

あたしは向こう岸の上り口を指して言つた。

「ありがとうござります」

深々と頭を下げたのは、もちろん坊やの方だつた。

「本当にいろいろ、お世話になりました。それなのに……」

「いいつて、いいつて」

あたしは照れ臭くなつて、急いで手を振つた。

「お礼なんていいよ。お節介があたしの性分なんだからさ」

あんたは昔、故郷に置いてこなきやならなかつた小さな弟に、ち
よつと面差しが似てるんだよ　なんて、恥ずかしくて言えやしな
い。

「気にしないで、や、お行きよ」

あたしがそう言つた直後、サトリが肩で猫のよう口フーッと唸つた。同時に、一匹の犬も低くウウッと唸りだす。

その意味はひとつ。『敵』だ。

あたしたちは揃つて河原に向き直つた。

最初は誰もいよいよに見えたけれど、じきに、サトリと犬が嗅ぎ付けた敵が現れた。向こう岸の木立が揺れ、素早い身のこなしで、汚いなりの男たちが十数人ばかり、川岸に降りてきたのだ。

「ちつ、なんだ、人間かよ」

雷火が嫌そうに舌打ちした。妖の方が良かつた、つて意味だらう。気持ちは分からぬでもない。相手が悪党でも、人を殺めるのは気分が悪いものだし、第一、こいつらを退治して金がもらえるわけじゃないものね。

連中は、ひげも髪も伸び放題のぼさぼさで、これ見よがしに武器を手にしていた。どうせ誰かからの分捕り品だらうけど、刀だつたり、槍だつたり、いろいろだ。

「こやつら、ただの追い剥ぎではないぞ」

サトリがささやいた。なんだつて、とあたしは心の中で問い合わせる。近くにいた坊やも、眉をひそめてこっちを見つめた。

その間にならず者の一人が、流れのすぐそばまで進み出してきた。

「よう、姐さんたち、上に立派な吊り橋があるので、ここを渡ろうつてのかい？ 物好きじやねえか。橋を渡れない理由でもあんのかい」

「あたしは見送りだよ。そこの兄さんが、吊り橋は怖くて足が竦むつて言うんでね、道を教えてやつたのさ」

あたしが大声で言い返すと、向こう岸で嘲り笑いが上がつた。ちらつと雷火の方を見ると、案の定、ものすごく嫌そうな顔であたしを睨んで、口だけ小さく動かして何やら罵つてくれた。

「覚えてろ、じゃと」

サトリが小馬鹿にした口調でしゃしゃく。あたしは声に出さずに問

いかけた。

(それより、ただの追い剥ぎじゃない、ってどうこうことだい)
「奴ら、名主に雇われとる。橋を使わずに瀬を渡ろうとする者を襲うのが役目じゃ。こっちには山賊が出るから通らぬが良い、と噂を立てるためじゃうつな。見返りに獲物を融通してもらつといふよつじやぞ。おぬしらは『知らせにないが、いい獲物』じゃと」「獲物だつて？」

あたしは思わず唸つた。やつらにとつての獲物、つまり旅人や行き商人かい。とりわけ、いなくなつても誰も気に留めそうにない、うんと遠くから来た者や、決まつた商売相手が行き先で待つてゐるわけではない者。

「名主がそういう通行人を、奴らに教えてることだね」

「さよう。通行料を取るのは、通行人の数や素性を調べるためでもあるんじゃろうて」

「汚い商売してくれるじゃないか」

あたしは舌打ちして、ならず者たちをねめつけた。そういう連中が第一に狙つのがどういう立場の人間か、あたしはよく知つてゐる。身寄りのない、女子供だ。けだものめ！

サトリの話を聞いていた坊やも、険しい目でならず者たちを睨んでいる。

「参つたね、見逃してくれねえかな」

わざとらしく哀れっぽい声を出したのは、雷火だった。

「俺ア高いところは苦手なんだよ。どうにも膝が抜けちまつてね。けど、北へ行くにはこの峠を越すしかねえんだろ？ 賴むよ」

なあ、と馴れ馴れしく頼む。坊やはそんな雷火の態度が気に入らないらしく、怖い顔でむつり黙つていた。そうさね、あたしもこんな連中は骨まで潰してやりたいよ。だけど今は駄目だ……今は、まだ。

ならず者たちはげらげら笑つて、ゆっくり川を渡りだした。あたしたちは、それに押されるようにじりつと後ずさる。とうとう、察

しの悪いあたしたちに業を煮やして、サトリが大声を上げた。

「こやつらは、お楽しみに食えとる。話は通じぬぞ！」

サトリの言葉はならず者たちには理解できなかつたようだけど、それでも、何か変な動物の鳴き声を聞いたと思つたらしい。ぎょつとしたように何人かが足を止め、きょろきょろした。その隙に雷火と坊やが、刀の鞘を払う。あたしは身を翻して逃げ出した。

わつ、と声が上がる。ならず者どもがいつせいに走りだし、雷火と坊やに襲いかかつた。もちろん、あたしを追つて来る奴もいる。「ああもつ、面倒だね！」

小声で毒づいて、あたしは懐を探つた。細くて華奢な守り刀が手に触れる。せめて、坊やの目に触れないところまで逃げないと。「右に屈め！」

サトリの声と同時に、あたしは体を折り曲げた。直後、ビュンと風を切つて矢が飛んで行く。ちょっと、弓矢まで持つてゐるのかい？ しかもいい腕前じやないか、ええ腹の立つ！ 急がなきや！ と、焦つたのがまずかつた。

「あつ！」

踏んづけた丸石がじろんと回り、足が滑つた。しまつた！ とつさに手と膝をついて、まともに倒れるのは堪えたけれど……ああ駄目だ、足首を捻つちまつたよ。顔を上げると、ほんの五、六歩のところまで、下卑た笑いを浮かべた男が迫つていた。視界の隅で、坊やがこつちを振り向いて責めるのが見えた。

「雪白、黒鉄！ 綾女さんを守れ！」

坊やが叫ぶ。けれど、一匹の犬にとつちや、坊やの方が大事なご主人様だ。どつちみち一匹とも、あたしにかまけていられる余裕はないさうだし、こうなつたらもう仕方ない。

「おいで、アンシ闇鷺！」

あたしは空に向かつて呼ばると同時に、守り刀を抜いて、親指に小さな傷をつけた。

切り口から血がプツツと膨れて、小さな玉をつくる。

男が耳まで裂けそうなほどニタツと笑つて、あたしに手を伸ばした

「えつ？ あ、うわああッ！」

羽ばたきの音と共に、漆黒の鳥が舞い降りる。夜を抱いたような翼は、大人が両腕を広げたよりもまだ大きい。鋭い爪とクチバシが、瞬く間に男を血まみれにしていく。

男は必死に腕をかざして頭をかばい、悲鳴の合間に助けてくれと叫びながら、やみくもに刀を振り回す。けれどもちろん、あたしの闇鷲には傷ひとつつけられない。

すさまじい悲鳴に、ならず者たちも、雷火と坊やも、何事かと驚きの目を向けた。男はヒイヒイ叫びながら、クチバシに追い立てられて滝の方へとよろめく。

「駄目だ、そつちは危ねえ！」

ならず者の仲間が叫んだ時には、闇鷲の力強い一蹴りが、男を滝へ追い落としていた。

三 渡河血路（2）

「……化け物だ」

誰かがかすれ声をもらした。あたしは座り込んだまま振り返り、すっと手を上げた。そして、次の標的を定めるように、人差し指をのばしてならず者たちを順に示し……

「うわあー！」

おや、もう逃げ出しちまつたよ。なんだい、意氣地なしどもばかりだね。

フンと鼻を鳴らしたあたしのそばに、闇鷺がバサリと降りてきた。姿は鶴に似ているけれど、鴉のように全身真っ黒。そして目は炎のように輝いている。いつ見てもほれぼれするねえ。あたしは先刻つけた親指の傷を闇鷺のクチバシに押し当て、血をなすりつけてやつた。闇鷺は人の生き血をとする妖じやあないけど、たまにこうしてやると喜ぶのさ。あたしとの絆も強くなるしね。

「びっくりさせるじゃねえか。いつたい何を飼つてやがるんだ、ええ？」

雷火が呆れたように言つて、一いつちにやつて來た。皮肉っぽい顔を作ろうとしてはいるけど、賛嘆の色が隠せていない。ふふふ。

「綾女さん、それ……まさか、オンモラキ陰摩羅鬼オンモラキですか？」

坊やもおずおずとやつてきて、遠慮がちに闇鷺を見た。炎の瞳に見つめ返されて縮こまるときは、叱られるのを怖がる子供みたいだ。ま、無理もないけど。

「オン……何？」雷火が変な顔をした。

「オンモラキ。神殿に住んでる靈鳥で、急け者を見つけると出でくるんだつてさ。本当にいるなんて思わなかつた」

「見習いに言つことをきかせるための、ただの脅し文句だと思つたかい？」

あたしがくすくす笑つてからかうと、坊やは赤面した。

「実を言うとあたしも、これが本当に陰摩羅鬼かどうかは、知らないんだけどね。お師匠さんから受け継いだのさ。心配しなくても、人は食べないよ。ほかの小さな妖を食べてゐみたいだね。腹を空かせる様子がないと思つてたけど、さつきの連中やら名主やらが強欲だから、いくらでも雑魚が引き寄せられてきたんだろ？」「

話を聞いていた雷火が、見る見る嫌そうな顔になつた。失敬だね、あからさまだつたらありやしない。

「つてことはおまえ、巫師だつたのか」

「だつたら何だつてのさ。おかげで助かつたろ？ 礼ぐらい言つたらどうなんだい」

「ああ、そうかい、ありがとよ。だがそいつが妖を食つちまつから、俺たち流れ者の仕事がなくなつたんじゃねえか。錢がありやあ、わざわざこんな瀬を渡ろうなんてケチくさいこと考えるかよ。まつたく、とんだ災難だ」

「ぶつくさぼやきながら、雷火は刀を鞘におさめた。と、坊やが面食らつた様子で、あたしと雷火をかわるがわる見て言つた。

「巫師つて……でもおじさん、巫師の大半は話の通じないジジババばっかり、つて言わなかつた？」

「ちょっと、雷火、あんたね」

「騙されるなよ真理、こいつだつて中身は鬼ババアじやねえか」「なんだつてえ！？」

カツとなつてあたしが怒鳴ると、闇鷺がバサバサ羽ばたいて雷火をつつきだした。

「ほら見ろー！ うわ、いてて、やめろ、やめろつたら！ 分かつた、悪かつた、俺が悪うございました、お優しい綾女様！」

呆気に取られていた坊やが、しまいにふきだし、朗らかな声で笑いだした。それに免じて、あたしは闇鷺を呼び戻す。雷火は小さな引っ搔き傷だらけになつた腕をフーフー吹いて、恨めしげにあたしを睨んだ。フン、人を鬼ババア呼ばわりするからさ。

「まあこのぐらいにしどこうじやないか。お互い、面倒に巻き込ま

れちまつたわけだしね。あたしは親切のつもりでんたちを案内したけど、結果はこのざま。巫師だつてばれたんじや、あたしももう瀬場にはいられない。無害な占い師ならともかく、お化け鳥を操る鬼ババアときちやあね

あたしは皮肉つぽく言つて、乱れた髪をかきあげた。そして、坊やの方を見て続ける。

「だけどまことに、足をくじこちまつたんだよねえ。一人じや歩けないし、あの連中が仕返しに来ないとも限らないし、頼りになる道連れがほしいんだけど」

「おいおい……」

雷火がうんざりしたうめきを漏らしたのとは対照的に、坊やはパツと嬉しそうに顔を輝かせた。

「もちろん、俺たちが一緒に行くよ……あ、いや、行きます。お供します、かな？」

何度も言い直すのがおかしくて、あたしは思わずふきだしてしまつた。

「いいよ、もう、そんなに気を遣わなくても。さて、そうと決まつたら、まずは里に戻らなくちゃね。あたしの荷物は宿に預けたままだから……まさか闇鷺に取りに行かせるわけにもいかないし」

財布は身につけているけれど、荷物の中には鏡やら櫛やら、替えの足袋やら何やら、大事なものがいつぱいある。とは言え、あたしのこの足で里に戻るとなると、それより早く、あの連中が名主に事の次第を知らせてしまうかもしね。弱つたね。

「その足じや無理だろ。俺がひとつ走り行つてきてやるよ」

おや。雷火ときたら、あたしの考えを読んだみたいことを言つじやないか。

あたしが田をぱちくつさせていると、坊やが「待つて」と雷火を引き留めた。

「それより、雪白と黒鉄に取つて来させたらどうかな？ その間に俺たちは、綾女さんを支えて向こう岸まで渡つていたらいわけだ

し

「お、そいつは名案だ」

雷火があつさりうなずいたもん、あたしは慌てて口を挟んだ。
「ちょいとお待ちよ。いくらその一匹そりが賢くても、宿屋で荷物を渡
してくれつて言つのは無理だ。それに、犬の背中にくくりつけら
れる重さじやないよ」

一匹ともがつしりしちやいるけど、犬つてのは背中に物を載せる
ようにはできないんだからさ。そりか何かで引かせる分には役立
つけど、それじやあ時間がかかるし、第一そんな道具はない。

そう思つたのだけど、坊やと雷火は揃つてあたしを振り返り、得
意げににんまりした。氣色悪いね、いつたい何なんだい。

「まあ、見ててよ」

言つと坊やが一匹の頭に手を置いて、小さな声で祝詞をとなえ始
めた。何をするつもりなんだか……

「えつ？ なに、まさか」

無意識に声がこぼれた。ちょいと、そんな事があるものかね？
ああ、この目がおかしくなつたんでなければいいんだけど。

あたしは何度も瞬きして、つぐづくと目の前のものを見つめた。
ほんの今し方まで犬だったのに、そこにいるのは間違いなく、二人
の……若者、だった。身につけている着物は色こそ白と黒の違いが
あるけれど、どちらも神官戦士の装束だ。

「驚いたねえ。夢でも見てるみたいだよ」

あたしはぽかんとして、雪白と黒鉄をつぐづく眺めた。その間に
雷火が矢立てと紙を用意して、あたしに差し出した。

「一筆書いてくれ。わんころどもは、人の姿は取れるが、言葉はま
だ話せねえらしいんだ。まあ、話せたとしても、宿の者に信用して
もらわにゃならんわけだし」

「ああ、そうだね」

まだぼうとしたまま、あたしは筆を取つた。ええと。この書き
付けを持参した者にあたしの荷物を預けて下さい……と、こんな感

じかねえ。

白と黒の若者は、書き付けと一緒に坊やからいくつか注意を受けると、つむじ風のように走り去った。いやこれが、もののたとえじやなくて、本当に風みたいなんだから恐れ入るよ。あつと言つ間に見えなくなつちまた。

「さて、それじゃ俺たちは川を渡るとするか。立てるか？」

雷火が差し出した手につかまつて、あたしはなんとか立ち上がった。またぞろ丸石で足を捻っちゃたまらないから、一步一歩、用心深くじりじりと進んでいく。倒れそうになつたらいつでも支えられるように、坊やがすぐ後ろからついてきた。なんだかいきなり年寄りになつた気分だよ。

川を渡る時はさすがに足場が悪くて、一度、がくんと体勢を崩して石から落ちかけてしまつた。とつさに雷火が支えてくれたのはいいんだけど、そのために雷火は両足とも水に浸かつてしまつた。

「すまないね」

あたしが詫びると、雷火は流れに両足を浸したまま、苦笑して応じた。

「どうせさつきの立ち回りで、水たまりに突つ込んでしまつたんだ。川にはまつてずぶ濡れのおまえさんを引き上げることに比べりや、こっちの方がマシつてもんぞ」

口調はやたらと偉そうで腹が立つけれど、なんだかんだ言つて、結局雷火はざぶざぶ膚まで濡らしながら、あたしを無事に渡させてくれた。あんまり認めてやりたかないけど、坊やが言つた通り、この男は結構いい奴なのかもね。

「まあなんとか渡れたな。しかし、ここからの方が難儀だぞ」

急斜面を見上げて雷火が、げえ、という顔をする。坊やもそつくりの仕草で首をのけぞらせ、苦虫を噛み潰した。思わずあたしは「およしよ」と声をかける。

「そんな顔しちゃ、男前が台なしじゃないか。むかくるしごおつさんの真似なんか、するもんじゃないよ」

「なんだと！？ 置いてくや、この鬼ババア」

即座に雷火が吠える。うるさいねえ、前言撤回。やつぱりろくでなしだよ。あたしはフンとそっぽを向いた。

「いいよ、一人で先に行けばどうだい。あたしは坊やと、あの白黒のわんこたちに助けて貰うから」

「本つ當に可愛げのねえ女だな。だから巫師つて奴は嫌いなんだ。くそつ」

吐き捨てるように言つて、雷火はそちらの小石を拾うなり、えいやと遠くへ投げた。巫師に何か恨みでもあるのかねえ。

「そう言えば」坊やが雰囲気を変えるように口を挟んだ。「綾女さん、占い師と巫師はどう違うんですか？ 占い師なら里にいられるのに、巫師は駄目なんですか」

「そりや、一言でいうなら靈力の差だね。だから出来る事も段違いなのさ。占い師は何か見ることは出来ても、変えることは出来ない。けれど、あたしたち巫師は違うよ」

あたしは胸を張り、誇らしげに笑つた。そう、これはあたしが自力で勝ち取つた技だものね。神殿にも頼らずに、さ。

「より強い妖を従えて、様々なことを、望むように変えていく。何もかもつてわけにはいかないけどね。でも、少なくともあたしは、飢えることも、誰かに虐げられることも、なくなつた。だからこそ他の連中にはやつかまれたり、怖がられたりするんだけどさ」

ちらつと雷火の顔色を見て、あたしは一応、言葉を付け足しておいた。

「そうさね、確かに性根の曲がつた巫師もいるよ。好き勝手するのに慣れちまつて、他人のことなんぞ考えられなくなつちまつた奴らさ。おかげでこつちはいい迷惑だよ」

フン、と雷火が鼻を鳴らした。なにさ、こつちが折れてやつたつてのに、随分な態度じやないか。

あたしがムツとなつていると、雷火は物も言わずにくるりと背を向け、その場にしゃがんだ。……何のつもりだい？

「ほら、そろそろ行くぞ」

「ぶつきらぼうこ、それだけ言ひ。ええと、なんだい、つまり、

「おぶされ、つてのかい？」

「ほかにこの崖を上がる方法があるか？」

「うわ、嫌そうな声。もつちよつとなんとかならないものかね、本当にこの男ときたら…」

とは言え、確かにこの急斜面を、片足でよちよち登るのは……無理だらうねえ。上から引っ張つてもらつて、下から坊やに押し上げてもらえば、なんとかなるだらうけど。でもそれじゃあ、あたしが足を滑らせた途端、三人とも団子になつて転げ落ちてしまつ。

「ないようだね」

あたしはため息をついて、渋々雷火の背におぶさつた。おや……存外、広い背中だこと。ふうん。まあとにかく、次にこいつが言いそうなことは、大体予想がつくけどね。

「こよッ、と……おつとと。くそ、重てえな、懷に石田でも入れてんのかよ」

ほらきた。あたしは鼻を鳴らしただけで、答えなかつた。サトリがあたしの肩でくるくる回つて、キシシシ、といやらしく笑う。余計なことを言い出されちゃ、たまらないよ。

「お黙り」

「黙れ」

はからずも、あたしと雷火は同時に唸つた。サトリは一人分の声に押し潰されたみたいに、キュッと鳴いて身を縮め、いそいそと背中に隠れる。

後ろから坊やが、なんだか複雑な顔でついてくるのが分かつた。

四 後ろ足で砂を（一）

四

崖道を登りながら、雷火が唐突に訊ねた。

「おまえ、どこで巫師の技を習つたんだ？」

「聞いてどうするのさ」

「別に。黙つて登つてると、気が滅入るからよ。おまえは暇だろ、何か話せよ」

それが人にものを頼む態度かい？ まつたく、呆れるね。とはいへ、ちらつと後ろを見るなり、興味津々の坊やと目が合つちまつたんじや、仕方ない。あたしはぼつぼつと、細かい事は省いて、身上話ををして聞かせた。

「あたしは人買いに連れられて、都まで行つたんだけどね。幸い、女郎屋なんかじやなくて、大きなお屋敷の下働きに買い取られたのさ。どこだつたつけねえ……弓削の中将とか言つたと思うけど」と、いきなり雷火がつんのめつた。あたしは危うく落ちかけ、慌てて肩にしがみつく。

「ちよいと、気をつけとくれよ。心の臓が止まるかと思つたじやないか」

「ああ、悪い悪い」

「おや？ なんだい、素直に謝るなんて、おかしいね。

妙な気分がしたけれど、それきり雷火が黙つてしているので、あたしは話を続けた。

「最初は犬ころよりひどい扱いだつたけど、じきに、お師匠さんがあたしを見に来た。そのお屋敷には、なんと専属の巫師までが住んでいたんだよ。あたしが人に見えないものを見るもんと、気味悪がつた女中が噂をしたんだろうね。それを聞いたお師匠さんが、あたしを弟子にするつて決めたのさ。それからは、お師匠さんの手伝い

やら雑用やらをしながら、様々なことを学んだよ。

でもねえ。巫師の仕事つてのは、田舎で村人相手に病を治したりしてゐるうちにいいけど、お偉いさんが絡むと危なくつていけないね。お師匠さんは、屋敷の主の『敵』とやらを大勢呪い殺したり、病や怪我を見舞つたりしていただけれど、しまいにどうひへ、相手方の巫師に負けちまつたんだ。

そのせいで、お屋敷はさんざん。お師匠さんはその場で血を吐いてこときれちまうし、主は気が触れてわめきながら刀を振り回すし、奥方は倒れるし、蔵から火は出るし。

……で、そのどやくさ紛れに、あたしも屋敷を逃げ出したつてわけ

あたしが締めぐるど、雷火はぼつりと「あっけねえな」とつぶやいた。確かにそう聞こえたのだけど、

「何だつて？」

とあたしが聞き返すと、ぶつきりぽつた声が返ってきた。

「おっかねえな、つてつたんだよ」

なんだか様子がおかしいねえ。でもまあ……根掘り葉掘り訊くこともないだろ。

「まあね。あんな世界とは一度とかかりあいになりたくないよ」あたしは軽い口調で答えてから、ちらりと後ろを見た。坊やはうつむいたまま、黙つて足を動かし続けている。何を考えてか、随分と深刻な表情だ。

「悪いのは誰だらう」

耳元でサトリがささやいた。坊やに聞かれないように、うんと小さな声で。

「巫師がいるから? 違つ、巫師に人を呪わせる主が悪い。でも、巫師がそんな仕事を引き受けなければ……」

おやおや、難しいこと考えてるんだねえ。あたしは小さなため息をついた。

「ねえ、坊や」

あたしが声をかけると、坊やはびっくりした様子で顔を上げた。その目がサトリを見付け、はっと険しくなる。

「どっちが悪い、なんて、単純に白黒つけられるもんじゃないんだよ。あの一匹の犬と違つてね、人間は灰色のことが多いのさ」

「じゃあ、さつきのならず者たちも、灰色なんですか」

「それはどうかねえ」あたしは苦笑するしかなかつた。「かなり真っ黒だらうと思うよ。だけもしかしたら、あんな連中も、たまにはふと、情けを見せるかも知れない。もつともあたしは、だからつて容赦してやるつもりなんざないけどね」

「……難しいですね」

「そうだね。でも、だからこそ、どんな人間でも救われる道が残されてるんだろうさ」

なんとなくそんな事を言つたあたしに、雷火が鼻を鳴らした。坊やは黙つて、地面に目を戻す。またサトリが耳元にやつてきただけで、あたしも今度は、その声を聞こうとしなかつた。

ようよう崖を登りきつたところで、あたしたちは腰を下ろして一休みした。雷火はもちろんだけど、一人分の荷物を背負つた坊やの方も、へとへとになつてしまつたからだ。

「二人とも、大儀であつたな」

あたしはわざと、お姫様みたいに偉そうな口調で言つた。坊やは肩を大きく上下させながら、なんとか笑顔を見せる。一方雷火はぎろりとあたしを睨んだけれど、ぜえはあ息をするのに忙しくて、悪態をつく余裕もないようだ。あたしは苦笑して言い直した。

「本当にこ苦労だったね。おかげで助かつたよ。わんころたちが戻つてくるまで、ゆっくり休んでるといいさ」

どう致しまして、というつもりか、雷火は黙つておざなりに手を振つた。

しばらくかかつて息を整えると、ふいに雷火が言い出した。

「なあ、ちよいと考えたんだがよ」

何か、とあたしと坊やが振り向く。雷火は順にあたしたちの顔を

見て、にやつとした。

「行き掛けの駄賃にあの吊り橋を落としてやる、つてのはどうだい。

ためこんだ金がありや、すぐに直せるはずだよな？」

「おや、あんたにしちゃ、良い事を思いつくじやないか

思わずあたしは笑顔になつた。そいつさね、わざわざ名主の所まで行つて吊るし上げてやるつとまでは思わないけど、何かちょっとは煮え湯を飲ませてやらなきゃ気が済まない。橋を落としてやれば、名主も慌てるだらうさ。

通行人から巻き上げた金で贅沢してるとしたら、手元にや何も残つちやしないだらうし、だからって橋を架け直さなきや、皆、あの金はどうした、って迫られる。橋を架けるだけの金があつて、ばれないようすぐに直したとしても、名主の懐に痛手を引えてやれるなんなら、まあいいさね。

「でもそれじゃ、あの橋を使って行き来する人たちに迷惑がかかるよ」

坊やがあんまり乗り気じゃない様子で言つた。いい子なんだけど、ちょっとばかし融通がきかないね。付き合いの長い雷火はその辺も心得たもので、すぐさま反論した。

「だつたら、何にも知らないまま名主の好き放題にむしり取られっぱなしの方が、迷惑じやねえつてのか？ 橋がなきや、瀬を渡りやいい。なに、不自由なのもちょっとの間さ」

「……そうか。言われてみれば確かにそうだね。じゃあ、橋を落とすのはおじさんにやつてもらおつかな」

「アレで、か？」

「うん、アレで」

なんだい、二人してアレソレつて。あたしは一人わけがわからず、に、眉を寄せた。

「生意気な賞金稼ぎじや」サトリーが小声でぼやく。「真名の法術が使えるらしいぞ」

はあん、なるほどじね。てことはわしづめ、アレですか。

納得したあたしの前で、雷火が よつ、と声をかけて立ち上がつた。

「んじゃま、ちょっとくら行つてくじあ」

「一人で大丈夫かい?」

あたしは思わず心配になつて訊いた。雷火は一瞬だけ驚いた顔をして、それから皮肉っぽくにやりとする。

「片足くじいた姐さんがついて来るよりや、一人の方が安心つてもんだ。真理、そいつと荷物の番、しつかり頼むぜ。すぐ戻るから待つてろよ」

言つだけ言つて、雷火はせつと走りだした。あたしはお荷物だつてことかい。ふん。

「坊や、よくあんな口の悪い奴に我慢してゐねえ。あんたまで、あいつの真似をしちゃあいけないよ」

あたしが文句を言つと、坊やはくすくす笑つて「はい」と素直に答えた。

待つてゐる間、あたしはそつと足を曲げたり伸ばしたりしてみたけれど、やつぱりすぐには治りそうにない。悔しいけれど、この足じやあ確かにお荷物だね。雷火が面倒を引き起こさずにいてくれりや、いいんだけど……

……遅いねえ。ここから橋まで、そんなに遠いとは思えないんだけど。

ふと道の上を振り向いたあたしに、坊やもぽつりと「遅いですね」とつぶやいた。

耳を澄ませても、鳥の声のほかは何の物音も聞こえない。橋が落ちる音も、人の声も。胸騒ぎがするよ。

と、下の方でかすかにバシャバシャと水音が聞こえた。おや、もしかして。

あたしと坊やが揃つて小道を見下ろしたと同時に、黒と白の一人が駆け登ってきた。

「良かつた、戻ってきたね」

坊やがホッとした様子で言い、待ちかねたように立ち上がる。

「ちよいとお待ちよ、坊や、まさか」

「ごめんな、綾女さん。でもおじさんがこんなに手間取るとは思えないし、心配なんだ。雪白、黒鉄、おまえたちはここで綾女さんを守つて、待つてるんだぞ。いいな」

命令されて、雪白が不服そうに顔をしかめ、ついて行きたそうに数歩進み出る。けれど坊やは断固として首を振つた。

「駄目だ。いくら綾女さんが強い巫師でも、あのならず者たちに見付かつたら無事ではすまないよ。第一、おまえたちまでついて来たら、目立つてしまつてかえつて良くないかも知れないだろ。分かつたらここにいるんだ」

雪白がため息をついた。丸つきり人間みたいだねえ。渋々、出した足をひっこめて、あたしのすぐそばに立つ。黒鉄の方は最初から聞き分けよく、あたしの荷物を雷火たちの一緒に置いて、そのままに立つていた。

「気をつけて行くんだよ」

あたしの言葉を聞くか聞かないか、坊やはもう走りだしていた。その姿が木立の向こうに消えてから、あたしは守り刀を取り出した。左親指の、乾いた傷のすぐ下に刃を押し当てて血をにじませる。

「闇鷺」

呼ぶとすぐに、近くの木陰の闇が凝つた。

「目を借しておくれ。行つて、あの二人を助けるんだよ」

言いながら、あたしは目を閉じてまぶたに薄く血をつける。闇鷺が飛び立つと、その目が見ているものが、まぶたの内側に映つた。

四 後ろ足で砂を（2）

田のくらみそな高みから、峠を見下す。木立の間にくねくねと走る道を追うと、じきに、坊やの小さな背中が見えた。首を伸ばすと、先にある橋の様子も分かった。

ひとりわ丈高い杉の木を見付け、その梢に舞い降りる。吊り橋のこちら側には番小屋があつて、その前で雷火が何人かの男に押さえ付けられた上、殴られていた。あの馬鹿、あつさり見付かっちゃうなんて、何やってるんだい！

ああ、くそ、あのならず者どもだ。あたしたちのことを、番人に知らせに行つてたんだろう。雷火も運の悪いことだよ。あ、痛つ！ また殴られた。うう、見ていられないよ。

闇鷺が翼を広げ、甲高い声で大きく一声鳴ぐ。ならず者どもがぎくりとして、こちらを振り仰いだ。よつし、よく見ておいで。枝を蹴り、滑るように舞い降りる。引っ搔き、つつき、髪と一緒に頭の皮をむしり取る。そら、こつちだよ！

おつと危ない。男の手をかわして、空高く飛び去る。用心、用心。ちらつと坊やの様子を見ると、騒ぎに紛れて上手く忍び寄つた。なかなかやるじやないの。

と、闇鷺の意識があたしを押しのけるようにして、強引に頭を別の方へ向けた。直後、首をかすめて矢が飛び去る。しまった、こいつらは弓矢も持つてたんだつた！

慌てて飛び立ち、また襲いかかる。矢に狙われないよう、せわしなく動きを変えて。

今度は翼をかすめて矢が飛んで行く。闇鷺がこの場を離れたがっているのが分かった。もつちよつと、もつちよつと頑張つておくれ。もつちよつと……

「！」

衝撃と、焼けるような痛みが肩に牙を立てた。視界がぐるつと回

る。駄目だよ、このまま落ちちゃあいけない！

無理に言つことをきかせ、危ういところで羽ばたいて再び舞い上がる。けれど、もう高くは飛べなかつた。ならず者どもの田から隠れられそうな茂みを目がけて、落ちて行く。

ばたばたと人間の足音がそこいらに迫る。仕方ない、闇鷺に出来るのはここまでか。

あたしが闇鷺を帰らせようと口を開きかけた、その時だつた。闇鷺を通して、ものすごい悪寒が伝わってきた。闇鷺の羽という羽が全部逆立ち、体がぶわっと膨れるのを感じる。あたし自身も、鳥肌が立つていた。

なんだいこれは！

ならず者どもも、それに気付いたようだつた。足音が止まり、ためらつて、それからそろそろと遠ざかっていく。

闇鷺が首を伸ばし、様子を窺つた。

木々の間を通して、かろうじて吊り橋と番小屋が見える。番小屋の前では雷火がならず者の一人に、地面に押さえ付けられている。その顔が恐怖にひきつっていた。あいつもこの悪寒を感じたんだね。その正体は……吊り橋の向こうにわだかまる、黒い影。

「お逃げ！」

あたしは叫んでいた。それは闇鷺の口を通すと、金物を引っ搔くような凄まじい警告の声に変わつた。近くの鳥たちが皆、いつせいに飛び立つて逃げ去る。警告の通じないならず者どもは、むしろ逆に、刀を構えて番小屋の方に集まつていた。馬鹿な奴ら！

ああ、坊やはどうしたろう。早く雷火を助けないと、あのまま倒れていたんじや、影に呑まれてしまつ。

吊り橋の上を、暗い影がじわりじわりと進んでくる。闇鷺の恐れがあたしにも伝わってきた。ならず者の一人が、雄叫びを上げて無謀にも斬りかかっていく。けれどもちろん、何にもなりはしなかつた。男が闇の中に呑み込まれ、見えなくなる。そのまま、出てこない。やがて、暗がりが通り過ぎた後ろでぐらりと人影が傾ぎ、谷底

へ落ちて行つた。

いけない。あれは良くないものだ。

妖じやない。もつと暗くて力の強い……恐ろしいもの。

歯の根が合わず力チ力チ鳴り始める。

ならず者どもも、自分たちが何を目にしているのか、ようやつと悟つたらしい。じりじりと後ずさり、次いで我先に逃げ出した。けれど、影は素早かつた。まるで鞭のような細い影がしなり、飛びかかつて、男たちを引きずり倒す。狂つたような悲鳴が次々に上がつては、ふつりと途切れた。

ああ、雷火はどこだらう？ 坊やは、あの一人は無事なんだらうか？

「ここからじや見えない。助けに行かないと。闇鷺がよろよろと立ち上がる。と、その目に、雷火の背中が飛び込んできた。

良かつた、無事だ！

雷火は吊り橋に向かつて立ち、両手を前に突き出していた。

「我が名は雷火」

男たちの暴れる音や悲鳴が飛び交う中で、不思議とその声はよく通つた。

「雷は天地を貫くいかずちなり」

空気が奇妙に焦げ臭くなり、辺りでパチパチと小さな火花が散り始める。

「この名において命ずる、雷撃招来！ 落ちろこん畜生！」

やけつぱちな命令の直後、轟音と共に真っ白な光が輝いた。

闇鷺の目が眩む。ややあつて視力が戻つた時には、目の前の光景はすっかり様変わりしていた。

あの影は跡形もなく消え、吊り橋は完全に焼け落ち、番小屋も黒焦げになつていて。ならず者どもは、逃げた奴がいるのでなければ、全員のびちまつっていた。単に落雷のせいで目を回したのか、それとも影に魂を食われちまつたのか、それはわからないけれど。

雷火がよろけて座り込んだところへ、坊やが飛び出して行くのが

見えた。

やれやれ、これで安心だ。あたしはふうっと息をつくと、闇鷺を帰らせてやつた。

しばらくして、あたしの所に一人が戻ってきた。雷火は坊やに肩を支えられて、よたよたしている。

「おやまあ、ぼろぼろだねえ」

あたしは思わず苦笑した。直に自分の目で見ると、ひどい様だつてことがよく分かる。顔は殴られて腫れ上がっているし、よくあれで法術を使ったもんだよ。うるせえ、と雷火は言い返したみたいだけど、その言葉はぐぐもつて、よくわからなかつた。

「二人とも、無事で良かったよ」

安心すると、不覚にも目頭が熱くなつた。ああもう、嫌だよ、みつともない。

あたしは慌てて顔を背けたけれど、その寸前、雷火と坊やの驚いた顔がちらつと見えた。余計なことを言われない内に、あたしは急いで続けた。

「こんな所にあたし一人でおひまわり出されちゃ、行くも帰るも出来やしないからね。もつとも、そのざまじやあ、荷物持ちも出来そうにないけどさ」

返事はない。かわりに、押し殺した笑いがこぼれる。嫌な奴ら！ そっぽを向いて膨れているあたしには構わず、二人は荷物のところへ行ってごそごそやりだした。傷の手当をするんだろう。 しそうがないねえ。あたしはむつりしたまま、自分の荷物を引き寄せた。

「お待ち。巫師の薬はそんじょそじらの物より、よく効くんだよ。あたしの足も湿布をしなきゃいけないし、ついでだから、あんたの手当もしてあげるよ。こんなすごいご面相のが連れだなんて、どうにも気が悪いからね」

「ほーう。ほりや、るうも」

雷火が厭味っぽく返事をしたけれど、どうしたって滑稽にしか聞こえない。あたしは思わず盛大にふきだしてしまった。しゃべると傷に響くらしく、雷火はしかめつ面で頬っぺたを押さえている。痛いんなら黙つてりやいいだろうに、馬鹿だねえ。

あたしが雷火の傷に薬を塗つて包帯を巻く間に、坊やは雪白と黒鉄を犬の姿に戻し、さんざん舐めまくられていた。あたしは手を動かしながら、何げない口調で言つた。

「闇鷺の田で見たんだけど、坊やにとり憑いてる影つてのは、あれだね。そう言やあんたたちと出合つた晩にも、里の外に気配がしてたよ。あの時はそんなに恐ろしいもんだつて感じはしなかつたけどね」

「おまへ、なんれ知つて」

雷火が言いかけ、痛みに顔をしかめる。仕方なく雷火は無言で、責めるように坊やを睨んだ。振り向いた坊やの顔は、暗くうち沈んでいた。

「うん。俺が話したんだ。……綾女さんには、あれが何なのか分からせんでしたか」

「はつきりとは分からぬ。でも、あれは『災い』じゃないよ。妖でもない。そんな感じとは違つたね。強いて言うなら、怨靈が近いかも知れないけど」

「誰かの祟りだつてのか？」

ふがふが、と雷火がどうにか言つた。あたしはちょっととこめかみを押さえて、あの時の感覚をじっくりと思い出してみた。闇鷺の目を通しているから、本当のところどうなのか、確信は持てないねえ。でも……

「あたしには、そんな風に見えたね。あれは……人が生み出したものだよ。海や山に元からいるもんじゃない」

あたしが言うと、坊やがさつと青ざめた。そのまま、誰も口をきかない。沈黙に耐えられないのか、サトリがこそこを前に回つて來た。

(黙つといで)

あたしはぴしゃりと先手を打ち、坊やの様子をじっと見つめる。
きゅつと唇を噛んで、地面を睨みつけているその横顔を。

「分かつてんだろ？」「ねえ、真理」

名前で呼びかけると、坊やはびくとして顔を上げた。そして、
ゆつくりうなづく。

「うん。あれは……俺自身の影なんだね」

「なんだって？」

雷火が素つ頓狂な声を上げた。あたしは片手を振つてそれを黙ら
せる。

「それだけでもないようだけどね。ただ、坊やの影の部分と深く結
び付いてるのは確かだよ。あんたはあの時、あのろくでなしどもを
全員、指先から一寸刻みにじりこりすり潰してやりたいと思つたん
だろ？？」

「そこまでは考えてないよ」さすがに坊やは鼻白む。「死んでしま
えとは思つたけど」

言つてから、自分の言葉に怯んだように息を飲んだ。坊やは少し
ためらい、記憶を辿るように視線を宙に向けて続けた。

「……そうしたら、何か……おなかの辺りで何かが動いたような感
じがして、あの影が吊り橋の向こうに現れたんだ。俺が呼んだみた
いに」

「おい、それじゃあ豊平での時もそうだったのか？」

雷火が口を挟んだ。どうやら、影が人を襲つたのは今回が初めて
じゃあないらしいね。

「あの時は、今回ほどはつきりとは感じなかつたけど。でも、もの
すごく腹を立てたのは同じだよ。俺に力があつたら、こんな奴らみ
んなやつつけてやるのに、つて。俺がちゃんとした神官戦士だった
ら、俺が……子供じゃなかつたら」

つぶやくように言つてから、坊やは顔を上げて雷火を見た。

「あの時おじさんは『天罰だ』って言つたよね。本当にそうだった

らしいのに、つて思つたよ。俺の願いを神々が聞き届けて下さつたんだつたら、つてね。でも、あの影は決していいものじゃない、つて、俺には分かつた。なんだか分からぬいけど、あれは良くないもので……俺の願いが、あいつに力を与えてしまつたんだ。きっとそうだよ」

そこまで言つて、坊やは黙り込む。あたしも、何をどう言つたらいいか分からなくて、こゝそりため息をつくしかなかつた。

暗い願いが、影に力を与えた。たぶん、そういう事なんだろう。あの影が坊やの心だけで作られているとは思えないから、何か本性があるんだろうけど、今、あの影を引き寄せているのは坊や自身だ。どうやつたら追い払えるのか、清められるものなのかどうかも分からないんじやあねえ……。

その時、雷火がふーっとため息をついた。

「んじやまあ、もつと氣合を入れて『しるし』を探さなきゃならねえな」

「……は？ なんでそななるんだい」

あたしが変な顔をすると、雷火はとぼけた表情で頭を搔いた。「真理があの影に力を与えたつてんなら、影から力を奪うにしろ、追つ払うにしろ、結局こいつが自分でやらなきゃなんねえつてこつたろ。てことは、こいつが一人前になるのが一番の早道つてことじやねえのかい」

「あ……」

坊やとあたしの口から、同時に声がもれた。ああ、なるほどね、そういう事かい。

「つつともなあ、そこらを引っ搔き回して落ちてる錢を拾つのとはわけが違うからよ、いくら気張つたつて見付からねえもんは見付からねえんだよなあ。『しるし』探しと並行して、神官戦士の修行なんかも、いつぺんきちつとやり直した方がいいんじやねえか」

「そうだね」

坊やが少し、肩の力が抜けた様子でうなずいた。

「雷火、あんたそう簡単に言うけどね、『しるし』は坊や本人が見なきやわからないんだろ？ 坊やが神殿に籠もつて修行してる間、あたしらが代わりに探すつてわけにもいかないんだから、両方いつべんつてのは無理な話じゃないのかい」

あたしだつてこんな事、水を差すよつて言いたかないけど、でも無茶だよ。

そう思つたのだけど、坊やの方は随分と気が楽になつたみたいだつた。

「でも、とにかく目標は出来たよ。峠を越えたら、少し大きい神殿を探して行つてみる。そこでもう一度、初めからやり直してみるよ」「そうかい。それじゃ、あたしは闇鷺を飛ばして、あんたの影にかかわりそうな事を調べといてあげようかね。どうせ次の里でも占いをやるぐらいしかないから、暇だしさ」

「なんだよ、おまえがそこまでする義理はねえだろ？」「

雷火が嫌そうな顔をした。ああもう、いちいちこの男は！

「あんたがつべこべ言つことじやないだろ、あたしの勝手さね。あんたこそ、坊やと別れたら一人で仕事が出来ないんじやないのかい。おまんまの心配でもしてるんだね」

「なんだとお！？ おまえ、俺の法術を見てたくせに、よくも言えたな」

「あれじや何もかも黒焦げにしちまうだけじやないか。大雑把なんなんぞ！」
「あんなぞ！」
「あんなぞ！」

「はいはい、魚か大根でも切つてるんだろ」「

「大事な月華をそんな事に使えるか！ 今に見てろ、目の前で大物を仕留めてやるからな、そん時になつて吠え面かくなよ！」

と、言葉が切れたところで、坊やが「あのう」と口を挟んだ。揃つて振り向いたあたしたちに、坊やは曖昧な顔をして言った。

「さつきから、サトリがけたけた笑い続けているんだけど」

「え？」

坊やが指さした方を見て、あたしは眉を寄せた。いつも肩の辺りに居座っているサトリが、手の届かない場所まで離れて、転がり回つて笑いこけているじゃないか。

ちょっと、何をするつもりだい？

あたしの考えが読めたんだろう。サトリはぐるんと体を回して起き上がり、にたつといやらしく笑つた。耳まで裂けそうに広がったその口が放つたのは、まさかの一言。

「夫婦喧嘩は犬も食わない、とさ」

「……っ！」

顔が真っ赤になるのが分かつた。

「サトリっ！」

あたしが叫び、雷火が飛び出した時には、もうサトリは茂みの中に逃げ込んでいる。雷火はサトリがいた場所を、腹立ち紛れにがすがす踏ん付けていた。

ああもう、ああもう！　だからサトリなんて！

お互い顔も合わせられずにいるあたしと雷火の後ろで、坊やが一匹の犬に向かつて話しかけるのが聞こえた。

「……今、おまえたちの考え方い？」

お返事代わりに、黒鉄が楽しげに一声吠え、雪白はフーッとため息をついた。

（綾女之章・終）

しばらく前から、その噴は僕のいる神殿まで届いていました。不吉な黒い影を連れて歩く少年がいる。みすぼらしい神官服を着ているけれども、やる事は賞金稼ぎと同じ。しかも、時にはその恐ろしい影を操り、人を殺めるのだ、と。

里の人や神殿の先輩からその話を聞く度に、僕はぞつとして震え上がつていましたが、まさかその噴の主と出会つことがあるうなどとは、思つてもみませんでした。

その日までは。

僕は裏参道の雪をかいていましたが、若い女の声を耳にして、ふと手を止めました。

「いいかい、ここも駄目だつたら、諦めるんだよ。約束だからね」

それに続いて、柄の悪い男の声。

「おまえもしつこいな。こいつが目指してんのは、お偉い神官様なんだぞ。巫師なんぞに預けられるかよ」

巫師だつて？ まさか、巫師が境内に入つとしているんだろうか。

僕はぎょつとなつて雪かきをその場に放り出すと、急いで階段を下りて行きました。参道が曲がるところまで来ると、僕は足を止めて木の陰に隠れました。

そこから、鳥居の下にいる怪しげな人影が見えました。大人の男女と、僕と同じぐらいの年頃の少年。それに、白と黒の……あれは、犬？ それとも妖？

「あのねえ、そうは言つても仕方ないじゃないか。その神殿の方が

坊やを追い出すつてんなら、神殿の世話なんか必要ないさね。あんたは巫師が嫌いだろうけどね、少なくとも坊やを見捨てるほど薄情じゃないよ」

「俺は神官も巫師も大嫌いだ！ そうじゃなくて、俺は、こいつが巫師で食つてけるとは思えねえから、駄目だつつてんだよ」

「二人ともそのぐらいにして、とりあえず行つてみようよ」

苦笑まじりに言つたのは、少年の声でした。大人ふたりは鼻白んだ様子で顔を見合させ、それから男の人が「そうだな」とつぶやいて、荷物を背負い直しました。女人人は、肩から何かを払いのけるような仕草をして、やれやれと鳥居を見上げました。

どうしよう、やつぱり入つて来る気だ。あの中の誰かが巫師なら、追い返した方がいいのかな。巫師は邪悪なものだつて言うし……でも、本当に悪いものなら、招かれないと入つて来られないはずだけど。

「ここは広いだけじゃなくて、随分と神氣が強いし、ちょっとは期待してんんだけどね」

女人人が言いました。期待つて、何を？ なんだか嫌な感じです。そうだ、とにかく明主様にお知らせしよう！

僕は急いで木陰を離れ、今しがた下りてきたばかりの参道を駆け上りました。けれども、ところどころ雪で凍つている階段を、慌てて登るものではありません。

「あつ！」

しまつた、と思つた時には遅く、僕の体は宙を飛んでいました。足を滑らせて、後ろ向きに落ちてしまつたのです。

もうだめだ！ 僕は思わずぎゅっと目を瞑りました。けれども、石段にガツンと頭をぶつけるかわりに、背中がドサツと何かに当たつて止まりました。

「おい、大丈夫か？」

下の方から声がして、僕は恐る恐るまぶたを上げました。そして今度は、いっぱいに目を見開いてしまいました。犬だ！ 一匹の犬

が、僕を支えてふんばってる！

「大丈夫なら、いつまでも乗つかつてないで自分で起きろよ。わんこりどもが潰れっちまうだろうが」

言葉と同時に、大きな手が僕の腕を引っ張り上げました。正直、こんなに汚なくて乱暴そうな人に触られたくなかったのですが、助けてもらつたのに、そんな事は言えません。慌てて自分で立ち上がると、僕はドキドキしながら、彼らを見回しました。

「坊や、怪我はないかい」

女人が言いました。近くで見ると、顔立ちはとても優しそうな人でした。巫師とかなんとか言つていたのは、僕の勘違いだったのかも知れません。

「は、はいっ。ありがとうございます」

僕が慌ててお礼を言つと、女人は笑つて首を振りました。

「礼なら、雪白と黒鉄に言いなよ。あたしらじや、間に合わなかつたろうからね」

「あつ、はい……あの、ありがとうございました」

馬鹿みたいな気はしたけど、僕は言われた通り、二匹の犬に頭を下げました。二匹とも大きくて強そうで、でもやつぱりちょっと、僕を受け止めたのが痛かったのか、背中を気にしていました。僕は三人の顔をゆっくりと順に見ながら、急いで考えを巡らせました。

招かれなくても鳥居をくぐれたつてことは、この人たちは、鬼や妖ではありません。でもやっぱり、境内のどこでもじ自由にじうじうと言つるのは、危ない気がします。

そこで僕は、精一杯、落ち着いた態度を装つて言いました。

「僕は翼タスク、この神殿の書士見習いです。本当にありがとうございます。ここには医師もいますから、念のためにこの二匹を連れて行かれてはどうでしょう。その間に僕がご用の向きを伺つて、明主様にお知らせします」

ふう、なんとかちゃんと言えた。三人は何事か相談するように顔

を見合はせましたが、その表情はどうやら、ちゃんと分かっているようでした。

「それじゃあ、ようじへお願ひします」

少年がききちんとした姿勢で、深く一礼しました。

「俺の名前は真理です。深谷の神殿で侍士の位を授かりました。『しるし』を探す旅に出されましたが、わけあって、この神殿で一から修行をやり直したく、お願いに上がりました。そのよろこびをお伝え下さい」

侍士！？ まさか、こんなみすぼらしいのが神官戦士の見習いだなんて！

この神殿にも侍士や戦士はいますが、ここまでなりが汚くて、荒んだ気配をまとつた人はいません。いくら、僕ら書部の人間より荒っぽいと言つても、彼らだつて神官なんですから。それに、付き合う人だつて……。

「そうは思つたけれど、僕はなるべく平気な顔で言いました。
「つづつどい。」「うれしき」

「俺は雷火。流れ者だよ。こいつとはちょっとした縁で道連れになつてね。ついでだから、刀を清めて貰いてえ」

そう言つて彼が腰の辺りを叩いたので、僕は初めて、相手が刀を
帯びていることに気付きました。このまま通しても大丈夫かな？

不安が顔に出てしまつたらしく、雷火さんは皮肉っぽく笑いまし

「心配なら、ここに一つを預けてもいいぜ。まあ、さんざん妖を斬つて穢れが溜まつてゐるから、おまえさんは触りたかねえか知らんがね」

からかわれて、僕は顔が力ッと火照るのを感じました。

悔しい！ どうして、こういう人たちはすぐ、僕らみたいな文筆の徒を馬鹿にするんでしょう。こっちを見下した、「どうだ、おまえには出来ないだろ」って態度が厭味だつたらありやしない。けれど実際、僕はその刀を持つ気にはなれませんでしたから、ム

ツとした顔でせいぜい冷たく言い返してやりました。

「いいえ、そのままお持ちになつて結構です。大切な商売道具でしょう」

反撃成功。厭味な賞金稼ぎは、渋い顔になつて黙りました。横で女人人が苦笑し、優しい口調で言いました。

「余計な一言を付け足すからだよ、自業自得さね。ああ、あたしは綾女。占い師でね、成り行きで『しるし』探しに付き合つてゐるお節介さ」

ああ、きつと放つておけなくて世話をしているんだろうなあ。いい人みたいだし……お氣の毒に。僕はペコリと頭だけ下げる。

「それでは、こちらへ」

三人を医寮へと案内して行きました。道すがら、僕の頭にあつたのは、前から何度も聞かされている、あの恐ろしい噂のことばかりでした。みすぼらしい神官服を着た少年。賞金稼ぎ。これで、振り返つたら黒い影がついて来ていた……なんてことになつたら大変だから、僕はずつと、後ろを見る事が出来ませんでした。

三人と一緒に医師に預けると、僕は肩の荷が下りたように感じて、ほっと息をつきました。それから、大急ぎで拝殿へ走り、ちょうど夕のお勤めが終わつて出て来られた明部の人たちをつかまえました。明主様に火急のお話が、と言つと、僕の様子からただ事でないと判断されたのか、すぐに奥の院に通されました。ここは明主様をはじめ高位の方々の住まいで、僕のような見習いは、普段は立ち入ることが出来ません。

明主様はお部屋でくつろいでいらっしゃいましたが、僕がことの次第をお知らせすると、いつものゆつたりとした口調で、けれども厳しくしなめられました。

「翼、その方々はおまえを助けて下さつたのだろう? 身なりが汚いなどという理由で、そのように悪しきまに言つものではないよ。私からもお礼を申し上げたいし、何やら事情もおありのようだから、犬の手当が済んだら茶寮にお通しなさい」

「わかりました」

あまり気が進まなかつたけど、ここへお通しなさい、と言われなかつただけ、ましかも知れません。あんな汚いなりでこの部屋に上がられたら、後が大変です。

僕が渋々医療に戻ると、三人は犬を囲んで待っていました。僕の顔を見て、あまりいい返事ではないと思つたらしく、彼らはさつと表情を曇らせました。

確かに、いい返事じゃありません。でもそれは、僕にとって、の話。

「明主様がお会いになるそうです」

「本当かよ？」

「まさか、あたしたちもかい？」

信じられない様子の雷火さんと綾女さんに向かって、僕は「はい」とうなずきました。真理は何か覚悟を決めたよつて、きゅつと唇を引き結んで黙っています。

確かに、何か事情がありそうですが、ともかく明主様にお任せすれば、間違いはないでしょう。僕はただ身振りで「こちからです」と示して、歩きだしました。

茶寮はお客様をもてなす為の小さな庵で、僕たち神官の食堂と渡り廊下でつながっています。二匹の犬は誰にも命じられない内に、食堂の玄関脇に並んで行儀よく座りました。

僕が驚いていると、二匹の頭をなでていた真理が振り返つて言いました。

「ここで待たせておいて、構いませんか」

「えつ？ あ、はい。もちろん」

僕はしどろもどろに答え、なんだか薄気味悪く思いながら二匹を見つめました。まるで、ここが神殿で、自分たちの居場所は決められていてると分かっているみたいです。どうにもただの犬ではないようと思われてきました。

ともあれ、明主様をお待たせするわけにはいきません。僕は三人を中へと案内しました。そろそろ夕餉の時刻でしたから、大勢の人とすれ違うことになりました。もちろん誰も、何だそいつらは、と言つたりはしません。けれども、不審げな、あるいは物珍しげなまなざしの痛いことと言つたら、走つて逃げ出したくなるほどでした。幸い、明部の人が茶寮の前で待つていて、怪しいお客を引き受けてくれました。

「ご苦労様でした。翼、おまえはもういいから、皆と夕餉にしておいで。また御用があればお呼びになるだろ?」

「わかりました。それでは、失礼します」

お役御免になり、僕は心底ホッとして頭を下げるが、一田散に食堂へと退散しました。

配膳所で自分の食事を受け取つて、いつもの席に座ると、隣にいた白露ハクロ 先輩がぼそつと言いました。

「雪かき」

「あつ!」

そうだった! 僕は慌てて、お椀を取り落としそうになりました。裏参道に雪かきをほうり出したまだ!

僕が腰を浮かせると、先輩は苦笑して座るように手で示しました。「片付けておいたよ。いつまで雪かきしてゐつもりだろ?」と思つて見に行つたら、いないんだからなあ。心配したぞ」

「ごめんなさい。階段から落ちて、客の犬を下敷きにしてしまつて……それで、医療に行つたり客人を案内したりしてたんです」

「ああ、見たよ。ちょっと不気味だねえ」

白露先輩はずけずけと言つて、味噌汁をすすりました。

先輩はもう一人前の書士ですが、生まれは『貧乏役人の次男坊』なのだそうです。書士になつたのも、『外聞が良くてそれなりに食べて行ける仕事だから』で……つまり、神官になりたかつたわけではないのだ、と、自分で明言しています。

僕らにとつて神殿の仕事は、それがどんなに些細な事でも、大切

なおつとめです。でも先輩は、神殿の仕事も役人の仕事も同じだ、などと放言して憚りません。そんなだから、先輩の事を好ましく思わない人も大勢いるのですが、先輩自身はやっぱりそんな事も、まるきり気にかけていないようでした。

僕は時々、そんな先輩が嫌になるのですが、でも、こんな風にはつきりものを言ってくれる所は、なんだかとても頼もしく思えます。だから僕は、思い切ってあの噂のことを言ってみました。

「先輩が言つてた、恐ろしい影を連れた少年……あれみたいに思えますね」

「なんだ、おまえさん、あれを本気にしてたのかい？」

「えつ？ う、嘘だつたんですか？ でも、あの話は里の人もしてましたよ」

僕がうろたえると、先輩はすまし顔で答えました。

「噂なんて、八割は嘘に決まってるだろう。人から人へ伝わるうちに、どんどん尾ヒレがついていく。いい加減で無責任なものさ。もし今日のお客人が噂の正体だとしたら、合つてるのは『神官服を来た子供がさらりといる』って所だけだよ」

「そう……かなあ？ 僕にはなんだかすごく怖く思えたんだけど……」

でも、そう言つたらきつと先輩は、噂が頭にあつたから怖く思えただけだ、と言うでしょ。だって先輩は、直接あの人たちと言葉を交わしたわけじゃないから。

僕が黙り込んでいると、先輩は独り言のようにつぶやきました。

「しかし、何者なんだろうね。前にいた神殿を追い出されでもしたのかな」

「あつ、そう言えば、そんな事を言つてましたよ！ 神殿の方が追い出すなら仕方ない、とか何とかつて。きっと、神域を穢したとか勢い込んで言いかけた矢先、先輩が僕の鼻に指を突き付けたので、僕はごくんと言葉を飲み込んでしまいました。」

「ほり、やつやつて勝手に思い込みで話を作るだろ。だから、噂は信用できない、って言ってるんだよ」

「……すみません」

「ちえつ。僕はなんだか馬鹿にされた気がして、その後はもう、むつつり黙つて食べることに専念しました。

それにしても、本当に、彼らはいったい何者なんだろ？ 綾女士は悪い人じやなさそだつたけれど、でもやつぱり、占い師なんてのはちょっと胡散臭いし……。

あれこれ考えながら食事を終えてお膳を片付け、いつもと同じく、書部寮に戻つてその日の仕事をまとめて。そうしている内に、僕はいつの間にか怪しい客のことを忘れてしまいました。昨日も一昨日もその前も、ずっと同じ場所で同じよつに、帳面をつけたり、書状を書いたり取りまとめたり、お金の勘定をしたりしているので、何も変わつたことなど起きなかつたような気になつていたのです。

おかげで僕は、その夜はいつものように、ぐっすり眠ることができました。明日から、そつはいかなくなるなんて、夢にも見ず

翌日、僕がいつものように白露先輩のところへ行くと、先輩はまるきり仕事にかかる準備をしていませんでした。

「お、タスク翼、タスク来たか。それじゃあ見に行こう。」

「は？ 見に行くつて、何を？」

「いいから、こっちこっち。明部のお堅い連中以外は、みんな見物に行ってるし、おまえさんも行かなきゃ乗り遅れるぞ。ほらほら」「あの、さっぱり話が見えないんですけど」

おたおたする僕にお構いなく、先輩は僕の腕を引っ張つて行きます。僕は仕方なく、小走りになつて先輩の歩調に合わせました。どつちみち、僕は見習いなので、先輩がいなかつたら、たいして仕事は出来ません。

「昨日の客人だよ」

白露先輩はようやつと僕の腕を離して言いました。

「腕試しをするらしい。修行をやり直したいって言つたつて、どの程度のことを修めたのか見ないことには、つてんでね」

「そんなの、僕は別に見たくありません。先輩だつて、昨日やり残した仕事があつたでしょう？ 遊んでる場合じや……」

「つべこべ言わないの。ほらもう着いた」

強引に連れ込まれたのは、法部の人たち、つまり神官戦士たちの稽古場でした。板張りの、広くてがらんとしたお堂です。いつもは大勢の戦士や侍士を、法主様や法師の方々が指導しているのですが、今はつめかけた見物人でいっぱいです。

ざわめく人垣の中央で、真理が竹刀を手にして立っていました。新しい服をあてがわれ、どうやら湯浴みまでさせてもらつたようですが、昨日に比べると随分……なんというか、まつとうらしく見えました。

「緊張すんなよ、真理。適当に手抜きしてやりやいいんだ」

ふてぶてしい言葉で励ましたのは、案の定、雷火さんでした。こちらも小ぎれいになつて、少なくとも見かけだけは、里にいる普通の若衆のようでした。その横から綾女さんも何か言つていましたが、僕のところまでは聞こえません。

二人に励まされた真理はにっこりしてうなずき、しつかりした足取りで進み出ると、法師の一人と向きました。

一人が一礼して竹刀を構えた途端、場内は水を打つたように静まり返りました。

しばらく一人は睨み合つていましたが、やがて法師の竹刀が揺れ、誘いをかけました。その後に続いて起こつたことは、とても僕の目にはとらえきれませんでした。

打ち込み、払い、払われたようにみせかけて攻めに転ずる。

遠かつたせいもありますが、動きが速くて、何がなんだか分かりませんでした。

ただ、法師を相手にこれだけまともに打ち合えるということは、侍士としては信じられないほど腕前なんだ、ということは明らかでした。

結局は法師が勝ちましたが、誰もが驚かされた証拠に、終わつた途端にわつとどよめきが上がりました。僕も興奮して、隣の白露先輩をがくがく揺さぶつてしましました。

「すごいですね！ あんなに強いのが侍士だなんて、嘘ですよ。あれなら立派に一人前の戦士じゃありませんか、ねえ？」

「はいはい、そんなに揺すらないの。袖がちぎれるだらう

「あ、すみません、つい。それにしてもすごいなあ、僕とそんなに変わらない歳に見えるのに。いつたいどこで……」

「どこで何をしてたんだろうねえ」

先輩がとぼけた口調で、僕の言葉を引き取りました。それを考へると、また僕の胸に暗くて冷たいものがじわっと広がりました。

その後、剣術だけでなく、棒術や体術、それに肝心の法術なども

一通り試されました。どれもその腕前は、充分に一人前として通用するように思えました。ただ、僕はもうそれを、単純に「すごい、

「すごい」と喜んで見物することは出来ませんでしたが。

これで終わりだという合図に、法主様がパンパンと手を鳴らされたので、見物人はぞろぞろと退散し始めました。

「先輩、僕らも戻りましょう」

あまり長居したくなかったので、僕は白露先輩を急かしたのですが、先輩は逆に、僕の肩を押して法主様の方へと歩きだしました。

「ちょっと、先輩、どこへ」

「逃げなさんな。俺はね、おまえさんを連れて来るようになされたんだよ。さ、行こう」

「ええっ？」

嫌な予感がして、僕は悲鳴のような声を上げました。帰りがけの見物人が、何人かきよとんとして振り返りましたが、誰も助けてはくれません。白露先輩は人波に逆らって、僕をぐいぐい押して行きました。

法主様は真理と何事か話し合つておられましたが、僕の姿を見ると、「ああ」とこりして手招きされました。

「翼や。明主様のお話では、そなたは昨日、彼に助けられたそうだね」

「はい。正確には彼の犬に、ですけど」

僕が言つと、床に座つていた雷火さんが鼻を鳴らしました。僕がむつとしてそちらを見ると、彼はふいと明後日の方を向いてしました。厭味な人だ！

法主様はまるで気になった様子もなく、話を続けられました。

「まあそれでも、恩があることに変わりはない。この神殿で歳が近いのはそなただけであることだし、真理の相談に乗つて、出来ることは何でも、助けてやりなさい」

嫌です。と、言えたらどんなにか良いでしょう。歳が近いつていうだけで、誰でも友達になれるわけじゃありません。

けれども、僕には法主様の言い付けを拒むことなど出来ませんでした。そんなことをして神殿から追い出されでもしたら、両親に会わせる顔がありません。だから僕は「わかりました」とうなずきました。

僕の返事で安心したように、雷火さんが腰を上げました。

「それじゃあ、後は頼みますぜ、法主様。俺は月華を受け取つたら、ふもとの里に降りますんですね」

良かつた！ このままこの人まで屈座るつもりかと思つたけど、いくら賞金稼ぎでもそこまで図々しくはなかつたみたいだ。

僕がほつとしたのと対照的に、真理は心細げな顔をしました。雷火さんが苦笑して、その頬を軽くぴたんと叩きました。

「そんな顔すんなつて、どこにも行きやしねえよ。出来るだけこまめに様子を見に来るから、誰かにいじめられたら言つんだぞ。俺がぶちのめしてやつからな」

「おじさんこそ、里で悶着を起つてないようこね。俺がここに居辛くなるからさ」

真理が憎まれ口を返したので、雷火さんは「*い*の餓鬼」と真理の頭をくしゃくしゃにかき回しました。やめてよ、と言いながらも真理は嬉しそうに笑っています。そうしていると、なんだか普通の子供みたいで、ちつとも怖いところなんかないように見えました。

「心配しなくても、あたしがちゃんと見張つとくよ」

綾女さんも笑つて言つと、真理の肩にぽんと手を置きました。

「深谷から返事が来たら、すぐに知らせに来るからね。闇鷺アンシがいいなからつて、お勤めを急けるんじやないよ」

「*い*には別のがいるかも」

真理は小声で、おどけて答えました。

何の話だろ？ 何がいるって？

僕が不安になつてそこらに田を走らせると、気が付いたらしく、綾女さんがごまかすように咳払いしました。

「それじゃ、あたしらはここで。また来るけど、あんたはあんたで、

頑張るんだよ

「はい」

真理はうなずくと、姿勢を正して深々と頭を下げました。そのまま清々しくて、ここに来るまでにどこで何をしていたにせよ、神殿で修めたことがしつかり身についているのが分かります。……

それなのに、どうして僕は彼が怖いんだろう？

ともかく、一人が帰つてしまつと、真理はくるりと僕に向き直りました。

「早速だけど、頼みがあるんだ」

「なんですか？」

僕は嫌々ながら答え、それからちらりと後ろの白露先輩を見やりました。

「僕にも仕事があるので、何か用があるなら、先輩の了承を得てくださいね」

先輩も先輩だ。いつだって、僕が手伝わないと一日分の仕事が終わらないのに、その僕をいつもあつさつ生け贋に差し出すなんて、ひどいや。

「ああ、俺の都合なんて気にしなくていいよ。翼、名前の通りに助けてやんさい。そうそう、真理君とやら。良かつたら俺も何か手伝うから、遠慮せずに言つよ」

ああもう、先輩ときたら、またそんな安請け合ひをして……。調子がいいんだから。

僕がため息をつくと、真理はまるで同情するみたいに苦笑しました。僕の気持ちが分かるとでも言つんだろうか？【冗談じゃない。】ますます不機嫌になつた僕を見て、真理は笑みを消してしまいました。

「……この神殿には、各地の神殿の建立に関する記録も残されていりつて聞いたんだけど、それを見せてほしいんだ。書部にあるんだろ？」「

平坦な口調で言われて、僕はまたちょっと背筋が寒くなりました。

けれども、怖がっていると思われたくなかったので、しつちもせいぜい偉そうに言い返してやりました。

「もちろん、あります。この大楠の神殿は由緒正しい、歴史ある神殿ですから」

「そうらしいね」

真理はまるで感動した風もなく、ほとんど切つて捨てるように言いました。僕が由緒の説明をするのを、先回りして止めたのかもしれません。神官のくせに。

「まあ、つまらない話は止して、書部寮に行こうか」
のんびり言つたのは、もちろん白露先輩です。神殿の由緒を『つまらない』なんて言つ人は、ほかにいません。僕は面白くありませんでしたが、先輩には何を言つても無駄だとわかつていましたから、黙つて、とびきり大きなため息をついてやりました。

この神殿は丘の上にあつて、見事なクスノキを祀つています。その昔、天子様が兵を率いてこの地に入られた時、このクスノキの精が現れて知恵を授けたので、天子様はこの地にいた妖や鬼どもをたやすく退治することが出来たのだそうです。

鬼に虐げられていた人々は、喜んで天子様をお迎えし、自分たちを救つてくれたクスノキを神として祀ることにしました。それ以来、ふもとの里は楠本という名になったとか。

僕も楠本の外れの生まれなので、この話は昔からよく聞かされています。

寮に着くと、先輩は真理を僕に押し付けて、自分は仕事があるからと、書斎にすたこら逃げ込んでしまいました。……時々僕は、本当に先輩が嫌いになります。

「記録はこちらです」

僕はまたため息をつきたくなるのを堪えて、古い記録ばかり集めた書庫へと向かいました。棚にびつしり並んだ帳面や書簡を見ると、さすがに真理も感心したようでした。

「すごいね。これ全部、この神殿の記録?」

「ほとんどがそうです。」この神官名簿や祭事記録、それに里人の生活に関する祭事の記録……過去帳とか。他の神殿に関する記録はこっちです」「

僕が奥にある棚を示すと、真理はぎつしり詰まつた背表紙をじつくり眺めてから、やおら振り向いて言いました。

「ありがとうございます。後は自分で調べるから、仕事に戻つていいよ」

「まさか」僕は呆れ声を上げました。「何を調べたいのか言つて下さい。手伝います」

この部屋には大事な記録もあるらしいし、よそ者を一人で置き去りになんて、出来やしません。何かあつたら僕の責任です。

僕の考えを読むように、真理はじつと僕を見つめました。黒い目は深い底無し井戸のようで、ことによると、本当に彼は人の心が見えるのかもしません。やがてふいと視線を外して、彼は「そうだね」と冷ややかに言いました。

「お手付け役をおろそかには出来ない、か。それじゃあ、ただ見てるのも退屈だろうから、手伝つてもらおうかな」

皮肉な言い方に、僕はカチンときたものの、言い返せずに沈黙しました。親切で手伝うと言つたわけじゃないのは、事実ですから。でも、それを指摘されるのがこんなに嫌なものだとは、思つていませんでした。

「深谷に関する記録なら、どんな些細な事でもいいから見たいんだ。俺はこっちの端から順に調べるから、君はそっちから始めて」「わかりました」

作業にかかるからも、しばらくは彼が帳面をめくる音が気になつて、目は文字の上を滑つていくばかりでした。けれどもやがて僕はどうにか、『深谷』の一文字を探すことに集中し、余計なことを頭から締め出しました。

深谷なんて、聞いたことがない土地です。でも確かに、昔の神殿一覧に小さくその名前が記されていました。建立されたのはかなり古いのですが、ほとんど記述のない扱いからして、規模は小さい

のでしょう。僕はその場所に栄を挟んで、先へ進みました。

ところが、気が付くと僕はいつの間にか、全然関係のない記録を読みふけつていきました。文字を追つている内に、我を忘れてしました。時間だけが徒に過ぎていきました。

と、いきなり戸がカラリと開いて、白露先輩がひょいと顔を出しました。

「はいよ、そろそろお昼にしようか。昼餉ヒヤウが済んで一休みしたら、真理君は稽古場に行くようにな。諭佐ヨサ 法師が待つていてさ。それじゃ、行こうか」

先輩に促され、僕らは揃つて食堂に向かいました。その間も真理は口をきかず、黙つて自分一人の物思いに沈んでいるようでした。ご飯と煮豆だけの簡単な食事をすませると、真理はぺこりと頭を下げて、すたすたと去つて行きました。どこからか一匹の犬が主を見付け、その後を追つて行きます。けれども他には誰も、真理に声をかけたりする様子はありませんでした。

「翼、おまえさん、あの子に何か言つたかい？」

先輩が訝るよに言いました。僕は「まさか」と慌てて首を振りました。

「何も言つてませんよ。向こうだって、何も言わないんですから。必要なこと以外は」

「ふうん……手強そだねえ。似たような年頃の相手なら、何か世間話でもするかと思つたんだが。まあ、ぼちぼちやることだね」
ぼちぼち、何を？ そう聞き返したかったのですが、答えはどうせろくでもない事でしょう。だから僕は何も言わず、肩を竦めるだけにしておきました。

そんな僕の心中が分かつたのか、先輩は軽く僕の頭を小突いて言いました。

「それじゃ、今度は助手を奪われた可哀想な先輩の手伝いをしておくれよ」

「……気にしなくていい、つて言つたくせに」

「何かおっしゃいましたかね、翼君？」
「何も言つてません！」

そんな調子で、一日、二日と過ぎて行きました。

相変わらず僕は、何を調べているのかも知られないまま、ただ『深谷』の一文字を探し続け、真理は真理で、黙つて帳面や書状の綴りを広げていました。

相手が何も言わないものだから、僕にはますます彼の事が不気味に思われてきました。夜な夜な夢に禍々しい影が出て来るようになり、真理の後ろ姿が見えたと思ったら、振り返った顔が鬼だった、なんてこともしょっちゅうでした。

やっぱり、あの噂は本当なのかもしない。今、僕の目の前にいるのは、人を大勢殺めた恐ろしい鬼なのかも。

そう思うと恐ろしくて、僕は彼と同じ部屋で黙つて調べ物を続けるのが、だんだん辛くなつてきました。昼餉の時もご飯が喉に詰まるような感じがして、あまり食べられなくなつてしましました。

一日も早く調べ物を終わらせたくて、僕は急いで読み進めましたが、焦るといつの間にか目がさまよつていたりして、結局なかなかはかどらないのでした。

一 少年ふたり（2）

そういって、七日ほど経った頃でした。

朝から雪が降っていたのですが、ふと部屋が明るくなつたことに気付いて、僕は顔を上げました。いつの間にかに雪が止んで、日が差しているのでしょう。その照り返しで、障子が白く光っていました。真理はいつもと同じ場所で、相変わらず黙つて帳面をめくっていました。辺りは静かで、ほとんど何の物音もしません。何か、とても穏やかな空気が満ちていました。

その時、どうしたはずみか、僕の口からふと言葉がこぼれました。「……影を連れた少年がいる、つて」

びっくりしたように、真理がこちらを振り向きました。しまった、と思いましたが、いまさら出でてしまった言葉を引っ込めることも出来ません。

「噂を、知つてますか」

どうにか僕がそう言つと、真理はまじまじと僕を見つめ、それから何とも言えない表情で目をそらしました。

長い沈黙があつて、彼がようやくぽつりと言つたのは、

「ここに明主様はいい人だね」

という、奇妙な返事でした。聞き返したものかどうか、僕が迷っている間に、彼は微かな苦笑を浮かべて続けました。

「もう噂が立つていて、俺の頼みを聞いて下さった」「……っ！ それじゃあ、やつぱり」

僕は息を飲み、手にしていた帳面を落としそうになりました。うろたえた僕に、真理はひどく大人びた目を向けて、いつも簡単にうなずきました。

「そうだよ。俺がその『影を連れた少年』なんだ。実際は連れ歩いているんじやなくて、取り憑かれてるんだけどさ。噂は足が速いね、本人より先に着いてるなんて、驚きだ。そのせいで、瀬場からここ

まで来る間、どこかの神殿でもあれこれ理由をつけて追い払われたよ。人を増やす余裕がないとか、指導できるほどの法師がないから、とか

「…………」「

僕は絶句したきり、その場に立ち去ってしまいました。まさか本当に彼が噂の主で、しかもそれを自分で認めるなんて、とても信じられなくて。

「心配しなくとも、影は神殿の境内には入って来られないよ。特にここは神気が強いからね。まあ、今までに寄った所では神気が弱くて、境内のすぐ際まで影が寄つて来たりして、それもあって断られたんだけど。俺はあの影をなんとかして追い払うか、退治するか、その方法を探しているんだ」

真理は淡々とそれだけ言つと、また帳面に目を落としました。

「俺自身が強くなることも大事だけど、綾女さんが、それ以外にも何かがあるはずだ、って言つからね」

「……へえ」

僕はぽかんとしたまま、間の抜けた相槌を打ちました。真理は小さくふきだして、揶揄するような目を僕に向けました。認めるとは思わなかつたかい、とか、嘘だと思ってるだろ、とか、そんな感じの目を。でも、だからこそ逆に、彼が本当のことと言つているんだと分かりました。

同時に、僕の中でストンと何かが収まつたよつて、真理のことが理解できました。

彼が怖く思われたのは、彼が僕の疑いに気付いて、自分を守つと身構えたせいだったのでしょうか。僕は、自分自身の敵意の反射に怯えていただけだったのです。

こんな風にあつさり認められるのなら、もつと早くに訊いておくべきでした。真理は影を操る鬼なんかじやなくて、むしろ影を退治する方法を探していたんだ、なんて。

そうと分かると、僕は急に、真理が気の毒に思えてきました。

時々見せる、今みたいな皮肉な態度も……まるである賞金稼ぎみたいですが、きっと辛い現実から田をそらす為なんでしょう。まともに向き合つたら、怖くて挫けそうだから。

少なくとも、僕だつたらおかしくなるだらうな。人を殺める恐ろしい影が、どこに行つても自分の後について来る、なんて、そつとする。

僕はふるつと身震いして、それを「まかすよひ」、首を竦めました。

「じゃあ……影が人を殺めるつてこいつのは、本當ですか」

途端に、真理の顔からさつと表情が消えました。

しまつた。ここまで踏み込んじゃいけなかつたんだ。

僕が失敗を悟つて身を固くしていると、真理は黙つて小さくうなずきました。それから、何か言いかけて口を開きましたが、結局そのまま黙つて窓の方を向いてしました。

しばらくして彼は、ぱつりとつぶやきました。

「……外。雪がやんだみたいだね」

「え、ああ、そうですね。また雪かきしないと」

僕も話を合わせて、そろつと障子を開けてみました。

うわあ、積もつてゐる、積もつてゐる。げんなりだ。

僕が思わずがくりとうなだれると、真理はちょっとだけ笑いました。

「毎年こんなに積もるのかい？」

「いいえ。今年は特別です。最初は皆、雪遊びをしたりしましたけど、もう沢山ですね」

「ふうん……手伝おうか。雪かき」

思いがけない申し出に、僕は田をぱちくつさせて振り向きました。

「でも、調べ物が。それに……一応、お客人ですから」

「俺の方がお世話になつてゐんだから、雪かきぐらいしなきゃ罰が当たるよ。部屋に籠もりつきりだと氣分も暗くなるし、たまには外に行こう」

言いながら、もう真理は書状を片付けています。僕も慌てて、帳面に栄を挟んで閉じました。真理は書斎に顔を出して、雪かきしてきます、と白露先輩に言い置き、どんどん歩いて行きます。僕はその後を追いかけ、納戸の場所を教えました。

一人してたすきをかけて、雪かきを手にすると、なんだか少し元気が出てきました。いつもはうんざりする雪かきも、今日は少し違う気がしてきます。

僕の受け持ちの裏参道へ向かうと、一匹の犬もやってきました。もちろん、犬に雪かきはできませんから、その辺で遊んでいるだけですが。

「こつちは表参道よりも、急なんだね」

ざぐざぐと階段を掘り出しながら、真理が言いました。

「ええ。だから、滑らないように気を付けて下さいね」

そう言ってから、僕は自分でおかしくなって、ふきだしてしました。実際に滑つて落ちたのは、僕の方なのに！ 真理も笑つて、雪を脇の茂みに投げました。

その後も、いつまでも彼がくすくす笑い続けているので、僕はちよつと仕返しをしてやることにしました。失敗したふりで、わざと彼の方に雪を放り投げてやつたのです。

「うわっ！」

見事、命中。僕は「あ、すみません」なんて白々しく謝りましたが、顔はどうしようもなくニヤニヤしていました。となると真理も、わざとだと気付かないはずがありません。苦虫を噛み潰して雪を払い、それから素早く屈むと、真新しい雪をひとすくい、投げてきました。

「おつとー、あつ、しまつた」

僕は顔に当たりそうになつた雪の塊を避け、またわざとらしい『失敗』をしてやりました。今度は真理もサツとかわし、さつきよりも速く雪をひつかけてきました。

一匹の犬が、何をやつてているのかと楽しげに駆け寄り、足元にま

とわりつきます。僕はすっかり愉快になつて、どんどん雪を投げてやりました。

そうしてしばりぐく、僕らは夢中になつて雪をぶつけ合つていましたが、

「ぶわッ！ 佩つ佩つ、何しやがる」の餓鬼！」

いきなり割り込んだ下品な罵声が、終わりの合図になりました。僕と真理は手を止め、裏参道を上がつてきた不運な客を見下ろしました。

「あれえ、おじさん！」

雪まみれのまま、真理が頗狂な声を上げました。言つまでもなく、巻き添えを食つたのは、あの賞金稼ぎ……雷火さんでした。

少し下の方から、綾女さんもくつくつ笑つて見上げています。

「おやまあ、水もしたたるいい男だこと。良かつたねえ、雷火」

「綾女、おまえ、俺を盾にしやがつたな？ なんでおまえは丸つくり無事なんだよ！」

「ハつ当たりは止しとくれ。あたしはあんたと違つて、用心深いだけさね。坊や、元氣そうだね。仲良くなつてやつてのようで、安心したよ」

仲良くなつて？ 誰と誰が？

思わず僕と真理は顔を見合わせました。そしてお互い、言われて初めて自分たちが仲良くなつていた事に気が付いたみたいに、照れ臭くなつて笑つてしましました。

雷火さんが、雪を払いながら怪訝そうに首を傾げました。真理はまだ笑いながら、

「なんでもないよ」

と首を振りました。そう、確かに、なんでもないことなのかも知れません 友達になるつていうのは。なにも、特別なことではなくて。

僕と真理はちぢつと手を合わせて、またちょっと笑いました。

そんな僕らの様子に雷火さんも機嫌を直して苦笑すると、真理の頭に手を伸ばして、くつついたままの雪を落つてやりました。

「お楽しみのところ、すまねえがな。また明主様に話があるんだ。深谷から闇鷺が戻つたんだが……あんまり良くなえ知らせだ」

「えつ……」

真理の顔が曇りました。綾女さんは、いたわるむすびに微笑んで言いました。

「それでちょいと、相談というか、お願ひがあつてね。坊や、ええつと……翼つて言つたかね。悪いけど、また明主様に取り次いじやくれないかい」

「あつ、はい、もちろん。すぐに」

僕は慌てて答え、たすきをほどきました。真理が黙つて、雪かきを受け取つてくれたので、片付けは彼に任せて、僕は急いで階段を駆け上がつて行きました。

なんだろう、良くない知らせつて？

不安に胸がどきどきして、僕は焦るあまり何度も転びそうになりました。昨日までだつたら、知らせがどうだろうと気にしなかつたでしょう。けれども今の僕は、どうか絶望的な知らせではありますように、と一心に祈つていました。

三 夜闇に浮かぶ（一）

三

真理たち三人は、今度は奥の院に通されました。僕も話が気になつたのですが、明主様に下がるように言われてしましました。思わず「でも」と口走りましたが、同席が許される雰囲気ではありません。

仕方なく僕が引き下がりかけたところで、真理が「待って」と止めました。

「すみません、明主様。実は翼にも、事情を一部話してしまったんです。中途半端に知らせて放つておくれ、きちんと知つてもらつ方が、お互いのためじゃないでしょうか」

「ふうむ……。よろしい、翼、おいで。けれども、ここで知つたことは決して、口外してはならないよ」

明主様に手招きされ、僕はほつとしてお礼を述べ、急いで部屋の隅に座りました。

入れ替わりに明侍らしき人が外に出て、見張りのために座り、襖を閉めました。これは本当に重大な秘密なんだ 僕は緊張して身を固くしました。この場にいるのは、真理たち三人と明主様のほかは、諭佐法師と僕だけです。

まず口を開いたのは真理でした。

「先に、翼のために補足しておくれよ。影は、僕が深谷を出た時からついて来たんだ。だから、影の正体や封じ方なんかの手掛かりが、深谷の神殿に残されていないかと思ってね。それで、綾女さんの……使いが、深谷へ行つてたんだ」

そこまで説明してから、彼は綾女さんに向き直りました。

「それで、良くない知らせって？」

問うた声がわずかにかすれていきました。綾女さんもすぐには答え

られず、深刻な表情で頭を伏せていました。が、ややあつて、はつきりとこゝつ語りました。

「柳斎明師は、亡くなつていたよ」

「――！」

真理は息を飲み、ぎくりと身をこわばらせました。綾女さんは一番難しいことを伝えてしまつて肩の荷が下りたのか、ふと息を吐いて続けました。

「安心おし。祟りがあつたとか、村を襲つた災いが止まなかつたとか、そういうわけじゃないから。あんたが出た後、確かに災いはおさまつたらしくよ。明師様が亡くなつたのはお齡のせいで、眠るよう逝かれた、って話だつた」

それを聞いて真理は緊張を解きましたが、静かな吐息をもらしただけで、何も言いませんでした。諭佐法師が、気詰まりな空気を払おうとするように、先を促しました。

「それでは、神殿の者は？」

「それが、誰もいませんでねえ。亡くなられたのが最近だから、後任が来てないんでしょうよ。どつちにしろ、新任の神官が深谷の昔話を知つていても思えませんからね」

そこまで言つと、綾女さんは、なぜかちらりと僕の方を見ました。そしてそのまま黙り込み、話を進めるのをためらひつゝ、無意味に髪をいじつています。

そんな綾女さんに代わつて、雷火さんが無遠慮に言いました。

「そういうわけで、ものは相談なんですがね、明主さん。亡くなつた明師さんの御靈みたまを、呼びてえんですよ。この神殿に

「なんと」

さすがに明主様も驚きの声を上げられました。僕はとつと、仰天して息を飲んだきり、声も出せずに綾女さんを凝視していました。神や御靈を己の体に降ろすことの出来る人なら、神殿の外にもいます。『のりわら』と呼ばれるそうした人の口を通して、神託を授かる祭礼もあります。でもそれは、何日もかけて心身を清め、神官

が儀式を執り行つて初めて可能なことだ……自分勝手に御靈を呼び出せるのは、巫師だけです。

忌まわしく穢らわしい、妖使いの巫師。よりによつて、綾女さんがその一人だなんて。

僕はそのことに衝撃を受けたのですが、明主様が驚かれたのは別のことでした。

「さほどの技をお持ちとは、よほど優れた師につかれたようですね」明主様は、綾女さんを嫌うどころか、感心した風におっしゃいました。それで僕はまたびっくりして、あんぐり口を開けてしましました。

綾女さんは苦笑しながら答えました。

「自分で選んだわけじゃあ、ありませんけどね。幸い、この神殿なら申し分なく清められているし、立派なご神木の助けも借りられまづから、呼びやすいと思うんですよ。ただ、神殿の中で巫師に御靈降ろしをさせたなんて、人聞きが悪いございましょう?」

「確かに、昼日中に人前で、というのでは困りますな」

「ああ、それはもちろん、致しませんよ。お天道様がある間は、御靈も現れてくれませんからね。夜中にこつそり、邪魔の入らないところでやらせてもらいます」

「それならば、今夜にでも

「よろしくうございますか」

とんとん拍子に話が進んで行くので、僕はつりたえて、田を白黒させらばかりでした。

そんな僕の様子に気付いて、諭佐法師が苦笑されました。

「翼、そう驚かずとも良い。巫師と言つても、すべてが邪なものではないのだ。我々神官とは異なる流儀で神々に接する人々だが、だからと言つて、それが間違つていいというわけではない。時には互いに力を合わせる事も、必要になるのだよ」

「でも、講義では……」

僕が弱々しく反論すると、諭佐法師は表情を改めておっしゃいま

した。

「確かに、巫師は邪悪であると教えている。それは、半端に力と技を身につけた者が、心の修養を怠つて、『邪悪な巫師』のようになるのを防ぐためなのだ。則に従わざとも己の才覚でやつていける、と心得違いをした者は、もはや神官ではない。それは巫師だ。そして巫師であることは、極めて転落しやすい、細く険しい道を歩むことなのだよ」

だから、未熟な見習いたちを危ない道に近づかせまいとして、巫師を悪者に仕立てている、というのでしょうか。僕にはなんだか納得が行きませんでした。けれども、今は講義の時間ではありません。渋々「わかりました」とうなずくしかありませんでした。

それから、今夜もう一度ここに集まることが話し合われ、その場は解散になりました。

真理たちと一緒に外に出ると、いつも見慣れたはずの境内が、なんだか違う場所のように思われました。実際、僕にとつての神殿という存在が、これまでとは違つてしまつたのかもしれません。

僕はぼんやり立ち尽くしたまま、真理たちが話しているのを背中で聞いていました。

「で、真理、おまえの方は何か成果があつたか？」

「あんまり。でも、少しほ深谷について分かつこともあるよ」

そう言って真理が説明した内容は、僕と二人がかりであちこちから拾い集めた断片を、つなぎあわせたものでした。

深谷はもともと、川で砂金の採れる土地だったそうです。それを独り占めしていた一族がいましたが、朝廷の兵が彼らを討ち取り、その時に神殿が建てられました。これからは砂金をきちんと土地神様に奉納した上で、村人皆で富を分かち合おう、という約束のしるとして。

けれどもいつしか砂金が採れなくなり、村人は生計の道を求めて谷から一人、また一人と去つて行きました。そして、もう何十年もさびれたままになっているのです。

確かに、深谷の歴史についてはそれだけのことが分かっています。でも、これまでのところ、真理の『影』に関係がありそうな話はひとつも見付かっていません。

ところが、話を聞いた雷火さんは小さく唸つて言いました。

「砂金ねえ。臭いな」

「え？ 何が」

真理が聞き返すのと同時に、僕も振り返っていました。砂金と『影』にどんなつながりがあるって言うんだろう？

僕は不思議に思つて返事を待ちましたが、雷火さんは、こっちを見て肩を竦めました。

「ここで話すのは、ちょっと都合が悪い。まあ今晚、綾女が失敗しながら分かるわ」

その言葉に、僕と真理の視線が隣へ移りました。綾女さんはムッとした様子で雷火さんを睨んでいましたが、すぐに気を取り直して、僕の方を向きました。

「はいはい、失敗しなきやあいいんでしょう。坊や、手間を取りさせて悪いけど、ご神木のところへ連れてつておくれでないかい。力を借りる前に、挨拶をしておかないとね」

「拝殿じゃなくて、クスノキの所ですか？ それなら、見えてますよ。あそこで」

「そう言わずに、案内しておくれよ。こここの神官が誰かついていてくれた方が、怪しまれなくていいだろ？」

両手を合わせて拝まれたのでは、断れません。僕はまだもやもやした気分でしたが、三人をクスノキのところへ連れて行きました。注連縄をかけたクスノキは、いつ見ても堂々として威厳があり、その近くに立つだけで、すうっと心が澄んでいくようでした。最前まであれこれ考えていたのが、何もかも瑣末でどうでもいい事のようと思われてきます。

「はあ、これは大したものだねえ」

綾女さんも感嘆の声をもらして、冬の今も葉の生い茂る梢を見上

げました。

「立派でしょ、樹齢は三五年とも、四百年とも言われています」
僕が得意げに説明している間に、綾女さんは木に歩み寄り、幹に
そつと両手を当てました。さすがに僕はぎょっとなりましたが、そ
れきり綾女さんは何をするでもなく、目を閉じて、じつと何かに耳
を澄ませているようでした。

これが諭佐法師の言われた、『違つ流儀で神々と接する』といふ
ことなのでしょうか。

僕は内心、誰かが通りがかつて咎められやしないか、とやきもき
していましたが、幸いそんなこともなく、じきに綾女さんは手を離
して、僕らの所へ戻つて来ました。

「……どうですか？」

なんとなく僕がそう訊くと、綾女さんはこつこつ微笑みました。

「それは、今晚にね」

三 夜闇に浮かぶ（2）

夜中に宿舎を抜け出すのは、それほど難しいことではありませんでした。皆が寝静まつた後で廁へ行く人もいるからです。僕もそんな一人のふりをして、寒さに肩をすぼめながら何食わぬ顔で部屋を出ると、そのまま青白い月光の下を、奥の院へと急ぎました。

実を言えば、僕が行く必要などなかつたのですが、こうなつたらもう乗りかかつた船です。雷火さんが言つていたことも気にかかるし、いまさら知らんふりは出来ません。

明主様のお部屋には、もう他の皆が揃つていました。

卓の上にはクスノキの小枝を挟んで蠅燭が灯され、香が焚かれていました。僕が部屋の隅に座ると、綾女さんが「始めます」と一言ささやいて、胸の前で印を結びました。

その唇からこぼれた声は小さくてよく聞こえませんでしたが、言葉につれて空気が変わつていいくのが分かりました。

やがて、ふう……っ、と、誰かが吐息をもらしたように感じました。同時に、襟や袖に冷気が入つて來たので、僕はぞつとして我が身を抱きしめました。

何が始まるんだろう　　そう思つて目を上げた時には、部屋の中央に空けておいた場所に、ぼうつと白い影が浮き上がつっていました。僕は危うく飛び上がりそうになりましたが、からうじて声は飲み込みました。ここで悲鳴を上げたりしたら、ひんしゅくを買うどころか、すべてぶち壊してしまうかもしません。僕は力タ力タ震える手を膝にぎゅっと押し付けて、じつと堪えていました。

「明師様」

かすれ声で呼びかけたのは、真理でした。それに応じて白い影がゆっくり向きを変え、ようやく僕の目にも、それが一人の老人だと分かりました。

「そこにはいるのは……真理……かい？」

隙間風のような声がささやきました。御靈が話しているのではなく、天井の隅か、その向こうから響いているように聞こえます。

「柳斎さん」綾女さんが呼びかけました。「あなたはもう亡くなりました。現世のしがらみは切っています。おわかりですか?」

柳斎明師の御靈は、声を出さずにこつくりとうなずきました。

「お尋ねします。真理に憑いている影の正体、ご存じならばお教え下さい」

しばし思えはなく、沈黙が続きました。誰もが固唾を飲んで、御靈の返事を待ち受けっていました。不安の色が皆の顔に見え始めた頃、ようやつと声が返りました。

「……葦生彦。深谷の長だつた者じや。朝廷に討たれ、首は村外れに埋められた。守り石などと言つたが、元は首塚じや……それが倒れ、御靈が……解き放たれた」

「なぜ、真理に憑いたのですか?」

今度は前よりも長い沈黙でした。綾女さんが、答えを促さなければならぬほどに。

「お教えください。あなたを脅かすものは、もうありません」

「葦生彦は……真理の……先祖なのだ。血のつながりを使い……結びつけた。わしが」

か細い声がささやきました。僕が思わず真理を見ると、彼は目をみはり、薄く開いた唇を震わせて、御靈を凝視していました。

「許しておくれ。わしは……そなたを、守れなんだ。犬たちと共に行かせたは、せめてもの……償いの、つもりじゃった。しかし、これほどの重荷を……」

「いいえ、明師様は俺を助けて下さいました」

真理は今にも泣き出しそうな顔で、どうにかそれだけ言いました。御靈の手が、慰めようとあるよつとしづつと上がり……また、だらりと下がりました。

「じゃが……今、そなたと、葦生彦を結んでいるものは……血だけではなかろう」

御靈の言葉に、真理はうなだれて「はい」と小さくつぶやきました。御靈は痛ましげな表情を見せ、ゆっくりと語り続けました。

「影を呼んではならぬ。憎しみが募るつとも、自ら影を招いてはならぬぞ。……出来るならば、許すことじじゃ。罪人であるわしが……

……言つて良いことではないがな。そりでなくとも、幼いそなたには辛からう」

「俺はもう、子供じや ありません」

真理は顔を上げ、悲しげに微笑んで言いました。確かに、十五歳ほどにもなれば、もう幼子ではありません。それに真理は、僕と同じ年頃に見えるとは言え、内面は随分と大人びているようです。それは多分、深谷を出てから多くの事を見聞きし、辛い思いもたくさんしてきたからなのでしょう。

柳斎明師の御靈は何を思つたのか、小さく首を振りました。いや、まだまだ子供だ、と言いたかったのか……それとも、その通りだ、もう昔と同じ幼子ではないぞ、と思われたのか。いずれかは分かりません。御靈はそのことについては何も言わず、すつと手を上げてひとつの方を示しました。

「北を目指すのじや。フシらの御靈が集う場所……そこならば……」

不意に声が遠くなり、白い影が薄れ始めたので、僕と真理は思わず身を乗り出し、雷火さんは綾女さんの方を振り向きました。ほとんど同時に、何の前触れもなく、御靈はフツとかき消えてしましました。

「明師様！」

真理が叫び、御靈のいた場所に飛び出しました。でももちろん、それでどうなるわけでもありません。彼はその場に呆然と立ち尽くし、それからがくりと膝をついて、両手に顔を埋めました。

僕はかける言葉もなく、その背中を見つめるばかりでした。

ややあつて、雷火さんが大きなため息をついて、うんと伸びをしました。その仕草で、それまでの空気がすっかり消え、いつもの……

……御靈や神や妖とは離れた、日常が戻ってきたように感じられまし

た。

「さて、どうするかね」

雷火さんの言葉で、真理が顔を上げて涙を拭いました。田はまだ潤んでいましたが、もう泣くまいと決めたように、唇はきゅっと引き結ばれています。雷火さんは、ちょっと頭を搔いて、何事もなかつたような調子で話を続けました。

「巫師の御靈が集う場所、とか言つてたが……綾女、聞いたことあるか？」

「あいにく、そんな話は知らないねえ」

綾女さんは香炉を片付けながら、首をひねっています。

「まあ、巫師のつてを頼れば、何か分かるかもしないけど」

「気が進まねえ、つてか？」

「昼間そこの法師さんがおつしやつたよ」と、巫師にも色々いるからね

綾女さんはそう言いましたが、真理と田を合図せると、すぐに笑つてうなずきました。

「でもまあ、坊やのためだ。一肌脱ぐつじやないの。ああ、礼なんていよい。ただのお節介だ、つて何度も言つてるじゃないか」

「そいやつて油断させておいて、頭からぱつくり食つちまつつもりだろ？」「うう

雷火さんがからかい、綾女さんは拳を振り上げました。僕と真理は同時にふきだしてしまい、顔を見合わせてくすくす笑いだしました。

「それでは」とおつしやつた明主様まで、楽しそうなお声でした。「巫師の靈場については、綾女殿にお願い致しましょう。しかし、いざにせよ出立は雪解けまで待たれた方がよろしく」。ここより北はさらに山深い土地。峠も雪で閉ざされておりましょ「うからな。それまでの間、真理はこの神殿で修養を積むが良い。この土地ならば、大楠の神気が怨靈を遠ざけて下さるやえ、里の者にも禍はあるまい」はい、と真理が答え、綾女さんと雷火さんが立ち上がりました。

僕も、急に眠気が差してきて、あくびをかみ殺しながら急いで部屋を出ました。早く戻らないと、誰かに見付かったら面倒なことになります。

外に出たといひで、不意に袖をつかまれました。びっくりして振り返ると、真理が奇妙な表情で立っていました。何か言いたいのに、なかなか言い出せずにいるようです。

僕が首を傾げると、真理は小さな声で、つぶやくみたいになりました。

「……翼、ありがと」

「え？」

僕は田をぱちぱちせました。ありがと、って、何が？ 僕は何も、お礼を言われるような事はしていません。ただ部屋の隅っこで、じつと見物していただけです。

綾女さんや明主様にお礼を言つのなら、わかります。でもびっくりして僕に？

きょとんとしている僕に、真理はちょっと笑うと、

「いいんだ、気にしないで」

勝手にそんな事を言つて、手を離しました。……何だったんだろう？

困惑しながら僕が宿舎に戻ると、隣の布団で白露先輩がもぞもぞ動きました。

「なんだ……翼、廁か？」

むにゃむにゃと寝ぼけ声で言われ、僕は慌てて謝りました。

「あっ、はい。すみません」

んんー、とかなんとか、唸り声の返事。完全に田を覚ましたわけではないようです。僕はホツとして、すっかり冷えきった布団にもぐりこみました。

早く眠ろうと思つてまぶたを閉じましたが、さつきの真理の言葉が気になつてなかなか寝付けません。僕はしばらくじつと我慢していましたが、結局、ごそごそと横を向いて、うんと小声でささやき

ました。

「白露先輩」

「んー？」

寝言と区別がつかないほどの声でしたが、返事がありました。

「あの……何もしてないのにお礼を言われるって、どうこう事だと思いますか」

すぐには反応がありました。やっぱり寝ちゃったのかな、と諦めかけた頃になつて、先輩は「ほんと寝返りを打つて、こちらを向きました。

「何もしてないつもりで何かをしていたか、あるいは、ただそこにあるだけでありがたいと思われたか、どっちかだろうね。ちなみに俺は今、おまえさんが何もしないで、俺を静かに寝かせといってくれたらとってもありがたいのになー、と思つていて

「す、すみません。おやすみなさい」

僕はまた謝ると、もう寝ます、といつふりで仰向になつて、目を瞑りました。じきに先輩がすやすや寝息を立て始めたので、僕はまたぱつぱつと目を開けて、天井を見つめながらあれこれと思いふけりました。

そこにいるだけでありがたいって、思われたんだろうか。僕が？ 僕は何もしていなければ、真理にとつては……僕があの場にいるだけで、何かの助けになつたんだろうか。それならいいんだけど。

僕は今まで、そんな風に誰かをありがたいと感じたことはありません。何もしないのなら、いよいよいまいと関係ないじゃないか、と思うぐらいです。でも。

でも、もし、本当にそう感じることがあるのだとしたら。それは、僕がまだ体験していない辛さを、真理が知つていてるからではないでしょうか。

そう考えると、なんだか切なくなつて、ひとりでに涙が浮かんでくるのでした。

三 夜闇に浮かぶ（3）

翌日もまた、今までと同じように真理が調べ物にやって来ました。書庫に入ると、僕はふと、妙におかしくなつてしましました。昨日では、ここに来るのが嫌で嫌で仕方なかつたなんて、自分でも信じられません。僕は気付かずに変な顔をしていたらしく、真理が怪しむように「どうかした？」と訊いてきました。

「いえ、何でも。あの……昨日、結局どうしたことだつたんですか？」

僕が言つと、真理はちょっと困つたような、恥ずかしそうな顔をしました。

あれ？ あつ、そうか。お礼の事じやなくて……

「深谷の守り石がどうとか。僕、なんだかぼうっとしていたみたいで、事情がよく分からなかつたんですけど」

「ああ、その話」

真理はホッとしたように苦笑して、簡単にまとめてくれました。

「俺に憑いている影の正体は、ずっと昔、朝廷に討ち取られた葦生彦の怨霊だつた、ってことだよ。綾女さんが言つには、首塚を守り石として祀つて祟りを鎮めていたのが、砂金が採れなくなつて神殿がさびれたせいでおろそかにされて、怨霊が力を増したんじゃないのか、つて」

「でもそれなら、深谷の神殿に祟りをなすはずで、人に憑いてこんな所まで出てくるのはおかしくありませんか？」

「それは……ああそつか、まだ言つてなかつたつけ。実際、祟りはあつたんだよ。長雨で色々とね。それで俺が人柱にされる所だつたんだけど、明師様が旨を説得して、俺を村から追い出すことで手を打つたんだ。先祖の靈を、子孫の俺にくつつけて、ね」

真理は苦笑して、肩を竦めました。その笑い方はまた、雷火さんのような皮肉なものになつっていました。多分、もうひとつ真理

由を言わずに『こまかすための笑い方。

血だけではない、と昨夜の御靈は言いました。そして、憎まずに許せ、とも。

つまり、深谷の人々に対する憎しみが、一人の結びつきを強めてしまったのでしょう。真理を人柱にしようとした人々、葦生彦の祀りを怠つた人々に対する、怒りと憎しみが。

僕が黙つていると、真理は笑みを消して、淡々と続けました。

「おじ……雷火さんの話だと、各地の神殿には、天子様が倒した妖や鬼を鎮めるために建てた、つて由来が多いんだってさ。要するに、『先住民をぶっ殺して土地を奪つた上に、死んだ後も祟るなつて靈魂まで神殿の下敷きにしちまつ』ってことだけど

「……！」

なんて不遜な！

僕は驚きのあまり、がくんと顎を落としてしまいました。そんな僕に、真理は辛辣な笑みを見せました。

「深谷だつて、きっと葦生彦だけじゃなくて大勢殺されたと思うよ。だから、今の深谷の住人は、先祖を連れればほとんどが『よそ者』で…… 葦生彦が祟るのも無理ないよね」

「だ……だけど、でも、そんな」

僕は動搖のあまり、わけのわからない事を口走りました。混乱して、何がなんだかよく分かりません。

真理の言うことが本当なら、ひどい話です。この神殿だつて、あのクスノキの根元に、もしかしたら葦生彦のような人が埋められているかもしれません。

しばらくかかつて、僕はようやつと、言葉を押し出しました。

「あなたは平氣なんですか。そんな事を言つて」

真理だつて、神官なのに。僕と同じよつて、神殿で学んだはずなのに。

僕の問いかけに、真理はふいと目をそらしました。

「平氣なわけないよ。でも、納得が行くからね。それに、全部が何

かを踏みつけにして建てられたってわけじゃないし、どうちにしろ昔の話だ。今ではどこかの神殿も、妖から里を守り、神々を祀つて豊饒をもたらす、大事なつとめを果たしているんだから

「それは……そうですけど」

僕はもぐもぐ言つて、それきり黙り込みました。

そんな風に割り切つてしまえたら、どんなに楽なことか。神官であることに後ろめたさを感じなくてもすむし、今まで通り、偉い人に従つておつとめを果たしていける。

でもそうしたら、かつて踏みつけにされた人たちは、どうなるんだろう？

僕があれこれ考えていると、真理が口調を明るく変えて言いました。

「ともかく、相手が怨霊なら、鎮める方法がないわけじゃないだろうからさ。昔の深谷でどんな風に祀つていたのか、とか、ほかの神殿で似たような場合の記録がないか、調べてみることにしたんだ。それと念のため、『巫師の靈場』の手掛かりもね。綾女さんに頼りっぱなしじゃ、申し訳ないから」

「えつ……つてことは、もしかして、もう一度最初から調べ直し……？」

僕が愕然として問い返すと、真理はにやにや笑いました。

「そうなるね。今までに読んだ内容を全部覚えているのなら、やり直す必要はないけど」

「そんな無茶な」

思わず泣きそうな声を上げ、僕はげんなりして机に突つ伏してしまいました。今までの苦労はいつたい、何だったんだ……。

人の氣も知らずに、真理はぽんと僕の背中を叩きました。

「そう悲觀しなくてもいいよ、ほら、時間はたっぷりあるんだから

さ

「……」

ひと冬丸々、調べ物に付き合えつて言つんだろうか？ もういっ

そ僕の方こそ、真理を恨みたくなつて来ました……。

ともあれそんなわけで、その後もずっと、午前中は書庫にこもつて過ごす日が続きました。何しろ前と違つて、すべての内容を細部まできちんと読んでいかなければならぬのですから、本当に大変でした。

ただそれも、毎日必ず、といつわけではありませんでした。

神殿では冬でも、鎮魂祭たましすめのまつりや晦の晦大祓おほはらげなど大事な儀式があつて、書部や法部もそれぞれ受け持ちの仕事が出てきますから、そういう時期は書庫に籠もつてゐる暇がありません。

時には真理が、法部の皆と一緒に何日も禊禊をすることもありました。書庫に来はしても、前日の疲れが抜けておらず、ほとんど何もせずにぐつすり眠り込んでしまつたりもしたし、一人でこつそり抜け出して、一匹の犬と一緒に遊びに出かける事もありました。

雷火さんと綾女さんは、時々様子を見に来ましたが、巫師の靈場については、なかなか進展がないようでした。よその巫師と文をやりとりするにしても、雪のせいでの日数がかかるのでしょう。

そうする内に年も明け、寒さもいくぶん和らいで、梅の蕾が膨らんできました。

四 北へ（1）

四

書斎で白露先輩と並んで帳簿の検算をしていた時のこと。僕はふと、祈禱代の項に目を留めました。前日に綾女さんが来たので、巫師の仕事がどんなものかなど、色々と話をしたのですが、その時に綾女さんが「巫師の方が安上がりだし、気軽に頼みやすい」というようなことを言っていたと思い出したのです。

それであれこれ考えている内に、僕はひとつ疑問に突き当たりました。

「先輩、巫師ってやつぱり、普通の人とは違うんですよね？ それって、亡くなつて靈魂になつた後もそうなんでしょうか？」

「いきなり何なんだい。変なことを訊くね」

白露先輩は妙な顔をしました。これがほかの神官だつたら、うかつに巫師の話なんてできないところですが、先輩はそういう事は気にしない人なので、たまには助かります。

「ちょっと思いついたんですけど。巫師の靈は僕たちとは違つて、特別な場所に行つたりするんでしょうか」

普通、人は亡くなれば靈となつて黄泉の国へ行き、やがて祖靈となり神となつて子孫の家に宿り、見守ってくれるものです。里の近くに神の宿る山があれば、その元に靈が集うとも言われますが、一族と何の関係もない所に去つてしまふ、ということはありません。「さて、どうかねえ」うーん、と先輩は頭をひねりました。「そもそも今は皆、御靈もただの靈魂も一緒にたにしてるからややこしいんだが、おまえさんが言つてるのは、靈魂の話だね？ どうかなあ。巫師は靈力が強いし、悪行を重ねる者や、そのせいで殺される場合もあるから、死後にただの靈魂でなく御靈となつて祟りをなしたりする例は、確かに多いんだがね」

「でもそういう場合は、その土地に憑きますよね。あるいは、自分を殺めた一族とか」

「それだって、普通の人間もひどい死に様だったりした場合は、あり得ることだしなあ。巫師だから特別にどうこう、ってことはないと思うぞ」

「はあ……」

はて。そういう事なら、『巫師の靈場』なんてものがそもそもあるのかどうか、怪しくなるわけで……何かの間違いなんだろつか？僕が考え込んでいると、白露先輩が独り言のようにつぶやきました。

「フシ違이なら、そういう話も聞いたことがあるけどな」

「えっ？」

びっくりして僕が顔を上げると、先輩はじつとこちらを見つめていました。まるで、どうして僕がそんな事を気にするのか、読み取ろうとするみたいに。

「そもそもが巫師っていうのは、山野に『伏す』者、って意味にも通じているんだよ。その昔、朝廷に逆らつた連中のことを

「――！」

危うく叫びそうになつて、僕は慌てて声を飲み込みました。

それだ！『伏し』たちの靈が集う場所があるのなら、そこに連れて行けば葦生彦の怨靈も真理から離れてくれるかもしれない。そういう意味だつたんだ！

巫師が『伏し』の流儀を受け継ぐ人々をも意味するのであれば、神殿と対立するのもうなづけます。神殿は決して朝廷の手先ではありませんが、朝廷の勢力と共に広まつていつたのですから。

そういう、神殿の流儀を嫌う人々が、自分たちの先祖を自分たちで祀り鎮めるために、特別な場所を設えているとしても、不思議ではありません。

僕は興奮を隠せずに、身を乗り出して訊きました。

「でもそんのは随分と昔の話でしょう？ 今でも、そういう人々

が隠れている山とか、靈場とか、残っているんですか

「さてねえ。奥山深く分け入つて蟻の子を探すようなもんだろうが、どこかにはあるだろ？さ。翼、まさかおまえさん、神殿から逃げ出す算段をしてるんじゃないだろ？ね？」

「ええ？ まさか。逃げ出す理由なんかありませんよ。それはまあ、たまに先輩から逃げたくなる時もありますけど」

僕はとぼけて言い返しましたが、先輩はなおも追及してきました。

「それならなんだって、妙なことを気にするんだい」

「別に、気にしちゃいませんよ」

僕は肩を竦めて答えをはぐらかし、黙つて仕事の続きを戻りました。それきり僕がこの話を忘れたようなふりをしていると、じばらくして先輩も諦めて筆を手に取りましたが、毛先を墨につけながら、首を振つて感心したように言いました。

「大人になつたねえ、翼君も」

「それ、皮肉ですか」

「いやいや。ちょっと前までなら、巫師なんて口にするのも嫌そうな顔をしたのにな、と思つてさ」

さらりと言われ、僕はぎくつとしました。先輩は、いつたいどこまで事情を知つているんでしょう？

「僕だつて少しさは成長しますよ」

言い返しはしたものの、僕の声には勢いがありませんでした。

その後はひたすら、夕餉の時間を待ちわびていました。刻を知らせる鐘が鳴ると、僕はすぐさま机の上を片付けました。そのあまりの素早さに、先輩がまた妙な顔をしました。

「そんなに腹がへつてるのかい？」

「ええ、背中とくつきそうなんです」

僕は振り向きもせずに答え、礼儀を無視して「お先に」と書斎を飛び出しました。

食堂の外で待つていると、もつすつかり馴染みになつた、一匹の犬を連れた姿がやってきました。ほんの一月ばかりの間に、背が伸

びて逞しくなつたように見えます。小柄な僕としては、いささか妬ましいことでした。

僕を見付けると、真理は意外そうな顔をしましたが、すぐに急ぎ足でやつてきました。

「やあ、翼。何かあつたのかい？」

「フシ違いだつて」

「……え？」

「先輩がぽろつと話してくれたんです」

僕は小声で早口に説明しました。中でこんなことを話したら、誰に聞かれるか知れたものではありません。

話を聞くと、真理は難しい顔で唸りました。

「それなら、綾女さんにも伝えておかない。見当違いの所をついているだけならまだしも、知らずに本物の『伏し』と接触したら、役人に捕まるかもしねり」

「まさか。朝廷が今も落人狩りをしているなんて、聞いたことがありますよ」

「いくらなんでも心配し過ぎだ」と僕は笑ってしまったのですが、真理はあつさり「当たり前さ」といなしました。

「そんな噂が立つようじや、隠れている人も警戒して出て来やしないよ。確かに、今でも落人狩りが続いているかどうかは、俺も知らない。でも狩りをするなら、ネズミ穴の前で待ち続ける猫みたいに、静かに気配を殺しているはずだよ」

「……うーん」

僕は言い返せずにもぐもぐつぶやきました。正論ですが、そこまで疑り深いのもどうだろ、と思えたのです。真理は雷火さんたちと一緒に荒んだ生活をしてきたから、世の中に不信を抱いているのかもしれません。

真理は僕に構わず、二匹の犬を連れて建物の裏手に回りました。何をするつもりかと訝つていると、彼は短く一言、「人成れ」と言いました。

次の瞬間、そこには犬でなく、一人の若い男がひざまづいていました。

「えつ？ あ、あれ？」

僕はびっくりして、何度も目をこすりました。でもビックり、まぼろしではないようです。着物は白と黒の違いこそあれ、共に立派な神官戦士の装束でした。

「雪白、今の話を綾女さんに伝えるんだ。黒鉄、おまえはおじさんの所に」

二人は同時に、はつ、と低く答えて、素早く木立の中へと消えました。僕はただ、ほかんとして立ち尽くしていました。

「そんなに大口開けてると、虫が飛び込んでも知らないよ」

真理が笑つてからかつたので、僕は慌てて口を閉じました。

「今、いつたい何ですか？」

「あの一匹の先祖はね、今は神として祀られているんだってさ。深谷の神殿に連れて来られた母犬には何も変わったところはなかつたんだけど、あの一匹は特別。仮の姿を取らせることが出来るんだ」

「え……つと、じゃあ、正体は、犬神のお使いなんですね？ 妖じやなくて」

「妖だつたらこの境内には入れないよ。それより早く食堂に行こう」

急かされて僕は我に返り、走りだしました。腹ペコだと黙つて飛び出してきたのに、食堂にいなかつたら先輩に怪しまれてしまします。

幸いなことに先輩はまだ席についておらず、僕は言い訳を捻り出さずにはみました。片付けに手間取っているのかもしけないと 생각と、少し後ろめたくはありましたが。

しばらくして着席した先輩は、奇妙なことに何も言いませんでした。皮肉のひとつも来るだろ？と身構えていた僕は、かえつて落ち着きませんでした。

四 北へ(2)

その翌日、書庫にやがてきた真理は、もう調べることはないから、と言つて出しつ放しの帳面などを片付け始めました。

僕も少し迷つた後で、それにならいました。

「そうですね。ここにあるのは神殿の記録だから……『伏し』については、何も書かれていないだろうし。そういうのは、役所にでも行かないと駄目かな」

「何があるとしても、見せて貰えるとは思えないよ」真理が頭を振りました。「ここから北つてことは分かつていいんだし、あとは行く先々で噂を集めるしかないと思つ。神官の装束は脱いで行つた方がいいだらうなあ」

せつかく新調して貰つたけど、とつぶやいて、真理は白い着物を名残惜しげに見下ろしました。

「ここに来たばかりの頃みたいに汚くなつてたら、信用して貰えるでしようけどね。雪解けの沢で転がり回つたら、いいかもしれませんよ」

僕がにやにや笑つてからかうと、真理は渋面を向け、それから苦笑をこぼしました。

「ああ、こぎとなつたら、そのぐらいしなくちゃいけないかもしない。あまり汚いのも疑われるけど、身ぎれいにしきぎてもいけないなんて、不便だね」

そんな事を言つていると、もう今にも「それじゃあ、これで」と真理が出て行つてしまつような氣がしました。僕は自分の考へに怯み、小さく息を飲みました。

行つてしまつ。そうだ、彼はここから出て行くんだ。

分かつていたことなのに、いまさらながら、その予想は僕の胸を刺しました。雪が解けたら……それはもう遠くないのですが、真理は北へと去るのでした。僕はここに残つて、今までと同じ日を送る

だけ。

これまで僕は、神殿での暮らしに不満や疑問を感じたことはありませんでした。真理がいなくなれば、そんな以前の日々が戻つてくるだけです。そのはずです。なのに、急にそれが耐え難いことのように思われて、僕はうつむいてしました。

真理は僕の態度には気付かない様子で、棚を元通りにきちんと整理しています。僕も、のろのろと帳面を取つて、棚に戻しました。黙つて作業を続けていると、不意に真理が言いました。

「翼も一人前になつたら、どこかの神殿に派遣されるのかな」「いきなり何を言い出すんだろ？ 僕は面食らしながら、返事をしました。

「さあ……でも多分、そうなると思います。」この神殿には白露先輩も、書管主様もいらっしゃいますし、楠本から毎年何人かは見習いが入つて来ますから。あまり遠い神殿に送られなければいいんだけど

「そうか、翼は楠本の生まれなんだ」

「ええ。百姓ですけど、土地は兄一人が継ぐし、姉や妹もいるから婚礼の費用もかかるし、つていうんで、僕は神殿に入れられたんですけど」

「ふうん。それじゃあ、ここから離れたくないだろ？」「ね

そう言つた真理の口調は、どうにも曖昧なものでした。

……もしかして？ いや、でも、まさかね。ありえない。
一緒に来ないか、なんて。

期待と不安がないまぜになつて、僕は口がきけませんでした。何か言えば、砂粒ほどの可能性を潰してしまつ……そんな気がして。でも、どつちみち現実は現実でした。真理は小さく頭を振つて、独り言のように、こちらを見ずに続けました。

「俺も『しるし』を見付けて、ちゃんとした戦士になれたら、どこかの神殿に迎えて貰えるかな。深谷に帰るのは無理だろ？」「身寄りもいないから、どこでもいいんだけど」

ああ、そうか。そういう意味か。

僕はがっかりしながらも、自分を慰めるように微笑みました。

「同じ神殿に行けたらいいですね」

頭では、そっちの方が到底ありえないことは、分かっていました。僕が神殿を飛び出して一緒に行く方が、まだしもです。

でも、今の僕が彼にとつて何の役に立つでしょう？ この先、真理に必要なのは、雷火さんのような処世に長けた人や、綾女さんのようにすぐれた技と力を備えた人です。そばにいるだけしか出来ない僕の、出る幕ではありません。

本当に、僕は無力だ。

生まれて初めて、しみじみとそう思いました。

僕がいなければ先輩は仕事が終わらないんだ、とか、書部だからつて法部の人には馬鹿にされるいわれはない、とか。そんな風に自信満々に、まるで自分がひとかどの人物みたいに思い込んでいたなんて、どれだけ僕は無知だったことか。

そうと気付いてしまつと、僕はただ、言葉もなくうなだれるばかりでした。

それから間もなく梅がほころび、出立の日がやつてきました。諭佐法師や法部の人たち、それに僕と白露先輩が、表参道を下つて鳥居のところまで見送りに行きました。明主様や法主様とは、ゆうべのうちに挨拶をすませたようでした。

「長らくお世話になりました」

真理が頭を下げる、迎えに来た雷火さんと綾女さんも、僕らに向かってお辞儀をしました。法部の人たちがてんでに、気をつけて、とか、元気でな、とか言いながら、真理の肩や背中を叩きます。それから諭佐法師が進み出て、真理に旅の安全を祈念する印を切ると、ささやくようにおっしゃいました。

「そなたはもう、『しるし』を得ているよ」

「えつ」

真理が驚きに目をみはると、諭佐法師はにっこり笑みを返しました。

「早く気付いてやりなさい。そなた自身のためにも、思いがけない饅別の言葉に、真理はぽかんとしながらも、はい、とうなずきました。

それから彼は僕の方を向いて、何か言いたそうに口を開きかけ、また閉じました。僕も、何をどう言えばいいのか分からなくて、石になつたように突つ立つてゐるだけでした。

ようやく真理が、ぎこちない笑みを見せました。

「それじゃあ、翼……元氣で」

「真理も」応じた僕の声は、喉にひつかつてしましました。「目的に果たしたら、またここに寄つてください。まだ……いるかも知れないから

「うん」

真理はうなずくと、さよならのしるしに手を上げて、未練を振り切るように踵を返しました。雷火さんが横に並び、一匹の犬がそれに続きます。綾女さんも、

「それじゃまたいつか、お会いしましょう」

と言い残して背を向けました。そのまま三人とも、振り返らずに遠ざかっていきます。やがて一人、一人と見送りの者が参道を上がり、境内に戻つて行きました。けれども僕は最後までその場に残り、三人の姿が街道を北へと折れるまで、見送つていました。

ようやく僕が境内に戻ると、それを待つていたかのように、明主様が外へ出て来られました。

「無事に発たれたかね？」

明主様に問われ、僕は「はい」とうなずきました。それから、ほかに誰も聞いていないことを確かめ、思い切つて言いました。

「明主様、あの……僕、これからでも明部に入れますか」

いきなりそんな事を言い出したのに、明主様は驚いた様子もなく、いつもの穏和な口調で「もちろんだとも」とおっしゃいました。そ

れも、まるで僕がそう言い出すのを知つてらしたかのよくな表情で。実際、予想されていたのかもしれません。

葦生彦の話は、僕にとっては衝撃でした。神殿に対する気持ちも今までとは変わりましたし、神々を祀るにしても、単に豊饒や安全を祈願するだけでなく、何かほかの大事なこともあるんじゃないか、と考えるようになりました。

だから、今からでも明師になりたい。書部の仕事を軽んずるわけではないけれど、祭礼を行う力と知識も身につけたい。どこかでまた、真理のような不運な人を生み出すことのないようにしたいから。僕はそんな決意を、あまりうまくは言えませんでしたが、ぽつぽつと拙い言葉で申し上げました。明主様は何度もうなずいて、最後に僕の頭をぽんとなでて下さいました。

「では、白露にもそう言つておいで。書管主殿には、私から話しておこひつ」

「ありがとうございます！」

僕は勢いよくお礼を言つと、書部寮へと駆け込みました。

ところが。

「先輩？ 白露先輩！」

どうしたことか、先輩の姿が見当たりませんでした。慌ててあちこち探し回り、見付けたのは結局、参道の脇道、ほとんど人の通らない所でした。

先輩の後ろ姿を見付けて声をかけようとした矢先、木の陰になつていた誰かが、さつと動きました。僕がびっくりしている間に、人影は脇道を下り、つないであつた馬に飛び乗ると、風のようなくり去つてしまいました。

「……先輩？」

僕がおずおずと声をかけると、先輩がゆっくり振り向いて、おや、とおどけた声をもらしました。

「今、誰ですか？」

「見られちゃつたかね。おまえさんが気にすることじやないよ

「でも……」

なぜだか、ひどく嫌な予感がして、僕はその場に立ち去りました。

馬に乗れる人は、そろ多くありません。ある程度のお金持ちとか、貴族とか役人……

役人？ まさか。

僕はまじまじと先輩の顔を見つめました。いつもと同じはずのその顔が、まるで山猫のように思えてきたのは、真理の言葉を思い出したせいかもしれません。

（ネズミ穴の前で待ち続ける猫のよう）、静かに気配を殺しているはずだよ）

ああ、まさかそんな。

気付かぬうちに、僕はゆるゆると首を振っていました。白露先輩は哀れむよつた苦笑を浮かべて、言い訳のように肩を竦めました。

「だから、前から何度も言つてんだろ？ 役人の仕事も神官の仕事も同じだ、つて」

「……つ！」

それ以上は耐えられませんでした。

ぱつと身を翻し、表参道を駆け降りて、鳥居の下をくぐつて。道に飛び出すと、どんどん駆けて行きました。息が上がり、脇腹が燃えるように痛んで、涙があふれて。それでもまだ、僕は走り続けました。

けれどもとうとう足がもつれ、僕は危うく倒れそうになつて、立ち止まりました。

それだけ走ったのに、真理たちの姿はもう、どこにも見えません。北へ向かう道は細く曲がりくねり、暗い山の奥へと消えています。

僕は肩で大きく息をつきながら、道の真ん中にへなへなと座り込んでしまいました。

どうか、どうか無事で

祈ることしか出来ない自分が悔しくて悲しくて、いつまでも涙が

止まつませんでした。

(翼之章・終)

閑話・雪白の嘆息（前書き）

翼之章の途中で変化の真言がいきなり短くなつたことの理由。
最終章前の息抜きです。

吾は犬である。

主は真理殿、弱冠十五にして歴戦の戦士にも匹敵する実力を持つ侍士であり、いたわしい生い立ちのゆえに、並の大人よりも数段深い思慮を備えるに至つた、人間にしては稀なる逸材である。

この主に、畏れ多くも犬神様の使いに名を連ねる身として、吾が同胞の弟と共に仕えしている次第。

お仕えする、と言つても所詮は犬の身とて、何が出来るかと問わればあまり胸を張つて応じられるものではない。主と共に妖と戦い、主がおやすみの間は妖や獸の近寄らぬよう見張り、求められれば人の姿にも成る。

この変化のわざ、実は主が長い真言を唱えずとも可能なのだが、それは伏せてある。吾らは主の命に従うものであり、手前勝手に動くようでは役目を果たせぬからだ。とりわけ吾が弟などは、いささか籠たがが緩みがちゆえ、命なくして変化せずと約束させておかねば、人成りて盗み食いでもしかねない。

……もつとも、施しを受けるには人の姿よりも、このままの方が良いようだ。

今も弟は、機嫌よく尻尾を振り振り、何ぞくわえて戻ってきた様子。まつたく、主が御堂にて厳しい修練に励んでおいでだというのに、そのしもべともあるつ身が、厨ちうで残り物をねだるなど、嘆かわしい。

と、そこへ主の匂いと足音が近付いてきた。弟は分捕り品を自慢しようと、あるいは吾にも分けてやろうとしてか、口から出しかけていたが、慌ててくわえ直すとそのまま飲み込んだ。

「あれ、黒鉄、また何かいいもの貰つたんだね。しちょうがないなあ」

苦笑しながら主が鷹揚におっしゃる。まったく、主といふあの男といふこの神殿の者らといふ、總じて人間は犬に甘すぎると、吾が弟が、尻尾を振つて鼻をくんくん鳴らせばお叱りを受けぬと、心得違ひをしてしまうのもやむなし。

だが今の弟は、何やらそれどころではない様子だった。ふが、と妙な声がするので見てみれば、顎をぱくぱくさせ、前肢で必死に口の周りを搔いている。

「黒鉄！？ どうしたんだい、ちよつ……じつとして、見せるんだ！」

慌てて主が駆け寄り、顎に手をかける。だがその心遣いすら、愚弟の恐慌をひどくさせるばかりだつた。悲しいかな、神の使いと申せど吾らはやはり犬なのだ。ヒンヒンと情けない声を上げて弟はもがき暴れ、四肢で宙を搔く。

「どうしよう、誰か」

主はすっかり青ざめ、助けを求めて周囲を見回したものの、生憎、辺りには一人も姿が見えぬ。

が、それがかえつて幸いした。

キヤン、と一声吠えて、とうとう吾が愚弟は自力で変化してしまつたのだ。

主が目を真ん丸に見開かれ、絶句されている前で、吾が……ああ認めたくないものだ、これが弟とは……吾が愚弟は、便利な人の手指を口に突つ込み、

「ああ、苦しかった」

上顎に貼りついた菜つ葉を剥がした。

身も消え入る思いとは、まさにこのこと。

穴があつたら入りたい、否、むしろ穴を掘つて愚弟を埋めてしまいたい。吾が前足の間に顔を埋めて恥じ入つてゐる間に、流石は主、しゃんと氣を取り直して厳しくおっしゃつた。

「黒鉄、ちょっとそこにお座り。……自分で変化が出来ることを黙っていたのは、いいんだよ。そんなことは怒ってないし、おまえたちが勝手に変化して悪さをしていないことは、俺も分かっているからね。そうじやなくて、黒鉄、おまえは犬なんだから、食べていいいものといけないものの区別はつけなきや駄目だらう」

「こんこんと諭され、人形のまま愚弟は正座してしゅんとうなだれる。

しばらくお説教を頂戴し、哀れな愚弟は本来の姿に戻った後も、痺れた後ろ肢を引きずつて情けない格好を晒していた。もちろん、同情する気は起きないが。

「厨の人におかんきや。喉を詰まらせそうなものとか、何でもかんでも上げないでください、って」

やれやれと主はため息をつき、それから畠らを振り返つて、少し氣の毒そうにおっしゃつた。

「……黒鉄、もう大丈夫かい？」

萎れていた弟は、途端に嬉しそうに顔を上げて、わふっ、と一声。それを見るともう主は怒ることも出来なくなつた様子で、優しく微笑めた。

ああまったく、なぜにこうも人間は、愚かな犬に甘いのか。

「雪白、おまえは賢いね」

主は苦笑しながら畠の頭を撫でられたが、ちつとも誇らしくなかつた。

やれやれ。

(閑話・終)

犬に海苔とか危険ですよという話でした（笑）。

山深く、世の中から忘れ去られた土地とともに、季節の移ろいはやつてくる。

雪は日陰に小さくなり、梅が散つて、桃がほころび。日当たりの良いところでは、氣の早い桜が蕾を紅に染めている。沢に戻ってきた水鳥たちは巣作りに忙しい。

そうした春を日にする、心が晴れていいくと同時に、何やら胸の奥がざわついて落ち着かなくなる。虫や獸たちが動き始め、草木は芽吹き花開くというのに、私だけは季節を知らぬかのように、何ひとつ変わらぬ毎日。岩にへばりつく苔になつた氣分だ。

そんな事を考えると、ため息がこぼれた。

憂鬱になるのは、この深い霧のせいだらう。薄暗い番小屋の中ではじつとうずくまり、小さな節穴から白一色の外を見ているだけでは、誰でも氣が滅入る。

だいたい、こんな日によそ者が来ることなど……

……？ 何か、物音が聞こえたような。

そうだ、氣のせいではない。足音が近づいてくる。走つてこのか？ この霧の中を、足元も怪しかろうに。

足音は二、三人。何か獸もいるようだ。小屋のそばにある椎の木に気が付いたらしい。道を外れて土手を降り、木の背後に回り込むのが分かる。誰かに追われて、身を隠そうとしているのだろうか。私はじつと耳を澄ませた。

「つたぐ、しつこい奴だ。融通のきかねえ小役人が、鬱陶しつたらありやしねえ」

「まだついて来てる？」

「ああ。いまいましいことにな。大楠の連中め、覚えてやがれ。だから神官つて奴は嫌いなんだ。それ以上に朝廷の連中は反吐が出るほど大嫌いだがな、くそつたれ！」

「ふむ？ 役人に追われているのか。ならば、罪人だろうか。

「おじさんが好きなものつて、この世にあるの？」

「つるせえな」

「うるさいのはあんただよ、お黙り。見付かっちゃじやないか」
女も一緒なのか。はて、妙な取り合わせの罪人どもだな。しかし朝廷の敵なら、助けてやらずばなるまい。

私は吹き矢を用意して、外の様子を窺つた。番小屋、と言つたが、実はこの小屋、つくりは水神の社を装つてゐる。扉の下の方にはひとつふたつ節穴が空いており、腹ばいになればちょうど、訪れる者の足が見えるというわけだ。

追われる者たちが息をひそめ、辺りにじつとりと重い静寂が降りる。やがて、不安げな足音が一組、こそそと近づいてきた。

「ええい、見失つたか。この先は行き止まりだし、どこかそこいらに身を潜めておるに相違ないが、この霧ではつかつに道を外れることも出来ん。くそいまいまい」

「霧に紛れて我々をやりすごし、元来た方へ戻つたといふことも考えられるぞ」

「嫌なことを言うな。足跡は確かにこちらへ続いていた。ちえつ、まつたく、なんて霧だ。水神なんぞお天道様の力で干からびちまえ」
ぶつくさ言いながら、二人の役人はそこいらを及び腰で調べている。さもありなん、社の向かいの沢は落ちても濡れるだけですが、こちら側は急な土手、しかも下は沼地だ。足を踏み外せば、ただではすまい。

だから早々に帰るが良いぞ、役人ども。

私は吹き矢に小さな棘を込めて構え、狙いを定めた。そして、フツと一息。

「いてえッ！」

口の悪い方が飛び上がった。いい氣味だ。

「どうした？」

「何かに刺された。畜生」

「この辺りはムカデや蛇が多いからな。大事になつてはいかん。こ
こは諦めて戻ろう」

「仕方あるまい。まつたく、なんて厄日だ」

毒づきながらも足が心配らしく、役人はそそくさと帰つて行つた。
よしよし。

用心のため、しばらく待つてから私は身を起こした。同時に、外
でもじそごそと身動きする氣配がする。

「やれやれ、助かつた。水神様だぜ」

男が言つた。私は思わず笑いそうになつて、唇を引き結ぶ。調子
のいい奴だ。

私はそつと床板を外し、地べたに下りた。出入りする姿を見られ
ぬよう、社の足元は板で完全に囲まれている。その隙間に目を当て、
外を覗いた。霧の中にぼんやりと三つの人影が見える。獸と思つた
のは犬らしい。こちらにはまだ気付いておらぬようだが……。

私は声色を使い、ささやくよう呼びかけた。

「なんじら、朝廷に仇なす者どもか」

途端に三人とも、ぎょっとなつてこちらを振り返つた。一匹の犬
が前に躍り出て、用心深くこちらを睨む。あれはちと手強そうだ。
正体を確かめるまで、今しばらく待つべきだったかも知れん。

三人は顔を見合させ、何やらこそこそと相談をした。三人？ い
や、もうひとつ妙な氣配がしたようだが、犬のほかにも何ぞ連れて
おるのだろうか。

ややあつて女が答えた。

「あたしらはそのつもりはないんだけど、向こうが勝手に追つて來
るのさ。なるだけ誰にも迷惑はかけたくないんだけどねえ」

「何ゆえに追われておるのだ？」

「ちょっとわけありでね、古い巫師の技を受け継ぐ隠れ里を探しているのさ。それで役人どもは、あたしらがやましいことをたくさんでいるんじゃないか、って疑心暗鬼になつていいんだうう。何でことはない、ごく身内の用件なんだけだね」

女はすらすらと話した。なぜこうも簡単にしゃべるのだろう？私の声を本当に水神だと思つていても、嘘を並べてこの場を逃れようとしているのだろうか。

私が説つていると、女は苦笑をこぼして言った。

「そんなわけなんだけど、良かつたら案内しておくれでないかい、お嬢さん」

「……！」

なんと。向こうは私の姿が見えているのか？思わず私は隙間から目を離し、ぐるりを確かめた。いや、どの板も外れてはいない。

「あんたたちに仇なすつもりはないし、用が済んだらすぐにも出て行くよ。駄目かねえ」

女が頼み込む。いかにも怪しい連中だが、しかし、このままここに隠れていたとて、諦めて去つてくれるかどうか。えい、ままで。私は腹をくくると、板をずらして外に出た。

「なぜ私が見えた？」

「見えちゃあいないよ。あたしには便利な相棒がいるもんでね。ああそうそ、あたしは綾女、巫師だよ。こつちは流れ者の雷火、それと……あんたたちに用があるのはこの子。真理つて名前さね」

順に紹介され、私は彼らを初めてじっくり眺めた。

綾女という女は、巫師というのが本当なら、信用出来るだろ。真理は生真面目そうな少年で、表情に思慮深さが見て取れる。雷火という男も、皮肉っぽい人相ではあるが、人を騙そうとする小狡さは感じられない。

私はうなずくと、「ついて来い」とだけ言つて歩きだした。土手に刻まれた小道は、ほとんど所在が分からぬほど細い。いつまでも立ち話をしていられる場所ではないし、万一あの役人どもが戻つ

てきたら厄介だ。

「見失うでないぞ。道しるべなどないし、沼に落ちたら助けようがないからな」

土手を降り、生い茂る葦をかきわけ、崖の下に出る。水を含んだ苔に覆われた岩が、腰高のあたりで深くえぐれていが、その中へ潜り込めば、実は岩陰に細い抜け道がある。

横這いになつて岩と岩の間を抜けると、よつやく少し開けた木立に出るが、やはり取り立てて目印になるものはない。里の者しか知らない、道なき道だ。

「ここからは目隠しをしろ。互いに手をつないでおれば、足を踏み外して沼地に落ちたりする心配はないからな。そら、これを使え」袂に入れておいた細い手拭を渡すと、三人は不安そうではあつたもの、素直に従つた。

「用意がいいんだな」

雷火が手拭を結びながら言った。答える必要は感じなかつたので黙つていたが、これも見張り番の役目だ。万一、何者かを里に入れ必要があれば、目隠しをさせて案内せねばならない。……犬はまあ、仕方あるまいが。

三人が手をつないだのを確かめると、私は真理の手を引いて、ゆっくり歩きだした。

木々の間を縫つて斜面を登り、岩を越え、溝地を横切つて別の崖に突き当たる。そこまで来て私は立ち止まり、振り向いた。

「目隠しを取つて良いぞ。しかしこの崖は、犬には越えられぬな。どうする」

愕然と頭をのけぞらせた三人から、すぐには応えがなかつた。やあつて雷火が、嘘だろう、と言いたげに情けない声を出した。

「おいおい……まさか、ここを登るのかよ」

「案ずるな。見えにくいが、手掛かり足掛けりはあるのだ。しかし犬の足ではな。誰か背負つて登るか?」

「…………」

雷火と真理は顔を見合させ、やれやれと頭を振った。

「仕方ない。雪白、黒鉄。人成れ」

真理が命じた途端、一匹の犬はその姿を変えた。……なんとまあ。

しかもただの人ではない、神官戦士の装束ではないか。

「おぬし、さては法師か」

私が驚いてただすと、真理は首を振った。

「厳密には法師じゃない。位を授かっていないから」

そこで彼は顔を上げ、まっすぐに私を見据えた。

「神官か、という意味で訊いたのなら、確かにその通りだよ。でも、巫師に対する敵意はないし、朝廷の手先でもない。一身上の理由で、力を借りたいんだ」

ふむ。嘘を言つておるようには見えぬが、このまま連れて行つても良いものかどうか。一匹の犬は、元のままで手強そうだつたが、人の姿をとつた今では、相当な手練であるうと見える。里を荒らすつもりであれば、この一匹だけで事足りるやも知れん。

「嘘じやあないよ」

考えを読んだように、綾女が口を挟んだ。私が問うまなざしを向けると、綾女は少しためらつてから、思い切つて言つた。

「里の人たちには当面、内証にしてほしいんだけどね。この子にはちと、厄介な御靈が憑いているのさ。神殿のやり方では清められないうなんで、あんたたちの靈場でお弔いをしたいんだよ」

「そのようには見えぬが」

私は真理に目を戻し、小首を傾げた。見たところ、御靈の姿が肩の後ろに揺らいでいるでもないし、憑き物の悪い気配も感じられない。私にはあまり靈力はないが、しかしそれほど厄介な御靈ともなれば、なにがしか感じ取れそうなものだ。

疑いの目を向けた私に、真理は「今のところはね」と答えた。

「後からやつて来るんだよ。つかず離れず、姿も見えたり見えなかつたりでね。でも、俺が……我を忘れるほど怒つたりすると、あつと言つ間にすぐそばに現れて、禍をなすんだ。君たちが朝廷の敵な

ら、恐れる必要はないかも知れないと

なるほどな。かつて朝廷に討たれた者の御靈が憑いたわけか。

「首塚でも壊したか？」

何げなく言つたのが、図星だつたらしい。真理はびくくりと身を震わせ、綾女と雷火が顔をこわばらせた。うむ、失言だつたか。

「ああ、すまぬ。何しろよそ者と話すことなど、久しくなかつたものでな。口のきき方がよう分からんのだ。ともあれ、そういう事情であれば致し方あるまいな。ついで来い。手掛かりをよく見ておけ」

それだけ言つと、私は崖を登り始めた。慣れた者にはさしたる苦労もないが、後から来る者は難儀しているようだ。てつぺんから見下ろすと、崖の下で綾女が雪白と何やら相談していると見るや、雪白はひょいと綾女を背負い、軽々と跳躍した。

とん、とん、と数回、岩を蹴つただけで、もう上に到着する。綾女は雪白の背から降りると、『ご苦労さん、などと労つた。開いた口がふさがらぬ、とはこの事だ。

後からえつちらおつちら登つてきた雷火が険悪に唸つたのも、無理はない。

「この……てめ、一人だけ、樂しやがつて」

「何をお言いだい、了見の狭い男だね。か弱い女にこの崖を登れつてのかい？」

「この小娘は登つたじやねえか」

「不躾なこと言つもんじやないよ、年頃のお嬢さんをつかまえて小娘なんぞと……そう言えれば、あんたの名前を聞いていなかつたね」いきなり話を振られて驚き、私はぽろりと答えてしまつた。

「ハルヒ。春の太陽だ」

「いい名前だね」

綾女はにっこり笑つたが、どちらかと言つと、男どもの方が自然な反応だろう。何とも言い難い顔で、どう思つ、と相談するかのように目配せを交わしている。

「世辞は良い。」この名が似合わぬのは自分で良く分かつてある。どうせ私は愛想がない。単に、春に生まれたというだけのことだ」亡き母にも、耳にたこが出来るほど言われたものだ。女は愛嬌がなくてはいけない、笑顔が福を呼ぶのだ、と。しかし、持つて生まれた性分というのは、仕方がない。

「自分をそんな風に言うもんじやないよ」綾女が言った。「女は皆、その身に花を宿しているのさ。あんただつて、今はまだ眠つているだけで、時が来ればその名の通りに春爛漫となるさね」

「そんな事はどうでも良い」

まったく、なぜよそ者にまで、要らぬお節介を焼かれねばならんのだ。

私は真理と雷火の息が落ち着いたのを見計らい、さつさと歩きだした。

一 隠れ里（2）

里に入ると、何はともあれ、長である佐伯^{サハキ}の本家へ三人を連れて行つた。

道々、里の者がことごとく振り返つてこちらを見つめた。じきに噂が飛び交つて皆に知れるだろう。よそ者が里に入るのは、私が物心ついて以来初めてのことだから、皆が珍しがるのも当然だ。

「豊かな里だね。いい場所だ」

真理が辺りを見回してそんな感想を述べた。その面に浮かぶ微笑が懐かしそうに見えたのは、気のせいだろうか。

「我々はここを新聞^{あいりん}と呼んでいる。山奥の谷ではあるが、ここを拓いたご先祖たちの苦労の甲斐あって、暮らし向きは豊かだ」

簡単に説明して、私も改めて里を眺めた。谷間ではあるが、田を作るに良い平地もいくらかあるし、斜面には田畠^{たばた}が棚のように連なり、一部には果樹が植えられている。梅や桃はまだ花盛りだ。低地には細い川が流れ、日を照り返して白銀のようにきらめいている。変化のない退屈な土地ではあるが、やはりこうして見ると愛着を感じるものだ。

もつとも、霧が立ち込めた時などは、ご先祖の恨みつらみが濶んでいるようで、息苦しくもなるのだが……。

その、先祖代々受け継がれてきた重苦しさは、本家の屋敷が源であるかに思われた。立派な構えの屋敷は古めかしいだけでなく、門をくぐると空気がねつとりと重くなつたような、何とも言えない気分に襲われる。毎度のことながら、眉をひそめずにはいられない。三人のよそ者もそれを感じ取つたらしく、不安げにそこらを見回した。

「歓迎されるとは思えねえが、こいつとしても早々に退散してえ雰囲気だな」

ぼそりと雷火がつぶやいた。真理はまるで吐き氣を堪えているか

のよつな顔で、苦しげにうめぐ。

「なんだか…… いっぱいいるね。大きいのもいるけど…… 細かいのが集まつて、区別がつかなくなつていてる感じだ。全体の氣配は『あれ』に似てる……」

庭にいた下男が来客を告げたらしく、すぐに佐伯の若様みずから迎えに出てこられた。いつ見ても青白いお顔に、瘤の強そうな微笑を浮かべておいでだ。

「春陽殿、ようこそ参られた」

背後でこそこそと、「氣取つてやがる」とかなんとかささやき交わすのが聞こえ、若様が目付きを険しくした。私は振り返り、きつい口調で咎めた。

「おぬしら外の者には分からぬだらうが、この方はそもそものはじめに谷を拓いた佐伯家の裔すえ、谷の者にとつては大事な御方だ。無礼を申すでない」

既に旦那様もなく、奥方様も臥せりがちの今では、ただ一人の跡取りでいらっしゃるのだ。しかしそうと言つても、よそ者にはありがたみが分からぬらしかつた。

「こりや、どうも失敬」

雷火があどけてひよこりと頭を下げる。真理と綾女は、それよりは眞面目に、きちんと腰を折つてお辞儀をしたが、若様の機嫌は直らなかつた。

「客人方。よほどの事情があればこそ、春陽殿が案内されたのであろうが、この里においては我らに従つてもらうだ。参れ」

尊大に命じて、こちらが上がり框かまちに足を乗せもせぬ間に奥へ入る。やれやれ。

私が三人を連れて客間へ行くと、既に朱香様ショコラがお待ちかねだつた。若様の祖母君で、実質的に里の事々を仕切つてているのは、この方だ。里には他にも何人かの巫師がいるが、祭事を執り行えるのは、今のところ朱香様おひとり。

「おお、春陽殿、息災で何よりじゃの。案内」苦勞であつた。そな

たは下がつて、休んでおるが良い。あまり外の者にかかり合つて、間違いがあつてはいかんでな」

穏やかな話しぶりだが、朱香様の言葉には力がある。逆らえず、私は頭を下げる退出するよりほか、なかつた。しかし休んでいろと言われたからには、後でもなお召しがあるに違いない。いつも通り茶の間へ行くと、女中が麦湯を用意してくれた。

さて、あのよそ者は何と言つて朱香様を説くつもりだろう。事情を伏せておつたのでは話も進まぬであろうし、代償に差し出す金品でも隠し持つてあるのだろうか。

それにしても、彼らが役人に追われていたとことは、いまだ朝廷が我らを探しているわけか。これは驚いた。

里の年寄りたちは皆、口を揃えて言つ。我らは虜げられた者、故郷を追われた者なのだ、と。

しかし私にとつては、ここが生まれ故郷だ。彼らとて同じであるに、よくも見知らぬ土地を恋しがつていられるものだと思つていたが……朝廷の方でも、我らを忘れておらなんだとはな。

つらつらとあれこれ思い巡らせていると、存外早くに、お召しがあつた。

「春陽殿、使い立てして申し訳ないが、客人が里を見て回りたいとおっしゃるのでな。一通り案内して、夕餉までには離れにお戻り頂くようにしておくれ」

朱香様は相変わらずにこにこしていらした。どういう話になつたのかは分からぬが、三人のよそ者は客人として迎えられることになつたようだ。

言われた通り、三人を連れて外へ出ると、肩の荷が降りたようにほつと息がもれた。雷火は安堵を隠しもせず、盛大に伸びをする。

「上首尾だつたようだな」

私が漠然と問いかけると、雷火は口をひん曲げた。

「恐れ入つたぜ。あの婆さん、一目見るなり真理に憑いてる奴の正体まで言い当てやがつた。まあ、おかげでくだくだ説明せずにすん

だわけだが、ひやつとしたぜ」「

「なんという不敬な物言いだ。いかによそ者とは言え、度が過ぎるぞ。おぬしの性分であらうが、それでは里の者の反感を買つだけだ。少しは控えよ」「

「『助言、いたみります』」

厭味たらしく答えて、雷火はフンと鼻を鳴らした。まったく、何なのだこの男は。

私がため息をつくと、横で真理が苦笑した。

「朱香様が温厚で助かつたよ。でも結局、うまくごまかされたな。本当に御靈を鎮めて貰えるのかどうか言質を取れなかつたし、靈場もただ『お山』としか教えて貰えなかつた。まあ、いきなりは無理だろうと思つたけど」

「そりやあね」綾女が相槌を打つた。「葬儀なんて、おいそれとよそ者が割り込めるもんじやあないし、靈場だつて、いつでも誰でもほいほい入れるわけじやないだろつよ。ぼちぼち信用を得て、里の衆がお山に入る時にも招いて貰うしかないさね」

「誰か人死にが出来りや、手つ取り早いぜ」

雷火の言葉に、私だけでなく真理と綾女までが、揃つて顔をしかめた。はからずも同じ気分を共有してしまい、私はなんとなくばつが悪くなつて、咳払いをする。

「おぬしら、よくこの男に我慢してあるな」

「まあ、これも縁だしね」

綾女が諦めた風情で言い、それからこりつと笑顔になつて振り向いた。

「縁と言えば、お春ちゃん、あの若様の許婚なんだつて?」

……『お春ちゃん』?

胡散臭げな半眼になつた私には構わず、綾女はにこにこしている。げに恐るべし、よそ者の鈍感さ。いや、それとも、こんな事にいちいち戸惑つこちらが、土臭い田舎者といつことなのだろうか。私は自分にため息をついてから、やれやれと返事をした。

「朱香様は、そんな事まで話されたのか」「ちょっとした話の流れでね」

「何を思い出したのか、綾女はくすくす笑っている。横で真理が顔

を赤らめた。何なのだ、いつたい？ 私が不審げにしていると、雷火がにやけた顔で言つた。

「あの若様、真理に許婚を取られやしねえかとピリピリしてやがつたのむ。まあ奴さんの気持ちも分かるね。あの青瓢箪よりや、真理の方がよっぽどか男前だからな。心配しなくても真理はまだ若すぎる、つて言つてやつたが、しかし最後まで、おつかねえ顔で睨んでやがつたなあ」

「ぶるる、とふざけて身震いし、雷火は無遠慮にげらげら笑つた。

「……若様が？」

今度は私が赤面する番だつた。氣恥ずかしいと言つよつは、困惑のゆえに、だつたが。若様はあまり情をあらわす方ではないから、許婚とは言つても、これまで特に大切にされたというようなことはない。だが……。

「おやおや、可愛らしいこと

綾女にからかわれ、私はムツとしてしかめ面を作つた。

「よそ者があれこれクチバシを挟むでない」

「おや、ごめんよ。そんなに照れなくてもいいじゃないか。でもねえ、お春ちゃん、ここだけの話……」

と、綾女は声をぐつとひそめ、耳打ちした。

「女同士だから言つんだけど、あんたはあの若様でいいのかい？ あんまり丈夫じゃなさそだし、癪の強そうな様子じやないか」

「おぬしさつくづくお節介だな」

私は呆れてそう応じた。里の者でもなからうに、他人の事情を嗅ぎ回つて、何のつもりやら。だいたい、良いも悪いもあつたものではない。この里では朱香様の言葉がすべて。本家の血筋を残すために、分家の私を嫁に迎えよと仰せられたのなら、それで決まりだ。

「私に取り入つても、里の秘密を明かしはせぬぞ」

「誰がそんな姑息なこと、たくらむもんかね。あたしはただ……」

綾女は憤慨したが、不意に言葉を切った。そして、むつりと不機嫌に黙り込む。その肩で何かが動いたように見えたが、見定められぬ間に消えた。

なんとなく気詰まりな雰囲気のまま、私は彼らを連れて里へと出た。

見るほどものなど何もなかろうと思つたが、真理はそれでも嬉しいらしく、足取りが軽やかだ。その横顔に浮かぶ笑みの優しさに、気付けば私は何度もそちらへ目をやつてしまつていた。

里の衆も同じらしく、最初は警戒してこちらを睨んだり、じつとりしたまなざしを向けたりするのだが、じきにぽかんとした無防備な顔になつていく。

しかしそれは、雷火が言つように真理が『男前』だから、というわけではないだろう。田畠や山や小道や、我々にとつてはありきたりのものに、真理は温かなまなざしを注いでいる。よそ者であるにもかかわらず、そのことが驚きであり、同時にまた……喜ばしい誉れのように思われたのだ。

いつの間にか私の歩みは遅れ、一匹の犬と真理が先頭に立つていた。だが、不思議とそれを奇妙には思わなかつた。なぜかは知らないが、真理はこの谷を愛でている。その邪魔をする気にはなれず、私は黙つて、彼の足の向くままに従つて行つた。

一通り里を端から端まで歩くと、よつやく真理は足を止めた。

「この里が気に入ったか?」

私が声をかけると、真理はハッと夢から覚めたように振り返つた。そして、少し恥ずかしそうにつなづいた。

「うん。俺が生まれ育つた深谷とよく似てるんだ
なるほど。ふるさと、というわけか。

「私はここを離れたことがない。だから郷愁といつものさよくなぬのだが、やはり故郷は恋しいものか」

「そうだね。懐かしいばかりでもないけど、やつぱり、自分の一部

だから、

伏し目がちにそつと言つて、眞理は寂しげに微笑んだ。

自分の一部、か。してみると私にも、この新聞の里そのものが、すっかり染み込んでいるのかも知れない。どこに行こうとも、捨てたり逃げたり出来るものではないのだろう。

そんな事を考へてゐると、後ろで雷火がつぶやいた。

「生まれ故郷つてもんは、たとえ一度と戻れなくとも、自分の中では消えねえもんだ。たまに厄介でもあるが……だからこそ、どこに行つても生きていけるのかもな」

おや、存外まともな事を言つるものだ。私は振り向いて顔を見てやりたくなつたが、思い直してあらぬ方を見やつた。

外の世界をさすらつてきたこの者らには、それぞれに事情も、複雑な思いもあるのだろう。私にはそれを想像することも難しいが。私たちはそのままじばりへ、三三様の沈黙の中で佇んでいた。

三人のよそ者は、性急に目的を達しようとはせず、まずは綾女が言つところの『信用を得る』ことを第一と決めたようだつた。

綾女は巫師であるから、朱香様の教えを請う形で、村人のために働いた。病や怪我を癒したり、新しい鋤や鍬が長持ちするようまじないをかけたり、といつたことだ。不思議とよく当たる占いで、村人の相談にも乗つた。そうして綾女は順調に村人の心をつかみながらも、朱香様の威光をないがしろにすることのないよう、気を遣つてゐるようだつた。

一方で雷火は、悪さをする妖がおらぬから、仕方なく力仕事全般に手を貸した。最初はぶつぶつ不平を言つていたが、やつてみると性に合つたらしく、壊れた水車を直したり、田畠を耕したりと、存外まめに働いた。

真理も雷火と共に細々した仕事をこなしたが、二匹の犬がいることから、里の周縁を見回ることが多かつた。畑の作物を狙う獣を寄せ付けないためだ。神官であることを知られぬよう、法術は決して使わなかつた。

里の者は彼らの目的や身の上について、朱香様から何も聞かされず、好き勝手にあれこれと憶測していた。私に真偽をただしに来る者もいたが、もちろん、明かしはしなかつた。

何日かすると、朱香様は私を呼んで、真理から田を離さぬよう仰せになつた。

「あの者が里に仇なすとお考えですか？」

さすがに私は訝つて問つた。それならば、早々に追い出してしまえば良いようなものを。

だが朱香様は、鷹揚に笑つておつしゃつた。

「やうではなこよ。ただ、早々に里を去る氣を起されては困るのじゃ。あの者らをなるだけ長く留め置き、役立つことはすべて、学び取らねばならぬのでな」

「あ……なるほど」

閉ざされたこの里にあつては、外の世界の動向や技術を知る機会がほとんどない。時には外の者から新たな知識と技を得なければ、いかに天険に守られた里とは言え、危難を防ぐことは難しい。

「それで、あの者らを歓迎なさつたのですね」

納得した私に、朱香様は満足げにうなずかれた。

「さよう。そなたならば歳も近いし、何より女子ゆえ、真理も氣を許すじやう。あの者が我らに進んで協力する氣になるよつ、せいぜい親しゅうなることじや。良いな?」

「……はい」

その仰りようじにさかが引っかかりはしたもの、朱香様直々のお言葉とあらば、おろそかにはできない。以来私は、畠仕事の合間を縫つて真理について回ることにした。真理が他の村人と共にいる間は良いが、里の外れに出る時は、必ず後を追つた。

しかし数日経つと、さすがに真理も、私の振る舞いを不自然だと感じたらしい。苦笑まじりに言った。

「迷子になると心配されているのかな、それとも出て行つて朝廷の兵を手引きすると思われているのかな」

後ろめたさがなかつたわけではない。だが、正直に話すなどといふのは論外だつた。私はあれこれと言い訳を考えたが、真理は返事を求めているわけではなかつたようで、いつもと変わらず見回りを始めた。

後についてしばらく歩き、私は不意に答えを見つけた。朱香様より仰せつかつたから、だけではない。私自身、このつとめを進んで果たしたいと思っていたのだ。

「……私は外の世界を知りたいのだ」

つぶやきはごく小声だったが、真理は耳聴く聞き付け、足を止め

て振り返つた。一匹の犬は少し先を嗅ぎ回つてゐる。辺りには人の姿もない。

私はまっすぐに真理の目を見て、静かに、しかしあつまつと言つた。

「私はこの里で生まれ、育つた。外の世界のことは、代々の口伝でしか知らない。朝廷という敵のことや、神殿の暴虐、見たこともないはるかな故郷のこと。だがそれらは……私にとつては、眞偽の定かでない又聞きの話にすぎない。だから、おぬしの口から　直に外の世界を旅してきた者の口から、本当の話を聞きたいのだ」

しゃべり出すと、止まらなかつた。こんな事を言つべきではない、不埒な考えだ、と頭の片隅で警告が瞬くのだが、まるで堰を切つたよつに言葉があふれ続ける。

「先祖たちの恨みを通さば、歪んだ世界しか見られぬ。私は水神の社で見張りをすることが多いが、あの社に時折やつてくる外の村人は、実に素朴だ。我らの存在など夢にも思わぬだらうし、恨みつらみとは無縁に見えて、それが時々羨ましうてならぬ」

意図せず、涙がこぼれた。そうだ、私はあの者らが羨ましかつた。何も知らず、社へ祭りの赤飯や芋団子などを供えに来て、手を合わせて祈る姿。そこには、敵を滅ぼしてくれとの願いも、いつか仇を討てるようにとの怨念もない。私もあちら側に生まれたかった、と望みさえ。

これ以上まくし立てては、言つてはならぬことまで言つてしまいそうで、私は唇をぎゅっと噛んで堪えた。どうにか嗚咽をおさえ込み、私は涙を拭つて言つた。

「……すまない。呆れただらうな、会つて間もないよそ者に、こんなことを」

真理は驚いた様子ではあつたが、私の言葉に笑みをこぼした。

「会つて間もないよそ者だからこそ、言える事もあるよ」

「そうか。それも道理だな」

それだけ言って、私はまた、目頭を押さえた。

私が落ち着くまで、真理はじっと待っていてくれた。それから、私がもう言いたいだけ言つてしまつたと判断したらしく、何げない風情で口を開いた。

「外の世界と言つても、君が思うほど羨ましいものじゃないよ。俺が生まれ育つた谷も、ここほどじゃないけどやつぱり閉鎖的で……なんていうか、凝り固まつてるところはあつたし。ちょっと大きな里や町に出ると、大勢の人の欲ばかりが渦巻いているように感じられて、息苦しいところが多かつた。そりや、人が多いところには善い人も当然いるんだろうけど、小さな星明りみたいなもので……町が賑やかに華やかになるほど、その眩しさにかき消されてしまうんだ。そうでなければ、強欲な人間の吐き出す黒い雲が、空を覆つてしまふし」

「そして道に迷う者がますます増える、というわけか。外の世界も、住み良いところばかりではないのだな」

「うん。俺自身もいろんな『雲』に巻き込まれたよ。間違つた方法に頼り、よそ者の命を奪つてでも、豊かな暮らしを守ろうとする村とか。不正を働き大勢の人を欺いてまで、お金にしがみつく人もいた。そんな人に取り入つて甘い汁を吸おうとする、ならず者たちも。その度につくづく嫌になつて、憎しみや失望が背中にずつしりのしかかる気分がした。それこそ、背後の怨霊みたいにね」

「…………」

「それでもたまには善い人に会えるから、望みを持てるし、俺も……誰かの希望になれるようにと思つんだ」

「おぬしは強いのだな」

思いがけず厳しい世界のありようを聞かされ、私はうつむいてしまつた。

「私などでは、そんなところで生きては行けまいな」

「そこまで悲觀しなくてもいいよ」真理が笑つた。「俺が特別、運が悪いのかも知れないし、穏やかで平和な暮らしを営んでいる村も、きつとあるはずだよ」

そう言つてから、彼はふいにおどけた顔を見せた。

「もつとも、その言葉遣いをなんとかしないと、奇異の田で見られるかもしないけど。君の話し方は特別なんだね。実を言つと最初、この里の人は皆そなのかと思って、身構えてたんだ」

真理が笑い、私もつられて苦笑した。

「そうではない。佐伯の一族だけだ。私は分家だが、それでも里の中では特別な立場なのだと教え込まれて育つた」

「ふうん……ちょっと妙だね」

小首を傾げ、真理は興味深げにつぶやいた。何が、と私が目顔で問うと、彼は屋敷の方をちらつと見て、続けた。

「ここに来る前、大楠の神殿でいろいろ調べ物をしたんだけど、その時に『佐伯』に関する記述も見かけたんだ。そもそもが『佐伯』っていうのは、朝廷側から見た言葉なんだよ。元々の意味は『騒ぐこと』で、山野に住んで盜賊まがいの生活をする者たちを、佐伯とか国巣くずとか呼んだ。今はもう使わない言葉だけだね。君たちの先祖がいつ、どこから、この谷に逃げ込むことになったのか知らないけど、最初から佐伯姓だつたとしたら、妙な感じだと思つてさ」

「ふむ、それは初耳だ」私は驚いて目をしばたいた。「確かに妙だな。朝廷側から勝手に佐伯などと呼ばれたのなら、首長の一族がそんな姓を用いるはずはない。となれば……朝廷の目をくらますために、本来の姓を隠して自ら佐伯と称したのではないか？ 分家の我が家にも言い伝えられている姓があるが、決してそれを名乗ることはせぬぞ」

「そうかな」

真理は、まだ何かが引っ掛かる、という風情で眉を寄せていたが、じきに頭を振つて歩きだした。

「まあいいや。ところで、春陽は例のお山には登つたことがあるのかい？」

「無論だ。しかし教えぬぞ。朱香様の許しがなくてはな」

「分かつてゐるよ」真理は笑つた。「それに教えてもらつたとしても、

案内なしで登るほど向こう見ずじやない。作法やしきたりを無視して、御靈の怒りを買いたくないからね。この辺りの山はどれも強いためが感じられるし、祓いに来て逆に祟られちゃ、お笑い草だ」

「分別があるのでな。ならば障りのないことだけでも話してやるつ。

この辺りには、靈場である八千穂岳のほかにも神の宿る山が多い。たとえば、月夜に頂へ登れば变若水をちみずが汲める、という山もある」

「ヲチミズつて……月の神が持っているつていう、若返りの靈水?」

「そうだ。一口飲めばどんな傷も病もたちどころに癒え、老いた者は若返る」

私は眞面目に言つたのだが、真理は冗談だと思つたらしい。愉快に問うてきた。

「誰か飲んだ人がいるのかい」

「言い伝えだがな。我らの先祖がここにたどり着いた時、誰もが数多の傷を負い、疲れ果てていた。ちょうど煌々と明るい月夜であったが、小さな山の頂にひときわ明るい光がひとすじ、降りていたそうだ。どうにか歩ける男が一人、互いを支え合いつつ登つてみると、光の下に泉が湧いていた。あまりにその水が美味そうなので、掌にすくつて飲んでみると、たちまち体に力が満ちてきたという

話す内に、真理は笑いをひつこめ、真剣に聞き入つてきた。そこで私は、母から聞いた話を思い出しながら、より詳しく語つた。

「二人の内の一人は、皆さんも飲ませようと両手で水をすくつた。だがもう一人は欲を出し、泉に顔を突つ込んで腹いっぱい飲んだ。そのあさましさに月神がお怒りになり、泉は消えてしまったそうだ。罰当たりな男は飲んだ分だけどんどん若返つていき、幼子から赤ん坊にまでなつて、とうとう最後には一滴の露と化した。残された男は、両手に水を湛えたまま、急いで山を駆け降りた。不思議なことに、その水は決して手からこぼれず、皆が一口ずつ飲むまで尽きることがなかつたそうだ」

「……その男が、佐伯の『先祖つてわけだ』

「さよう。だから、里の者は皆、佐伯の一族に恩がある。元々皆を

率いてきたのも、佐伯の者だというしな。泉があつた場所には、祠を建てて月神を祀つてある。見事な桜の樹があつて、花の季節には良いものだぞ」

「へえ。それは見てみたいな

真理の声が無邪氣だつたので、私は思わず「良いとも」と応じそ
うになり、慌てて言葉を飲み込んだ。

「うん、まあ、あの山ならよそ者が入つても支障はあるまいが……
朱香様におたずねしてからだな。お許しがあれば、案内しよう
「楽しみにしてるよ。さて、そろそろ戻ろう。雪白、黒鉄！」

真理が呼んだが、一匹の犬はなぜか、戻つてこなかつた。それど
ころか、里の外れへと続く道を、どんどん遠ざかっていく。

「雪白、黒鉄！ 戻れ！」

困惑し、真理が大声を上げる。一匹は立ち止まり、くるりとこちらを向いたが、その場に踏ん張つて動こじうとしない。
「おかしいな、どうしたんだろう？」

「何か見付けたのではないか？」

二人して首をひねつていると、背後から羽ばたきの音が近づき、
真つ黒な鳥がバサッと頭の上を飛び越えていった。あれは何だ？
鴉にしては大きすぎる。

「闇鷺だ」首を反らせて真理が言つた。「綾女さんが何か……」

言いかけたところで、当の本人が駆けてきた。雷火も一緒だ。

「何かあつたの？」

真理が顔色を変えて問う。返事は「さあ」という、何とも頼りないものだつた。

「闇鷺が何か見付けたみたいでね。あたしを呼びに来たんだよ。里の外には出て行かないように命じてあるから、ぎりぎり境の辺りなんじやないかね」

「まさか、役人がここを見付けたんじやないよね」

「だったら警鐘が打ち鳴らされるはずだ」

私は即座に否定した。番小屋にも、ここに至るまでの道筋にも、

朱香様の目となり耳となる妖らが潜んでいる。変事があればすぐに
も知らせが行き渡るはずだ。

「「」ちや「」ちや言つてねえで、様子を見に行くぞ」

雷火がじれつたそうに言つて、一足先に駆け出した。私も慌てて
走りだす。

人間たちがやつて来るのを待つて、一匹の犬も走りだした。耳は
立つているし、鼻面に皺も寄つていない。何を嗅ぎつけたにせよ、
脅威というわけではなさそうだ。だから朱香様も、まだお気づきで
ないのだろうか？

田畠の間の細い道を走り、木々の茂る小高い丘を登り詰めると、
例の断崖の上に出る。

黒い鳥がそこまで飛んで姿を消し、一匹の犬は崖つぶちから下を
覗き込んで、ゆっくり尾を揺らしていた。息を切らせながらも、真
理が用心深く身を乗り出す。そして、あつ、と短い声を上げた。

「誰か倒れてるよ」

「なんだ？ 里の奴が崖で足を滑らせて落つこちたのか」

雷火が拍子抜けしたように言い、ひょいと首をのばした。私も崖
の縁に近寄り、下を見る。真理の言つた通り、見慣れぬ若者が崖下
で伸びていた。

「里の者ではないな。どうやつて朱香様に気付かれず、ここまで来
られたのだろう？」

「ああもう、揃いも揃つて薄情な連中だね！ まずは息があるかど
うか、確かめるのが先だろ？ 正体だの何だの、そんな事は後回
しでいいじゃないか」

綾女は憤慨するや否や、崖を降り始めた。

「おい待て、危ねえぞ！ 待てつたら、この馬鹿！」

雷火が慌てて後を追う。私と真理は顔を見合させ、何とも言い難
い表情になつた。人間、慌てるとまつとうな考えが浮かばぬものら
しい。やれやれといった風情で、真理が一匹の犬に命じた。

「雪白、黒鉄、人成れ。綾女さんたちが落ちないよう助けるんだ。

それと、下にいる人が息をしていて、動かしても支障ないようであれば、ここまで運んで来い。……頼むよ

若い男の姿になつた黒鉄は、笑いを堪えて「承知」とうなずき、雪白は主の代わりとばかりに深いため息をついて、無言で崖を飛び降りた。

上から見守つていると、綾女が黒鉄の手を借りて地面に降り立ち、よそ者に駆け寄つて傍らに膝をついた。脈を取つたり、傷を確かめたりしているようだ。

「生きてる？」

真理が声をかけると、綾女はこちらを見上げてうなずいた。

「頭にこぶが出来てるね。あとは擦り傷と打ち身が山ほど。でも、大事ないようだよ。役人の格好とは違つけど、そちらの百姓じやあないね。どうするかい？」

問い合わせられ、真理が私を見た。どう、と言われても……放つておいて、のこのこ帰らせるわけにゆかぬことは明白だらう。

「朱香様の元へ連れて行き、詮議にかける。それよりほかにあるまい」

「詮議ねえ。怪我人なんだから、お手柔らかに頼むよ」

綾女が言つた時、雷火もようやく崖を降りて駆けつけた。そして、いきなりぎょっとして棒立ちになる。まるで死人でも見たかのように。

どうかしたのか、と誰に問われるよりも早く、雷火は何事かつぶやいた。綾女が「何だつて」と聞き返す。だが雷火は答えず、ふらふらとよそ者に近寄り、膝をついて、その顔を確かめた。

「おじさん！ まさか、知つてる人？」

真理が叫ぶ。うつむいたままの雷火の頭が、じつくりとうなずいた。

「弟だ」

その者は、雷火の弟にしては随分若く、顔立ちもあまり似ていなかつた。

「間違いない。弟の晴晶だ。なんでこんなところに……」

里に戻る道すがら、雷火はすつと呆然としていた。
崖の上まで晴晶を運び上げたところで、屋敷の下男が荷車を引いてやつて來たので、それに乗せて行くことになったのだ。下男は朱香様に遣わされたに違いないが、朱香様はいつから、このよそ者に気付いておられたのだろう？

不審に思つてゐると、綾女がそつと耳打ちした。

「崖下に雲隠れのお札が落ちていたよ。破れちまつてたけど、どうやら効き田は確かだつたみたいだね。こいつを身に着けて、朱香様の目を逃れていたんだろうよ。」

私は息を飲み、氣を失つたままの若者を見下ろした。では、里の在処のみならず、そこには無数の目が光つてゐることも承知だとうわけか。いつたい何者なのだ？

目を覚ます前に、ひと思いに殺めてしまつた方が良いのではなかろうか。

そんな考へがちらと胸をよぎつたが、傷ついて血の氣の失せた顔を見ると、己の卑怯さが恥ずかしくなつた。

「しかし、本当にあんたの弟なのかい？　あんまり似てないし、第一もう何年も会つてないんだろ？　確かにそつだと言える証でもあるのかい？」

綾女が雷火に尋ねた。私と真理も、答えを聞こうと目を向ける。
「晴晶とは腹違ひなんだ。俺のお袋は早くに死んじまつたんでな。もう……かれこれ十年は会つてねえが、この顔を忘れるわけはねえよ。少しこいくせに、いつも俺の後を追つかけて来やがつて。いつ

たい何度も、危ねえ目に遭つたことか」

懐かしそうに苦笑し、雷火は弟の頭にそつと手をかけて横を向かせた。

「ここんところに傷痕があるだろ。これも、俺の真似して木登りして、落つこちた時のもんだよ。懲りない奴だ、十年経つても同じことしてやがる」

その笑みにつられて、綾女と真理が小さく笑つた。私は複雑な気分で目をそらし、行く手の屋敷を見やつた。

朱香様は、この若者をどうされるだろ。行方知れずの兄を追つて来ただけならば……いや、それだけの理由でこの里へ忍び込もうとするなど、到底考えられぬ以上、やはり生かして帰されまい。となれば雷火は黙つていまいし、真理も刀を抜くだろ。

そうなつたら、我々は戦えるのだろうか？ いつも来るとも知れぬ敵に備え、武芸の真似事を受け継いできただけの我々は。

暗澹とした気分で屋敷の門をくぐると、いつもより尚のこと、空気が重く感じられた。

庭に出ていらした若様が、陰にこもつた表情で私たちを迎えられた。

「その者は離れに運び、手当をしてやるが良い。だが、逃がそなうどとは考えぬことだ。春陽殿は母屋へ参られよ。朱香様がお待ちだ」「畏まりました」

私は頭を下げ、若様の顔を見ないようにして、その前を通り過ぎた。怪我人の容態が気にはなつたが、綾女がついておるのであれば、間違いはあるまい。それよりも、これから聞かされるであろう言葉の方が恐ろしい。

しかし朱香様は、今日ばかりはさすがに厳しいお顔であろうと予想したにもかかわらず、いつもと同じくにこやかな笑みを湛えておいでだつた。私が面食らつていると、朱香様はさらに当惑する言葉をかけられた。

「春陽殿、今日も親しうつ話しておつたようじやが、真理の様子は

どうだえ。少しほここの里に馴染んで来たかの」

「は？……はあ、ここの里が気に入つた様子ではありますが」

歯切れ悪く答えた私に向かつて、朱香様は満足げに何度もうなずかれた。

「良いことじや、良いことじや」

「あの……差し出したこと申しますが、今は真理のことよりも、晴晶とかいう者の方が問題ではありますか」

「ほう、あの者は晴晶というのかえ」

「雷火の弟だそうです。何の目的で里に近付いたのか、ほかにもこのを知る者がいるのではないか、と懸念しているのですが」

今さら言つまでもないことをぐだぐだ述べているようで、私は自分が馬鹿になつた気がした。そんな私を見て、朱香様は赤子をなだめるような口調で仰せられた。

「心配には及ばぬよ。あの者が何をたくらんでしようとも、今は我らの側に分がある。真理がここまで連れて参つたのは、葦生彦の御靈じや。深谷の葦生彦といえば、最後まで果敢に戦い抜き、天子にさえ血を流させた武勇の者と伝え聞く。お祀りして、里の新たな守り神になつて頂けたならば、恐るるものなどありはせぬよ」

「…………」

誓つて言つが、いまだかつて私は、朱香様のお言葉に異を唱えたことはなかつた。御前であんぐり口を開けて絶句するような、はしたない真似をしたこともない。

だが、今回ばかりはどうしようもなかつた。

「お、お待ち下さい。その御靈は真理に憑いているのでしょうか？ 里の守り神になつて頂くには、彼を生涯留め置くか……里の族に迎え入れねばなりません」

つまり、里の誰かを妻せるということだ。それも、誰でも良いとはゆかぬ。相応の家柄の者でなければ。しかし、佐伯の本家には若様お一人。分家も女は私しか……

唖然としている私の前で、朱香様はホホホと小さく笑われた。ま

さか、いへりなんでもそんなはずがない。私は若様の許婚ではないか。

「やう急がずとも良い。晴晶とやうこひては両面、里に留め置けば良からう。始末しようとして、真理を敵に回しつないから」

「朱香様、私は若様の」

「良い良い」

言いかけた私を、朱香様は手の一振りで黙らせてしまわれた。その面には相変わらず笑みがあつたが、それはもう、何の温もりもない冷ややかなものになつていた。

「あれにはまた、別の嫁を見繕えば良い。新しい血を入れる潮時じやううて。真理の方が、力も分別も備えてあるし、良い婿になるじやうう」

「朱香様……」

「おお、そのように恐ろしげな顔をするものでない。何も今日明日に祝言を上げよとは言つておらぬ。そなたも真理もまだ若いのじやからな。む、もつとがるが良い。離れに行つて、怪我人の手当を助けてやるのじや」

私は無言で頭を下げながら、込み上げる吐き氣と懸命に戦つていた。

なんとこゝ事だらう。最初から朱香様はそのおつもりだったのか。真理から田を離さぬよういいつけられた時、親しゅうなれと言われたのは、そのためだつたのか。

いつたい、若様のお立場はどうなるのだ。本家の嫡男でありながら、かようにないがしろにされるとは、信じられない。真理に至つては所詮よそ者、朱香様のお言葉に従つ義務などなかるう。彼が拒めば、どうされるのか。考えるとぞつとする。

おぞましい。

初めて私はそう感じた。この本家の屋敷が、ここに渦巻く空気が、朱香様が、おぞましい。それらを当たり前として受け入れ、崇め奉る里のすべてが、おぞましく厭わしい。私自身さえも。

私は身震いすると、夢中で離れへと走った。一刻も早く母屋から出たかったのだ。

真理たちの姿を見ると、我知らずホッとした。よそ者の三人が揃つているこの部屋は、空気が違つ。綾女が振り返り、目を丸くした。「ちょっと、大丈夫かい？ 真つ青じやないか。ほら、お白湯を飲んで」

綾女は慌てて火鉢から薬缶を取つた。差し出された湯飲みを両手で包むと、温もりがじんわりと身の内側まで染みてくる。

真理が不安げに振り向き、小声で問うた。

「晴晶さんのことで何か言られたのかい」

私は黙つて首を振つた。あんな話は、とても説明する気になれない。私は白湯をぐつと飲んで氣を落ち着かせてから、口を開いた。「その点は今のところ、心配ない。何者であろうと、ひとまずは里に留めておけば、外の者に知られることはなかろうと仰せられた。既にこの者が吹聴してまわつていれば、また別であろうがな」

横たわつた晴晶の顔を見ると、何やら哀れに思われてきた。何のつもりかは知らぬが、このような呪わしい谷に踏み込むなど、不運としか言いようがない。真理たちも同じだ。早く外へ帰らせてやらねば。

「ねえお春ちゃん、何があつたんだい？」綾女が遠慮がちに問うてきた。「随分と思い詰めた顔をしてるじゃないか。あたしらじやあ、力になれないかい」

「何でも言つてみろよ」

雷火までがそんな事を言い出したもので、私は思わず顔をしかめてしまつた。お節介の綾女だけならまだしも、こ奴までがどういうつもりだ？

私の渋い顔を見て、雷火はにやりと笑つた。

「恩を売れる時に売つておかねえとな。真理の頼み事もまだつてのに、晴晶のことまで加わつちや、立場が弱まる一方だ」「呆れた奴だな」

思わず言つてから、私は堪えきれずに失笑した。ふざけた男だが、人の心を軽くする術を心得ている、ということかも知れぬ。と、話し声で気付いたのか、晴晶が小さくうめいて身じろぎした。

二　侵入者（3）

「おや、お田覓めのようだよ」

綾女が言つて、ひょいと顔を覗き込む。雷火も枕元にじり寄つた。

はじめのうち、晴晶は自分が置かれた状況を理解できない様子で、心細げにきょときょとしていた。が、すぐに雷火を見付け、

「兄上！」

叫ぶなりがばつと飛び起きた。直後に頭を抱えて突つ伏したのも、さもありなん。

「相変わらず無茶をする奴だなあ、晴晶。大丈夫か？」

弟の背を支えて雷火が苦笑した。今度は晴晶もゆっくり頭を起こし、恥ずかしそうな笑みを見せた。その笑顔があまりに人が好さそうで実直なものだったから、私は思わず見とれてしまった。水神の社に参る外の村人と同じ、羨ましいばかりの屈託なさ。外の人間とは皆、このようなものなのだろうか。

私の視線には気付かず、晴晶は兄の顔ばかり見ていた。

「なんとか生きてはいるようですね。ここがあの世でなければ、ですか」

「場合によつちや、じきにあの世へ行くことになるかも知れんがね」雷火は皮肉っぽく言つて、枕元に胡座をかいだ。晴晶は眉をひそめ、やつとまわりを見回した。不安げな様子の彼に、雷火は容赦なく、厳しい口調でただした。

「晴晶、正直に言え。おまえ、何しにここへ来た？ ご丁寧に雲隠れの札なんてものまで用意して、たつた一人で隠れ里に乗り込もうなんぞ、正氣の沙汰じやねえぞ」

いきなり問い合わせられて、晴晶は途方に暮れた面持ちをした。そして、つぐづぐと兄の顔を眺め、悲しそうに首を振ると、いわく。

「苦労なさったのですね、兄上。おいたわしい。これほど荒んでし

まれたとは」

途端に、綾女と真理が盛大にふきだした。無遠慮にげらげら笑いこける一人に、晴晶は困惑し、雷火は真っ赤になつて怒つた。

「おまえら、俺は眞面目な話をしてんだぞ、笑うな馬鹿野郎！ 晴晶ッ、おまえも話を逸らすんじゃないねえ！ ちやんと答えろ、ちやんと！」

私はとこり、ただただ呆気に取られるばかりであつた。この晴晶という男、図太いのか阿呆なのか、どちらだ？ 己の立場が芳しくないことは、まともな頭であれば想像がつく、だらうに。

怒鳴られても晴晶は一向動じず、平然と応じた。

「何しに、はいでしょ。私はずっと兄上を探していましたよ。楠本で兄上らしい賞金稼ぎの噂を聞いて、役人に消息を尋ね、なんとかこの里の噂を聞き出したんです」

「それでそこいらじゅうあてずつぱうに探し回つたつてのか？」

「いいえ。ちょっとした占いに頼つたんですよ」

さすがに皆が変な顔をしたので、晴晶は懐を探つて、小さな盤を取り出した。私も身を乗り出して覗き込んだが、見たこともない異国の文字が記されていた。方位か暦か、そんなものを示すものであろうと察はついたが、なんとも不可解だ。

「最近、都にはこの手の物が入つてきているんです。失せ物や行き方を占うもので、巫師や神官でなくとも、手軽に扱えるんですよ。当たるかどうかは、人それですがね。それはさておき……」

晴晶はそれをまた懐にしまうと、改めて一同を見回した。布団の上で居住まいを正し、深々と頭を下げる。

「申し遅れました。私、名を晴晶と申します。どうぞお見知り置きを」

私と真理が慌てて座り直すのを尻目に、雷火が「畏まる必要なんざねえよ」とぞんざいに手を振つた。

「そいつが巫師の綾女、小僧が見習い神官の真理。そつちにいるのは春陽つつて、この里の姫さんみたいなもんだ」

「それは、大変失礼を致しました。兄共々、お世話になりまして恐縮です」

晴晶はこちらに向き直り、再び頭を下げた。あまり恭しくされて、私はかえつて落ち着かなくなってしまった。

「気遣いは無用だ、晴晶殿。姫などという身分ではないし、いずれにせよこのような鄙辺のこと。樂にして頂きたい」

「俺たちの時と随分態度が違うじゃねえか」
ぼそりと雷火が毒づく。私の代わりに、綾女が雷火を小突いてくれた。

「馬鹿だね。礼儀つてのは先に示さなきや、返して貰えるもんじゃないよ。まったく、あんたがいいとこの坊ちゃんだったなんて、信じられないね」

「放つとけ。坊ちゃんは十年前に廃業したんだ。おい晴晶、俺を追つかけて来たとは言つが、おまえ、安倍様のところで世話になつてるんじやなかつたのか」

「ええ、おかげさまで、佑筆の職に就けて頂きました。ですが兄上のことを見れた日はありませんでしたよ」

懐かしそうに晴晶が言つた。どんな理由で兄弟が離れ離れになつたのだろう? 何やら他人の家で世話になつているというからには、生家が焼けでもしたのだろうか。

「都にいれば、あれこれと各地の噂も耳にします。近年、兄上のことと思しき噂がちらほら届くようになつて、居ても立つてもおられず、暇を頂いて参りました。安倍様は、兄上が見付かつたら屋敷に迎えると約束して下さいましたよ」

「おいおい、そんな話、勝手に決められても」

「あの頃に比べ、安倍様のご權勢も回復して余裕があるんです。だから遠慮なさりずに、兄上、私と一緒に帰りましょう」

「参つたな……」

雷火はどうにも困り果てた様子で、頭を搔いてばかりいた。はるばる都から旅してきた弟の頼みだけに、無下に出来ぬのだろう。彼

が返答に窮しているようなので、私は助け舟を出してやつた。

「晴晶殿。お忘れのようだが、朱香様のお許しがなければ、新聞の里から出る」ことはかなわぬ。おぬしはこの里に至る道を知つておるのだから

「えつ？ ああ、そうか、そうでした。」これは隠れ里でしたね」

晴晶は一瞬きょとんとし、それから思い出したように手を打つた。そして、いかにも無邪気な様子で、ずばりと核心を突いてきた。

「役人に知られては困るような、財宝や武器でも蓄えているんですか？」

「…………」

今日はよくよく、絶句させられることになつてゐる。この男はどうやら、図太い上に阿呆のようだ。誰もが一の句を継げずにいふと、晴晶はこまかすように頭を搔いた。

「ああ、失礼。どうも私は突拍子のないことを言つて癖がありまして。いえ、私は兄上さえ連れて帰れたなら、この里への道は誓つて誰にも明かしません。でもね、朝廷が本腰を入れたら、見付からないわけがありませんよ。私だって見付けられたんですから。その時に武器や財宝があれば悶着は避けられないでしようけど、そうでないなら、そんなに必死で隠れる必要はないんじやありませんか？」

けろりとした顔で、里の者の常識を根底からひっくり返すことを言つてのける。私はめまいを堪えるのが精一杯だった。

「まあ、租税は払わなくちゃいけなくなるでしようけどね……春陽殿？ 大丈夫ですか、どこかお加減でも？」

「おまえの言い草を聞けば、具合も悪くなるさ」雷火がうんざり唸つた。「この連中にとつちや、朝廷は先祖の仇だ。俺たちにとつて弓削の中将が親の仇なのと同じだ。それを否定されちゃ、連中の立場がねえだろうが」

剣呑な言葉のせいか、綾女がびくと顔をこわばらせた。だが当の晴晶はのんきなもので、ああなるほど、などと納得している。

「でも兄上、私たちの場合ほんの十年ばかり前のことだし、我が

身に降りかかったことだから、今もしこりがあつて当然ですが、この人たちについては何百年も前のことでしょう。それなのに、いつまでも恨みつらみにとらわれていちゃあ、もつたいないですよ」「もつたないって、何が

「人生が。せつかく今こうして生きているのに、心を暗く濁したままで、つまらないじゃありませんか」「！」

私は思わず息を飲み、目をみはつた。晴晶が振り向いて、「ねえ？」と笑いかける。

己の言葉がどれほど私に衝撃を与えたか、言つた当人はおそらくまるで分かつていらないだろう。つい先刻、私が抱いたおぞましい思いを、この男はいとも軽やかに、明るい言葉に変えて解き放つてしまつたのだ。谷に瀟む、いにしえのままの、腐臭漂う空気を……眉をひそめさせず、春風のように朗らかに吹き散らしてしまつた。

何も知らないよそ者だから言えることだ、と、心の片隅でいじけた鬼がひがむ。だが私はその声を握り潰した。違う。晴晶と雷火には、親の仇がいるというのだから、恨みがどんなものかを知らぬわけではない。

私だけではなく、真理も、雷火も、綾女も……皆、愕然として晴晶を見つめていた。

ややあって、雷火が苦笑をこぼした。

「簡単に言つてくれるぜ。だがそんな破天荒な言い分が、あの婆さんに通じるかねえ」

「信じて貰えるよつに、なんとか説得します。もちろん帰る時は兄上も一緒ですよ」

「その話は、帰れると決まってからにしやがれ。とりあえず、今はもうちよつと休んでる。派手に落っこちて、あちこちぶつけてるんだからな」

兄らしいいたわりを見せて、雷火は晴晶を横たわらせる。晴晶は「平気ですよ」と抗議したものの、しゃべり疲れたらしく、じきに

すうと寝入つてしまつた。

私たちはそつと音を立てぬように部屋を出て、離れの別室に移つたが、腰を落ち着けるや否や、綾女がため息をついた。

「雷火、あんたの仇つて……」

「昔の話は止そうぜ。いまさら、どうだつていいしな」

何やら含みのあるまなざしを交わし、二人はいつたん黙りこんだ。綾女が気を取り直して顔を上げ、小声ではあるが、私や真理にも聞こえるように言つた。

「あれは食わせ者だね。嘘をついているのかも知れないし、言葉は本当でも隠し事をしてるのかもしない。とにかく、自分で言つ通りの者じやあないよ」

「サトリにも分か……」

言いかけて、真理があつと口をふさぐ。それから彼は、そろそろと私の様子を窺つた。なるほど、綾女の肩に時々妙な気配を感じたのは、それだつたか。

「道理で妙に勘が鋭いと思つた」

私がそれだけ言つと、綾女は「ごめんねえ」と苦笑で詫びた。

「いつでも心を読んでるわけじゃないんだけど、サトリつてのは人の都合なんかお構いなしだからさ。ただ、そのサトリでも心の読めない人間つてのはいてね。考えがあんまり漠然としていたり、心に壁を作られたりすると駄目なんだよ。巫師や神官には、そういう事が出来るのが多いからね。それに、自分で嘘をついているつもりがなければ、でたらめ言つても、そうとは分からないし」

「つてことは、晴晶の奴、実は巫師なのか？ 占いで里のありかを見付けたなんて言つてやがつたが、誰にでも出来るとは思えねえしな」

雷火が唸ると、綾女は首を振つた。

「何とも言えないね。あの盤はお師匠さんの持ち物の中にも、似たのがあつたような気がするけど……あたしも都を離れて長いからねえ。ともかく、晴晶からは目を離さない方がいいよ。下手な真似を

してくれたら、あたしらまで立場が危つくなる。やつといわ村の衆にも馴染んできたところだつてのに」

「 そうだね。俺も今のところは、影を呼び寄せるよつなはめに陥らずに済んでいいけど、今度またあの影が現れたら、抑えられるかどうか分からぬ。大楠で少しほ修養を積んだけど、まだまだし……それにこの里には、性質のよく似たものが渦巻いてるから」

真理の言葉に、私はどきりとした。

性質のよく似たもの。すなわち、先祖の怨念、といつものか。私は不意にいたたまれなくなり、唐突に立ち上ると「また明日」と素つ気ない一言だけを残して、逃げるよう外へ出た。

日が傾き、茜色の光が里をとつぱりと漫している。谷底に落ちる紫根色の山影のひとつひとつが、巨大な御靈の姿に思われて、私は身震いした。

三 他所者のまなざし（一）

三

翌日、私は人目も構わず、村の外れに出て行く真理を追いかけた。『桜には少し早いかも知れぬが、例の変若水の祠に案内しよう。良いか？』

前置きもなくいきなりそう言い出した私に、真理は『田をばちくりさせたものの、理由は訊かず「もちろん」とつなぎいた。

この山に真理を連れて行くことについては、朱香様のお許しを得ていない。だが断りを入れようが入れまいが、結局は疑いを招くだろ？。なぜなら、我々が香具山と呼ぶこの山には、朱香様の耳目が届かないからだ。

特別に清い山であつて、しもべの妖』ときは入れないから、と聞いている。理由はともかく、朱香様に知られず話をするなら、ここしかない。まあよ、疑われたらその時のこと。白を切り通すしかあらまい。

道々、真理はのんきに山菜を摘んだりなどしていた。はじめは苛ついた私も、じきに、何か土産があつた方が言い訳がしやすいと考え、ワラビやウルイなど、目についたものを摘みながら登つた。

香具山は里のまわりではかなり低い山なので、頂に出るのは苦労はしなかつた。

不思議にぽかりと開けた草地があつて、そこに立派な桜の巨木が枝を広げている。蕾が紅に色づいて、ぽつり、ぽつりとほこりんでいる花が、名残雪のようだ。

そして、その木のほど近くに、小さな石碑と祠が座していた。

『いい眺めだね』

真理は谷間を見渡し、深呼吸などしてから、そこいらに腰を下ろした。黒鉄がその隣に寝そべり、撫でて貰えるのを待つていて。雪

白は少し離れた場所に伏せて、どうやら見張りをしてこちらしかつた。

私が真理の近くに座ると、彼は心得た風情で「それで？」と促した。

「内証話なんて、ばれたら怒られないかい」

「やましい事などない。由緒ある山に案内しただけだ。……おぬしには分かるか？ その、」

「うう、朱香様のしもべたちはいないよ。この山ではどうやら、佐

伯の一族が嫌われているようだから」

真理は意味ありげな調子で言つて、皮肉っぽくにやつとした。どうこう事だらう？

私が訝ると、真理はとぼけて肩を竦めた。

「理由を知りたければ、あの屋敷の蔵でもひっくりかえしたら、何が見付かると思うけどね。君の方は、俺に何の話があるんだい？」

「聰明なる貴君におかれでは、既にお察しのことかと存じ上げるが」

私は皮肉を返し、それから真顔になった。

「早くこの谷から出て行く方が良い。朱香様は、おぬしに憑いている葦生彦の御靈を祓い清めるおつもりはないようだ。いや、鎮めはするのだが、おぬしから離れてただ隠より一世にお帰り頂くのではなく、この地に守り神として留まって頂くおつもりらしい」「俺が強力な御靈と一緒に里に根付くことを望んでいる、ってわけかい？」

「いかにも。それで、その、要するにだ、手つ取り早くおぬしを……誰かと妻せるおつもりなのだ」

「誰か、って」

さすがに真理も面食らつた顔をした。だがすぐに、私の様子を見て察したらしく、見る間に赤面し、頭を丸くした。

「まさか！ 君は若様の許婚だらう？」

「私もそう思った。だが朱香様は、若様のことなど、まるで気にかけられぬのだ」

「そんなはずが……いや待てよ、そうか。そういう事か」

「ふいに何か思い当たつたらしく、真理は苦々しげに唇を噛んだ。

「何が『そういう事』なのだ？」

「朱香様は佐伯の一族よりも、本来の主の血筋を絶やすまいとしている、つてことだよ。確かにあの若様は、あまり体が丈夫そうにも見えないし、君の夫にするには不安があるんだろう。かと言つて里の者だと、先祖をたどれば皆、田下の卑しい者ばかりだ。外から入ってきた新しい血、しかも葦生彦の裔とくれば、うつてつけだらうや」

「いまいましげに言つて、彼は草をむしつた。

「……なに？ 待て、つまり、その言い方では……まさか、

「分家の方こそが本家だと言つのか？」

思わず声を大きくした私に、真理は憎らしいほど平然と応じた。

「分家でさえない、と思うね。君が聞かせてくれた言い伝えがあつたろう？ この山に登つた男は一人いた。だが降りてきたのは一人。ここで何が行われたか、誰が知つているつて言つんだ？ 靈水を手土産に降りてきた者の言つことを信じるしかないじゃないか」

「…………」

私は言葉を失い、呆然となつた。真理はどんどん話を膨らませていいく。

「これは想像だけどね。変若水を独り占めしようとしたのは、佐伯の先祖だつたかも知れない。本来なら首長になるべき人をここで殺し、その幼い跡取りたちの後見を引き受けて、結局は自分が首長の地位をものにした。佐伯と称したのは、己の所業を自覚していたのか、それとも秘密を嗅ぎつけた誰かに罵られでもしたのかな。まあ、そんな事があつたとしたつて、不思議じやないってことさ。ここに漂う気配からしてもね。あの祠は月神を祀るものじゃない。何かの祟りを鎮めるためのものだ、つて感じがするよ」

私は何とも答えられずにいたが、しばらくして深い吐息をつき、眉間に押された。

「おぬしらが来てからとこゝもの、驚かされる」とばかりだ。この半月ほどで、寿命が一年は縮んだに違いないぞ」

私のぼやきに、真理は愉快げな笑い声を立てた。私もつられて苦笑する。それを見て、真理が言った。

「春陽はもつと笑うといいよ。その方が似合つ」
思いがけないことを言われて、私は驚いた。似合つ、などと言われたのは初めてだ。

私の当惑を、真理は違つようにに解釈したらしい。慌てて彼は続けた。

「ああ、違つよ。無理に笑えつて言つんじゃなくてさ、君がもつと笑えるようになるといいな、つてこと」

「……それは、どうも」

変な受け答えしかできなかつた私に、真理はおかしそうに笑つて、谷の方を見やつた。

「この里の人は皆、何かに遠慮してゐるような笑い方をするからさ。もつと、心から嬉しそうに笑えるようになればいいのにな」

そう言つ横顔には、あの、慈愛に満ちた笑みが浮かんでいた。見る者の胸に沁み入る、優しく気高い笑み。それが里の皆に向けられていることが、たとえようもなくありがたく思われて、私は我知らず頭を下げていた。

「かたじけない。私もそう思う。いや、おぬしらが来て初めて、考えるようになつたのだが……もつ、この里も古い時代の怨念から抜け出すべきなのではないか、とな。そうすれば、我らも外の者のよう、に、屈託なく笑うことができるやも知れぬ」

真理は谷間を見つめたまま、答えなかつた。私も彼が見ているものを共に眺め、今までなく、それを愛しいと思つた。

暖かい風が吹き抜けてゆく。鳥がさえずり、木の葉がささやき、里で牛が鳴いて。

「そうだ、本来この谷は美しく、素晴らしいところなのだ。

「……晴晶さんはすごいね」

いきなり真理が言つたので、私は不意を突かれ、頗狂な声を上げかけた。辛うじてそれを飲み込んだが、はすみで喉を詰まらせたかのように、顔が赤くなる。幸い真理は遠くを眺めたままだったので、私は自分の奇妙な反応を見られずにするで、ほつとした。

「何があつたのか詳しく述べは知らないけど、きっとあの人だつて苦労したに違ひないのに。あんな風に軽々と恨みを捨てられるなんて、俺には真似できそうにないや」

「どうだらうか。あれは、過去を捨てているのではないようと思えるぞ。身軽くかわしているのか、あるいは……重荷を軽くする方法を知つてゐるのだろう」「う

「ああ、そうかも知れない」

つぶやくように言つて、真理が振り向く。そして、きょとんとした。どうやら私の顔はまだ赤かつたらしい。彼は小首を傾げてつづくと私を眺め、悪戯っぽく笑つた。

「なるほどね。それじゃ君としては、意に添わぬ婿には早く出て行つて欲しいわけだ」

「わ、私は何も……！」

反論しかけたものの、頭の中がいつぱいになつてしまつて、それきり絶句してしまつ。

真理はからかうような表情を見せてから、わざとらしく黒鉄に話しかけた。

「不思議だねえ、黒鉄。俺と知り合いになつた女の人は皆、俺じやない誰かを好きになるみたいだ。どうしてかな」

これには堪らなかつた。思わず盛大にふきだし、慌てて口を押されたものの、どうにも笑いがおさまらない。結局私は、のけぞつて大笑いしてしまつた。

相談をもちかけられた黒鉄は、つぶらな目でじつと主を見上げている。真理はその首に腕を回し、とぼけた口調でなおも続けた。

「別にいいんだけど。今はほかに大事なことがいつぱいあるからね。でもこの先ずつとこの調子だと、ちょっと寂しいかもなあ」

途端に黒鉄が真理の鼻をなめだした。笑いすぎて草の上に倒れてしまった私を尻目に、

「そりゃ、おまえは一緒にいてくれるよな」

などと、一人と一匹はふざけ合ひ。雪白がこひらを見て、聞こえよがしに深いため息をついた。

こんな底抜けに楽しい気分を味わったのはいつ以来か、もう覚えていないほどに久しぶりだ。何も知らない幼い日々に戻ったかのよう。

しばらくかかってようやく私が笑いやむと、真理は真面目な顔になつて言った。

「どうちにしろ俺はここに留まるつもりはないよ。だから、葦生彦の御靈を送ることができるたら、すぐにも出て行く。もし、どうしてここに里では無理だとなつたら……どこか別の隠れ里を探すしかないな。でもそうすると、君は結局、若様と結婚せらるるんじやないのかい」

「それは……」

最前までの楽しさが、あつとく間にしほんでしまった。

「仕方がない。私のつとめだ」

朱香様の言葉に逆らひことは出来ない。そんなことをすれば、里の皆さん災いを招くことになる。稻が毎年きちんと実るのも、疫病が里を襲うことがないのも、すべて代々の巫師が祭りを執り行い、ふさわしい縁組をしてきたから。それを崩せば、きっと里の暮らししそのものが壊れてしまう。

「朱香様が私と若様の縁組を書いたとされたのなら、それに従つのが里の安寧につながる。おぬしの想像するように、私が本物の……新間の首長となるべき血筋なのだとしたら、尚のこと、危難を招くようなことをすべきではない」

段々と、自分に言い訳をしていよいよ氣分になつてきた。古い時代の怨念から抜け出すべきでは、などと言いながら、私自身がそれに縛られ、あまつさえそれを良しとしているのではないか。

「確かに……何かを変えねばならぬとは、感じている。だが、そのためには里の暮らしを脅かすようでは、本末転倒ではないか？」

違う。私は恐れているだけだ。変化そのものが恐ろしく、そして新たな一步を踏み出した時に、そこに堅い足場がないかもしないことが不安で、立ち竦んでいるだけ。

真理は黙つて聞いていたが、私がそれ以上続けられなくなつて黙り込むと、静かに言った。

「嫌じやないのかい」

「そういう問題では……」

「俺が訊いたのは、君の心のことだよ。立場とか、出来る出来ないとかじやなく」

真理の声には、ぎくりとするほどの強さがあった。私が怯んで真理を見つめると、彼はふつと気配を和らげ、寂しげに微笑んだ。

「俺もね、昔、里の皆のためだから、つて……何も言わなかつたことがあるんだ。皆のなすがままに任せて、人柱にされるところだつた。助けられたのも、俺が助けてくれつて頼んだからじやない。結局それで、里を出て行くことになつたんだけど」

深呼吸をひとつ。草をむしつて、膝の上でくしゃくしゃにする。

「後悔したよ。しつこく何度も思い出しては、どうして俺が、とか、あんまりじやないか、とか、頭の中だけで抗議するんだ。でももちろん、もう済んでしまつた事は何ひとつ変えられやしない。あの時ああ言えば良かつた、つて思いだけがどんどん溜まって、濁んで、腐つていくんだ。おじさんや綾女さんに出会わなかつたら、本当に体の内側から腐つてたかもしけないな」

だから、と言つて、真理はまっすぐに私の目を見つめた。

「嫌なら嫌だと言つた方がいいよ。たとえどつにもならないよう思えて、さ」

「……私は」

ぱおり、と言葉がこぼれた。けれど、その先は喉につかえて出でこない。

私は……。でも、やっぱり、駄目だ、無理、無駄。
うつむいてしまった私の頭を、真理は黙つて、ぽんと軽くなだた。
まるで、ずっと年上の大人がするように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4558y/>

昏い道連れ

2012年1月13日19時03分発行